

辭氣—かき方

めていふ、「恐らくは人汝をもて畫工とせむ」と、筠圃是に感じて又畫かず。其の後故郷の甥の家いへに投宿せし時、甥氏紙筆を出して請ふこと頻しきりにして曰く、「母堂にはよきにまうさむ。吾にして君の畫を藏せずばあるべからず」と、一夜責むれども終に筆をとらず、一たびとどめし言を食まず。他人への義を省みて、甥氏に私せざるなるべし。書も亦次いでとどむ。かよれば世ますます其の書畫を珍重す。京師に住める事數十年といへども、俗習に染まず、世情に疎き事は、一日東山に往いてかへさ雨にあひ、二條加茂川の東なる賤妓の居處を過ぐ。簷下を歩みてこれを避くるに、妓ども「入り給へ〜」と頻に呼ぶ。先生歸りて人に語らく、「仁といふものは實に人の固有也。吾雨にあへるを見て、彼の輩頻に呼ぶ。傘を貸さむとなるべし」といへりしかば、人笑ひて、仁といふものと異名す。謙遜の跡は、其の相識悟心和尙の詩集の序を書かれしにも、其の辭氣弟子の列につくものごとくなれば、和尙辭すれども肯かず。是まさに予が知る所なり。凡近世の諸儒、誇大自負風をなすに表裏し、其の名の奇を好まず、字の常をつとむ。是即奇なりといふべし。されば郷黨に交はる事愚なるがごとく、友人と會しても必座を下りて懼るに似たり。終る時五十八。東山永觀堂の墓地に葬る。門人私に謚し行恭といふ。所著、備

簀を易ふ—死す

考録、經說、詩文集數卷、皆いまだ稿を脱せずして簀を易ふ。惜むべし。

駿府義奴

駿府客舎—静岡の旅舎

駿府客舎石垣甚兵衛といへるの者の僕八介、十一歳より此の家に來り仕へしが、十五になりける年、家衰へぬれば、奴婢皆暇を出せしに、八介は年まだ幼しといへども、「貧困を見捨て他へ行くべきにあらず。且二君に仕ふる志なし」とて、是より晝夜といはず、寒暑をさけず。或は山賤の業をなし、又賃雇の役に走り、唯錢を得るの多きを喜びて辛勞を厭はず、其の主の爲に心を盡せる事狀は、江戸芝の何某漢字に記し、又京にても是を假名に譯して、俱に印行せれば、今は唯題名を表するのみ。志あらむ人は彼の記を見るべし。伊勢參詣の供に雇はれて其の賃銀と路費をかねて金壹片を得、是を前日主に與へて、己は一錢も貯へず。晝は重荷を持ちながら物を喰はず、夜は窃に旅舎にかたひて、價を出さず宿り人々の餘飯を喰ひて過せしなど、其の外唯主の歡を見るを樂しみて、身を省みざる有様、又類有がたし。且敬を盡せるも亦人からは似すとぞ。寶曆五乙亥秋、府尹松前氏はを召し、伴り怒て、其の主甚兵衛が罪を算へて、「かよる無頼の者に志を盡す事

江戸芝の某—鹽谷岩陰

府尹—町奉行

上聽云々
將軍に上申し

はいかに」と責め、はては牢にこめむとまで試み給ふを、八介「主の罪は如何にもあれ、吾は恩重き事親に勝れり。幾程もなき老の生涯を見果てよ後は、命をも召され候へ。今吾なくば飢渴を誰かは救ひ侍らむ」と、詞を盡し泣き悲しみければ、府尹を初め諸吏皆聞くに忍びず、涙にむせびぬ。さて府尹「さきの言は汝を試みむための伴り也。懼る事なかれ」と、厚く是を慰め、終に上聽に達し、明る年正月六日錢五拾貫文、賞として官より下し賜ひ、府尹も是が至誠を感じ給ふあまりに、其の子息を侍食せしめ餐を賜ふ。後に或人金をもて彼の賜物の錢三五文を乞ひ得て、錦の袋に盛り家の寶とし、永く子孫に傳へて忠誠を勵まさむとす。他の家々も亦是に倣ふ人多かりしとなむ。

木揚利兵衛

江戸に日雇を業とする利兵衛といへる者あり。此の業を俗に木揚といへば、即稱とす。幼年の時仕へし主の家衰へ果てて、九旬ばかりの老婆頼むよすがもなくなりたるをばぐくむに、わが他に行きたる間、妻が仕ふる事の疎ならむを疑ひて、明くれば背に負ひて、わが行く所へ伴ひ、其の日の事業をなす傍に、物を敷きて据ゑ置き、わが喰ものをわけて

もてなす。其の外委しき事をば知らねども、此の一事をもてはかるべし。されば、官にきこえて大に賞し給ひ、賜有りけり。享保年間の事にて、世にひろく稱へたれば、京にても是が姿を繪にかき、事状をあらく記して、木揚利兵衛仁義禮智信と呼ばはりて賣りしがをかしかりしと、其の時を知る人語りぬ。

河内清七

河内の國日下の里に、樵を業とする貧者清七といへるものあり。母は富人の家の乳母たりしかば、貧しき世を経て、口腹の事に儉する事能はず。しかるに此の子孝ありて、朝には人よりも疾く山に入り、夕には人よりもおくれて歸り、其の間に他二人にあたるばかりの業をなす。其の一人が分は常のまかなひに充て、一人が分をもて母の好める食をととのへ、乏しけもなくもてなしけり。或日母鶉のあぶりものを望みたりしに、其の日は暮れたれば、明る朝とく起きて、市に行きて求めむと用意したる時、窓にあたる物の音せしかば、童どもが戯に土くれなどうちけるよ、とおほえながらいでて見るに、鶉二羽落ちて有りければ、喜びてとくすよめけり。孝のまこと至りけるなめりと、その里の豪

口腹の事
食事



農日下氏伊駒山人の話なりとなむ。

大和伊麻子

大和の國葛下郡竹内村に寡婦あり、伊麻といふ。年六十にあまりて猶老いたる父に仕へて孝篤し。寛文十一年辛亥六月、老父病甚しくして、日を経て飲食をおもはざれば、伊麻歎く事頻なるに、十二日すこし病のひまある時にいふ、「もし鱒魚あらば是を喰はむ」と。されども、此の里山中にして、覓むるによしなれば、如何すべきとまどへるに、夜いたう更け過ぎて、瓶の水に音あり。伊麻驚きあやしみ起きて見るに、好める所の鱒魚瓶中にをどりければ、喜びとりて膳にとよのへ進めしに、是より父の病日々、快く、常に復りし旨、芭蕉庵桃青、貞享五年四月に大和路を行脚のついでに聞きて、涙とどめがたかりしと、やがて京に來りて、書家雲竹に語る。雲竹もまた感ずるの餘りに、みづから大和に往いてその婦にまみえむとせるを、門人友竹爲に代りて行き、其の姿を寫し來れりと、即雲竹其の畫像の上に自筆にて記せり。同年八月既望とあり。芭蕉雲竹共に聞ゆる人にして、見聞の確なる證此のごとし。さきに記せる日下の樵者と同日の談に

芭蕉庵一俳人、正風體の開祖

既望一十六日

して、王祥が氷の裏の鯉、孟宗が雪の中の筍を、たゞ昔の物語とのみ、なほざりに聞き過す人を驚かすに足るものか。

近江新六

近江蒲生郡安土に新六といへる貧農あり、予がもとにありし僕が兄也。其の妹と共に九旬に及ぶ父に孝ある聞えありて領主より(大和郡山)賜にあづかれり。其の折とりあへず予が八幡の家に来て告げしかば、對面して、「如何なる事をなせし」と問ひつるに、「いとふしぎに侍り。いまだ孝といふものすべきやうをだに知り侍らず。唯年老いたる人なれば、心に逆はぬやうにと思ひ侍らふばかりなるに、かく賞し給はるは心得ずながら、何にもあれうれしさに、たのむ所の御寺と、此の御もとへは、とりあへず告げ参らするにて侍ふ」といひき。そのさま露も言を飾るにはあらず、おもふまゝをふつよかにいひたるなりき。他日その里の人にとへば、此の親常に檀寺に詣づることを喜ぶに、さのみ遠からねど、九十の翁なれば、行歩かなはず。それを日毎に竹輿に乗せて、妹と共に昇きて、心のまよに詣でしむ。湯を浴する時は、おとどひ抱き抱へて浴せしむ。何をいと

王祥云々
晋人、性至孝、氷中に鯉を得て母に進む
孟宗云々
吳人、性至孝、雪中に筍を得て母に進む
領主―柳澤家

檀寺―且那寺
おとどひ―兄と妹と

忠臣は云々
―後漢書韋彪傳に出づ

ひたてて希有なりといふべき事はなけれど、暇なき身にて、かくあつかふなむ、及ぶべき事にはあらず。唯其の身はさも思はぬさまなりと云ひき。予が許に使ひし者は、此前死して年月もやと積りたれど、昔わすれず時々に来とぶらひしかば、この折もかくとみに告げたる也。忠臣は孝子の門にもとむといふも思ひ知られ侍り。されば、彼の告げたりし時、予も端布をあたへてよろこびをのべ、またかれが心得やすかるやうに、うらやまし親につかへてまことある人ぞと世にも仰ぐ譽れはとうちおもふまゝを書きつけてやりき。

龜田久兵衛

龜田久兵衛は、書家窮樂が養子にて、もと窮樂住みける近隣にありし寡婦の子也。十餘歳の時母と共に物詣し、人たちこみたる中にて、過りて傘をとりかへて歸り、これをかへすべきよしなきを憂ふ。母「何かは苦しむらむ。ましてこれはわがのよりも新らしければ利を得たり」と云ふに、「否其の新らしきが故に尙返さではあられず」と答ふるを、窮樂聞きつけてやがて取りて子とす。(窮樂能く人を知るといふべし)さて年來書を學ばし

め、文を讀ましむるに、洋をぬけて共によくす。さるに、ある時父、「汝は木綿を商ふべし」といふ。久兵衛驚きて、「吾不才には侍れど、學を好み、はた君の業を嗣がむと勵みはべるに、何の御心になはぬ事ありて、かくはのたまふや」と歎く。「否さにはあらず。始より汝には交易を業とせしめむと思へり。されど、得分多きものにかよりては、かへりて怠もし禍も生ずとはかりて、利の微なる物をこれかれの人にとひ聞くに、油紙木綿に過ぎたる小利の物なし。それが中にも、油は時價の高下甚し、紙は品多くて煩はしといへば、木綿をと思ふ。いづこにてもこれをもとめてうれ」と教ふるに、(窮樂が思惟甚奇特なり)やがて其の日、近き所の木綿商人に語らふ。商人此の男をまだ知らねば、云へることは、「いかにも窮樂翁の御息に違はずば、木綿は何計も與へまるらせむ。但しさきに人傳をもて翁に頼み參らせし書もの有りて、久しく果し給はず。若し之を携へ給はば證とすべし」と。久兵衛即父にしかくといへば、「けにさる事あり」とて、直に書きて與ふるを持ちて至る。こよにおいて商人其の約のごとく賣物を與へし程に、あすともいはす荷ひて賣り歩く。其の後又父あるむすめをとりて娶せ、宅を異にせしむ。宅ことなりといへども、夜纒に明くれば、やがて翁の許に行きて、戸外よりうかがふこと一度二

度に及び、翁眼覺めたる時、身じろきの音にまれ咳聲にまれ聞きつければ、「久兵衛參りたり」と告げて内に入り、湯水より食事の取まかなひをして、吾が宅に退き、さてまたあきものに出でむとする時も、「今參る」と告ぐ。歸りてもあつき時寒き時をもいとはず、そのまよに至り、安否をとひ、休めといはざれば去らず。此の住居同じ街なれども、あまりに度々往來する孝心に感じ、あたりの人々尙も近かれとはかりて、明きたる家の壁をこぼちて通はしめたりとなむ。或年窮樂下血を病みて、臥牀を汚す事時なきを、自ら取り捨て清む。妻恨み歎きていふ、「是はわがすべき業なるを、君まかなひ給ふは、心を隔て給ふや」と。久兵衛首をふりて、「いな、われは親なるゆゑにする也。汝もまた同じとはいへど、心のうちにけがらはしと思ふは必定なり。露ばかりもさおもはむには、父の爲めいたはしければ、せしめず」といふを、妻もさるものにて、いかで透間もあらばわが取あつかはむとせしかど、其のひまなかりしとなむ。是にてよろづの仕へのやうを知るべしと窮樂門人の話也。又語らく、窮樂も親ある時孝なりし。其の一つをいはば、ある時、筆を染めて字の篇を書きたる時、母呼びしかば、たどちに至る。さて事はて座に復し、傍を書きつ。其處へ門人來りしに告げて云ふ、「およそ偏の勢をもちて傍を書か

ざれば、はなれぐになり侍るを、唯今かうくになりしに、おくれて書きし傍のつりあひ、常よりもよし。是他なし、母の蔭也。親といふものは有がたきもの也」と云へりとぞ。おもふに自此の如き孝心ありて、また此の如き孝子を得しは、自然の報ならずや。窮樂洒落の趣は後に傳をたつといへども、其の徳行の事實におきては、久兵衛の因にこゝに擧ぐるのみ。

凡近來民間に忠孝の行實多きは仁風の化によるべし。されば、見聞く人もまたこれを喜びて筆記し、上木に及ぶ故に、今繁く出さず。古きがもれたると、今生存の人とは、花頭子が拾遺の擧に委ぬ。

近世畸人傳 卷之二

三宅 尙 齋 竝妻女

尙齋三宅氏、名は重固、通名丹治といふ。山崎闇齋先生の門人にして、爲人剛毅、經學を任とす。はじめ阿部侯に仕へて世子の傳となる。世子忍びて花柳の街に遊ぶ事を憂へて、しばし諫むれども用ひられず。その近侍二人も此の人の門生也。是また諫を入るれども用ひられぬのみならず、花街に誘はるゝ時々あれば、義にあらずとして終に亡命す。こゝに於て丹治もまた亡命せむ事を計りて、一室に禁錮せらる。されば始めに自殺せむと思へりしかど、よく思惟するに益なし、昔の聖賢も憂にあたりて著述ありし、吾もこれに倣はむと思ふに、紙筆を與へざれば、詮方なし。辛うじて、釘の折れたるを拾ひ得て、さて風寒に犯され、鼻涕出づるよしを云ひて、紙を多く乞ひ、彼の釘もて身を傷り、血を墨とし、葭の折れたるを噛みて筆とし、易説を草す。三百枚に及べり。後に許されて京師に上りしかども、尙三都の住ひを禁ぜられしかば、吉田を氏とし、尙齋を名

亡命す―自國を脱走す

三都―京、江戸、大阪

中行一行よく中庸を得るを中行といふ、中行に過ぎたりとは中行にほづれたりといふ義なるべし

として隠れ住みしに、終に禁も解けて本の姓名に復せり。或年妖怪ある家を知りながら居を卜しに、其の妖止みたりとぞ。厚賜思ふべし。たゞし妖怪ある家と知りながら住みしは中行に過ぎたり、孔夫子の己甚をしたまはぬをこそ法則とはすべけれど、閑散餘録に評せるは宜なり。

尙齋の内人、その徳、尙齋にも勝れりとかや。尙齋禁錮せらるゝ時、母堂と子二人を婦人に托して、金貳拾片を與へ、母堂の奉養、懇につとむべきよしを命ず。後三年を経て放たれし時、相見えて學家安全を喜ぶ時、婦人彼の金を出して尙齋に返す。尙齋大に怒りて「こは何事ぞ、如此ならば母君は窮し給ひし事如何ばかりならむ。汝不孝の罪いふべからず」と罵るに、婦人徐に答へて、「母君の奉養は心の及ぶ限り盡し侍りぬ。唯吾が身は人の爲に雇となりてせざる所なく、其の價をもて仕へ奉りし也。此の金はかく禁を許されたまはむ時の用に返し申さむと蓄へぬ。とらはれとなり給ひては、さこそ苦しうおはしまさむに、妻子の身として安くあらむものかと思ひて、吾等三人は、冬綿の衣を身につけず、夏蚊帳を室にたれず。かよれば母御の御爲に乏しき事なかりし」と語りしかば、尙齋も大に感じて其の勞を謝したりしとぞ。

僧 鐵 眼

寺格—寺院の階級
甘心—満足
黄檗山—明
黄檗山の
隱元來朝し
て建てし禪
寺、山城宇
治にあり
一切經—佛
教經典の總
名、凡て七
千餘卷
勸進せる—
僧侶が佛道
に關し俗人
を勸めて寄
附を求めし

僧鐵眼、諱光、肥後國本願寺末下の寺に生れ、既に妻もありしが、其の宗徒不徳无才の人も、寺格により上位に居ることを甘心せず、黄檗山に登り木庵禪師に従ふ。其の妻なる人尋ね登りしかども、對面せざるを慮りて、黄檗門前に旅宿して、師の出づるを窺ふに、或日果して出でたるを、強ひて誘ひければ、止む事を得ず伴ひて故國へ歸り、其の郷まで入りしが、ぬけて上途し、又黄檗に至る。法を嗣ぎし後、攝津國難波村瑞龍寺を建立せり。世人今猶鐵眼をもて其の寺を稱す。一切經の藏板を思ひ立ちて勸進せしに、其の料金集れる比、天下大に餓ゑしかば、師憐みて件の金を残らず施し、又前の如く勸進せるに、數年ならず又集りたるが、再び五穀不熟にて餓死多ければ、此の度も此の金を施行に盡せり。されども徳の至りにや、第三回の勸進にて藏經の印刻成就して、其の經を頒つ所の代金を、本寺より已下一宗の寺々に配ること今に於て同じ。(同宗に錦袋園といふ藥をうるも同じ。勸學寮より一宗に金を頒つ)此の師佛學深く説法能辯にて、俗間を化度する事多けれども生涯建立門にかより、自の腕力十分ならずといひて、吾が法嗣



を立てず、法弟寶洲和尚に寺を附屬す。是又他の難き所なり。寶洲も佛學に長じて徳業ありとぞ。

米屋與右衛門

砭針—戒め
正す

攝津國今津の里、米屋與右衛門といへるは、儒學に長じて節儉をつとめ、富豪なれども僕に交りて、自ら造酒の事をなし、世渡に怠られざれば、益々富めり。富めるに隨ひては益益陰徳を行ふ。或時親族の僕、主人の金百兩を遣ひ捨て行へなくなりしを、様々尋ね求めて深く諫めて後、其の百金を與へ、再び主の家へ歸らしむ。又此の里の内に道甚狭き所あり。されば火災あらむ時に人の難あるべきを恐れて、其の所を買ひて廣くす。又板橋は水災の時危しとして、石橋に造り替へぬ。此の類擧ぐるに違なし。尤常に貧人を惠むを所作とす。されば、此の人死せる時、遠近の男女集り、聲をあけて泣き悲しみける様釋迦佛の入滅も思ひ知られけると、見し人語りき。こゝにをかしき事は、其の悲みし人の中に、愚なる嫗ありて、「是ほどに學文したまへるさへよき人なるに、もしさもなればいかばかりよき人にてあるべき」と云へりしとかや。一語天下の學者を砭針すといふべ

内藤平左衛門

關東のならひ、貧民子數多ある者は、後に産せる子を殺す。是を間曳といひならひて、敢て慘む事知らず。貧凍餓に及ばざる者すら、倣ひて此の事をなせり。官の教あれども尙しかり。然るに、陸奥白川の傍邑須加川と云へる所に、内藤平左衛門といへる豪農是れを歎きて、年毎に縁を求めて、間曳かむと思ふ者有りと聞けば、其の養ふべき財を與へて救へり。「もと米價賤しき所なれば、多分の費にはあらず」と自は云へりとなむ。此の人篤實類なくて學を好み。されば、是のみならず、人を救ひあるひは道橋を造り、慈悲を行ふこと多ければ、領主も賞し給ひて、苗名帶刀をも免され、士に准らへらるよといふ。身まからむとせる時まで、孝經を枕邊に離たず。此の救ひの業も世々守るべきよしを遺言せしかば、今其の孫の代に及びても、猶もとのごとく、しかも續きて篤實の人なりとかや。或僧この慈心を聞きて、吾が寺の門を建てむ施財を求むるに、その人笑ひて、「吾は人のうれへを忍びぬ故に救ふなり。寺の門なきは何かは苦しからむ」といへ

領主—松平越中守

りとぞ。凡世の富有の者の所爲に異なり。

此の草稿を見て幻阿法師曰く、昔唐土にも子を間曳く類ひありて、有道の君子是を救へる事、群談採餘にて見しと、即寫して贈らる。賈彪爲新息長。小民貧困多不養子。彪嚴爲其制。與殺人同罪。數年間。人養子者以千數。曰。此賈父所生也。皆名爲賈。又東坡曰。鄂岳間。田野小人例只二男一女。過此則殺之云云。是もまた制して救へるよしなり。文長ければ之を略す。官人は人を救ふは尤仁政といふべし。されども、志あれば尙安く、庶人にして金を捨て救ふは甚難かるべし。中原の地にても間墮胎に及ぶは、尙間曳の類なれども、是は貧人の所爲にあらず、姪婦のみそかごとなれば、救ふべき道なし。歎くべし。

寺井玄溪

寺井玄溪は、其の父本多侯政利に仕ふ。其の國除して處士となれる後、玄溪京師に居て醫を業とす。元祿十三庚辰歳始めて淺野侯長矩に仕へ、醫をもて江戸に侍り。明年春。侯吉良氏に傷をもて、自盡を賜ひ、國除かむとする日、衆と俱に赤穂に至り、遂に退いて

東坡—宋人蘇軾の號鄂岳—地名中原—都會

京師に歸る。後日義舉の事起るに及びて、諸士と俱に參畫あづからずといふ事なし。共に東行せむとせるに及びて、良雄(大石氏)しひて止むるよしは、八月六日の手書に見ゆ。且三宅觀瀾の復讐録にも出でたり。良雄の書の大意は、「醫の任異なり。任異なるをもて行を俱にせば、われより驅催の誚あらむ事を憚る。しかじ留りて後事を理せよ。其の身命をいとひて留るにはあらず」となり、丁寧に言を盡す。觀瀾の記には、君臣の義異なる事なしといへども、仕ふる日淺く、且醫人は衆の爲めにしらるゝをもて、歩を動かさば必人あやしまむ、といふをもて止むともいへり。觀瀾もまた玄溪の知己なれば、定めてその説を聞き記す所なるべし。玄溪こゝに於てその言に従ひとまるといへども、息玄達をもて東行せしめ、諸士の病を護らしむ。復讐の事遂けて、その月廿六日江戸を發し京に還る。その厚きを見るべし。玄溪後又諸國の招辟ありといへども、并に應ぜず。正徳元年病みて京師に終る。凡此の舉、四十六士の事は人皆知れり、此の人の事におきては傳はらざるをもて、こゝにその義信のひとしきを著す。觀瀾と交殊に善きも、理義の間に暗からざる故なるべし。

招辟—官の召

檀弓—禮記の篇名

予私に思ふ事あり、禮檀弓に工尹商陽(楚人也)陳棄疾と吳の師を追ふ時、棄疾にい

はれて敵を射る。一人を斃して弓を報にせむとするを(商陽が仁、人を傷くるに忍びざるなり)尙勸められて又二人を斃す。一人を斃す毎に、其の目を擲うて、その御をとめて曰く、「朝には坐せず、燕にはあづからず、(朝に坐し、燕に預るは大夫殿上を許されしをいふ。商陽は士なれば、あづからずといふ)三人を殺す、亦反命するに足れり」と。孔子曰く、「殺人之中有禮」とみゆ。その官卑ければ、仕ふる所もまた是に應すべければ、その大夫にあらざるをもて、自言棄とす。しかれば、良雄、玄溪の東行を留るもの當れり。又義士の中三村包常(次郎左衛門といふ)は、纔に廚下の小吏として、その主の姓名をも知らざるべき程の者なれば、同志の諸士、或は財を貪るが爲ならむと疑ひしかども、始終志を變ぜず。その祿を食みてはその難に死すべしと思へるなるべし。是も商陽がいふ所、孔夫子の禮ありと宣へるをもて見れば、厚きに過ぐるともいふべけれど、此の舉、高祿の世臣といへども免かれて恥なきもの多き間に、此の如きは、有りがたしといふべし。予此の記を讀む毎に包常が志を憐むがために、因にしるす。

廚下の小吏
—淺野内匠
—頭分浪牒に
—一米七石二
人、酒奉行
三村次郎左
衛門—二人
は二人扶持

大石氏 僕

大石良雄、赤穂の城を退きて後、暫くその城下に在りてことを辨へ、京へ登らむとせる時、もと使ふ所の奴僕八介なる者、同じ城下に住めるが來訪ひていふ、「我も御供して京へ参り侍らむを、今は老いはてぬれば心にも任せず。これは御對面たまはる限ならむと、御名残いはむ方なし。たゞし何にまれ御かたみの物を賜らば、身のあらむ限御傍に侍る心地ならむ」と。良雄うなづきて、「けにことわり也。何ぞとらせむ」と、あたりを見れども、調度どもはや半は京へ送り、残れるも荷造りたれば物なし。硯の入りたる箱一つあるをあげたれば、金貳拾片ばかりありけるを、「せめて是を」とて與ふる時、八介大に息まきて、たゞちに投げ返し、「是が何のかたみぞ。身こそ賤しけれ、心はさばかり下らむや。此の度殿の不意になくならせ給へるは、吾等ごときすら限なく悲しく口をしきに、をめぐと城を明けて、はひ出づる心に比べらるるか。今はかたみもほしからず」とて、走り出でむとするを、さすがの良雄なれば、しひてとどめて、「いとことわり也。我あやまてり」。餘りに興ふるものなき故の事ぞ。今思ひよりたる事あり」とて、



押しすり、ありあふ紙引き擴げて、堤の上に編笠著たる士さむらひの、奴一人連れたるかたを
 書きて、「是はおほえたるや。わかくて江戸に在りし日、汝を連れて吉原の花街へ通ひし
 道のさま也。是はかたみともなりなむや」と云へば、忽大に喜びて、「これく、是にま
 さる御かたみなし。その時はかくありし、兎ありし」など昔語むかしがたりして、泣々暇乞ひて歸
 りしが、そのかける者、奴が女の聲に傳へ、その主なりし城下の醫生の家に珍藏せり、
 と、その國人の話なり。義士の奴に朴實清廉ぼくじつせいれんの者ありけるは美談とすべし。

小野寺秀和妻 附 秀和姉 秀和詠歌

赤穂義士、小野寺十内秀和の妻丹子は、灰方氏の女也。義氣風雅俱にその夫の行に配し
 て、殊に睦しかりける旨は、秀和より送れる數通の書に見えたり。初赤穂の難に馳せ下
 りたる時、彼處より、同姓十兵衛へ贈れる書に、「老母妻にも此の志は申し聞けず候。様
 子にてさとりたる事も知らず候。(中略)女にて聞きてもさのみ騒ぐまじきおほえ有之候
 間、仰せ聞けられ下さるべく候」と有り。又その明年復讐のため東行して後、極月十二
 日妻へ贈る文にも、「萬一如何様の難義かより來しとて、見苦しきやうにはしなし申、

さるまじく候。又何事もなき世の中にて候はゞ猶以ていか様にも渡世めさるべく候。心の
 働きおはしますと覺え候ゆる中々心安く存じ、今更思ひ残す事なくて、快くうち立ち候
 まと、そのもともせめての本望と思ひ給ひ候へかし」又二月三日の文にも、「そもじも安
 穩にも有るまじき歟。さ侍らば、かねて覺悟の事、取亂し給ふまじきと心安く覺え
 候」などのごとき、前後の詞に、その人から知らる。もとより此の催の心遣ひ多き中
 にも、書きかはされし趣にて、その風雅見ゆ。中にも極月十二日の文に、「此方のうた
 とりわき相坂の歌哀のよし、よく聞き給ふと存じ候。そこもとの歌さてく感じ入候。
 涙せきあへず、人の見る目を思ひ、まことに涙をのむといふ心にて、幾度か吟じ候。お
 くのかたまさり申すべく候。是につきても、必々歌御捨なくて、絶えずよみ申さるべく
 候」とあるなど哀にやさしくこそ。復讐のことおこりて後、此の婦人のよめるうたは、
 秀和の返事へんじに感じ入ると見えしもその外も傳はらず。平生によめりしは、夫婦ともにな
 たの師とせし金勝慶安のゆかりの人もてる直筆の寫を見しに、數首あるが中、すこしこ
 こに書き出づ。

なき人の墓に詣でし言書ありて
私按、此の亡人は秀和の母義にやとほし。

昨日まで問へば答へし言の葉に聞きこそかふれ松の下風

はる風を題して

咲きそむる外山のさくら匂ひ来て人おどろかす春の朝風

磐瀬てふ名所の題にて

くれて行く秋といはせの山風に紅葉かつちる音の寂しさ

などよろしとおほゆ。その兄藤兵衛は、同家に仕へながら、義に與せずはた後難を懼る故にや、秀和に通ぜず。その弟喜兵衛、他家に仕へて江戸にありしを、秀和とはれしかども、兄藤兵衛より不通のよしいひおくりしとて、是もたいめせぬよし、秀和妻室への文に書いて、「ぜひもなきお兄ごたちとぞんじ候。かやうの心にては、此方のなりゆきにて、そもじ殿もかまはぬにてあるべく、彌便もなく、一分の働にての渡世、太義千萬にて候」など見えたり。邨風柏舟の詩に、亦兄弟あれどもよるべからず、しばらく爰に往きて懇ふれば、彼が怒に逢ふといへるも、思ひ寄せられて哀なり。かよりしかば、秀和、同息秀富(幸右衛門といふ)自盡を賜へる後、おもひかねてや、數日食を斷ちて身まかるといへり。墓は平安本國寺の塔頭了覺院にありて、梅心院妙薰日性信女、元祿十六

邨風詩經
にあり

塔頭下寺

鬼録過去
帳

癸未六月十八日と刻す。鬼録には法名のうへに

妻や子のまつらむものをいそがまし何か此のよにおもひ置くべき

と辭世のうたを書き、自滅と記す。然れば刃をもて死せるにや。

○因に記す。秀和姉も、同義士大高源吾が母なり。是も義あり賢なりと知られて。源吾よりの文に、「我々共の(我々といふは第九十郎も義盟の人なれば也)親妻子に、御たより御座候ても力および申さず候。萬一さやうのことになり申候は、かねて仰せられ候通り、何分にも上よりの御下知の通り、じんじやうに御覺悟なされり。御はやまり候て御身を我と御あやまち成され候御事など、くれぐれ有るまじき御事にて御座候まよ。必常必左様に御心得なざるべく候。よの常の女のごとくに、彼是と御歎きの色も見えされ、愚におはしまし候は、如何ばかりきのどくに、心もひかれ候はむや。さすが、々の御覺悟の程御座なされ候て、思召し切り、かへりてけなけなる御勸にもあづかりせ候事、さて今生の仕合、未來の喜び何事か是に過ぎ申し候はむや。あつばれわれら兄弟は、土の冥加にかなひたる義と、淺からぬ本望にぞんじ奉り候。さきにての首尾のほどは、御心にかけさせられまじく候」など見えたるをもて知らる。秀和妻への文の中

に「貞立さまをよびむかへて、共に憂きを語り慰みて、久しからぬ御一期を見届け参らせられり候。頼置事にて候」とある人なるべし。

○秀和のうたも數々見しが、復讐の折、あづまへ出でたつ時の歌、其の妻への返事に見えしあふ坂のとは、

別れても又逢坂と頼まねばたぐへやせまし死手の山越
このうたの事なり。又志賀の浦にて、

古郷にかくてや人の住みぬらむ獨り寒けきしがの浦松
都のそらやうく遠ざかればとて、

ふるさとの心あてなる大比叡の山もかくるよ跡の白雲
口にくし時雨降りければ、

別れ行く思の雲のたちそふやけふもしぐるよ東路の空
所々にてよむうたの中にとて、

よりくしに都に歸る旅人の數にもれなむ身の行くへ哉
忘れえぬ都の友の面かけに道行く人をたぐへてぞ見る

又その折、うたのともたちのもとへおくれるは、
思ひ出でば音羽の山の秋毎の色を別れし袖ぞとも見よ

復讐の時、各姓名を金の短冊に書いて背につけたる、此の人も同じしるしの裏に書きつけし歌。

忘れめやもよに餘れる年をへて仕へし世々の君が情を
これは、先祖十大夫より世祿の恩を詠みし也。赤穂より妻への文にも、「吾ら存じの通に、

當御家の始より、小身ながら今まで百年御恩にて、おのくを養ひ、身あたよかに一生を暮し候」など見えし趣なり。また哀なるは、二月三日の文に、「幸右衛門事も、心安く思ひ給ふべし。我が此のうたにて、あきらめられかし。

迷はじな子と共にゆく後の世は心の闇も春のよの月
死ぬべきなれば、古郷も忘れたらむかとも思ひめさるべき。この歌此の比思ひつゞけし

まよ申し入れ候。膳部にいろくの春の野菜を出されたるを見て、
武藏野の雪間も見えつ古郷の妹が垣ねの草も萌ゆるむ

凡四十六士の詩歌連俳とて、此の一擧をしるせるものに見えしは、大かた市井の間、奸

小身卑賤の身分

連俳連歌と併諧市井町中

好事一物す
三宅氏一三
宅觀瀾

事の者の偽作と覺ゆ。三宅氏もしかいへり。此の老の歌右に擧ぐる所は其の眞蹟の寫しにて、かへりて世間の小説には見えぬもの也。猶數首あれどももらしつ。その平日の歌も見し中に、時雨を、

定めなき空とも見えす槇の屋に必過ぐる夕時雨哉

炭がまを、

山風に雪消の雲を吹きとちて烟短き小野のすみ竈

老後述懐、

老いぬればよそになされて古を語るをだにも聞く人のなき

などよろしと見ゆ。常にこれほどに詠まれたればこそ、心づかひの間にも、意の達せる歌は出できけめと殊勝にこそ覺え侍れ。又古學先生の文集に、此の母氏年賀の壽詩あるを見れば、その下流をも汲まれしか。この先生、他の慶弔につきて、由縁なき人に詩をおくられしとは見えざれば、しか思へり。

尼 破 鏡 附 曲 翠

破鏡云々
夫婦離別の
事、破鏡不
重照、落花
難上、枝に
據る

破鏡は、膳所の士、菅沼外記が妻也。外記は芭蕉の門人にて、馬指堂曲翠といひて、俳諧をもて世に知らる。妻は和泉岸和田の士の女にして、和歌を好み、筑紫箏の妙手也。一年夫と俱に故郷に赴き、播磨路を行きめぐりし道の記を書けるなど、文章もいとよしと、見知る人語られき。予も見むと欲すれど、いまだ探り得ず。外記は、傍輩の會我權大夫といへるもの、寵を恃みて、上下のためよからぬことども重り、人皆惡め共詮方なく齒を噛みしを、己が家に招き入れ、悪事を責めて殺害し、其の身も心靜に腹切りて失せしが、主君の非なる名を忌みて、私の争論にもてなしたれば、侯怒りて、その子内記といへるが江戸に有りけるも、自盡を命ぜられて家亡びぬ。されば、今もかしこには語り傳へて、忠誠を悲しむとぞ。かよれば妻は尼になりて、堺津に隠れ住み、もとより好める歌をよみ絲をならして、悶を遣りける。その箏の手、今もそこに残りて、破鏡流といへりとなむ。破鏡再び照さずといふ心をもて、薙髮の名につきけるも、貞操の意に風流見ゆ。曲翠の名は聞えても、忠誠の實は隠れぬ。まして妻は俳諧によらざれば、その徒も知らぬ人多ければ、惜くて聞くまよにしるす

遊女大橋

都島原の遊女大橋、實の名は律（もと彼所に大橋といへる名妓あり。歌讀み手書きぬるが、その手殊によければ、大橋やうといひて今に傳はる由。此の妓もその名を嗣けるとなむ）よろづみやびを好み。さばかりの女なれば、中々につひのよるべもなかりけらし。尼にならむと思へるを、老いたる母の爲いかにためらふ程に、栗原一素といへるは、世のすねものにて獨あるを、よき戯がたきなるべしと人あはせけり。其の家いとまどしければ、手づから雑事ども取まかなふに、猶歌物がたりを見ながらぞ飯をも炊きける。老の後彼の島原わたりを過ぎて、

よそに見て思ふもつらし身の昔うき河竹の里の夕は

此の歌、下句などのつどけがらは、まほならねど、心はいとあはれなり。またある人のもてる自畫贊の歌はをかし。

忘るなと契りし春は夢なれや寐覺とひくる初雁の聲

畫もよくすとはあらざるべけれど、其のさま風流に見ゆ。またある所にて見しは、海

邊の雪を、

和田の原波もひとつに苦しき雪を載せたるあまの釣舟

製にて酒を
容るる器
白隠和尚
高僧名は慧
鶴、駿河原
驛の人、明
和五年寂
投節俗曲
の名
ふしはかせ
音譜

花もみぢの時、男はもちいひを腰につけて東山に遊べば、己はさよえを首にかけて西山に赴く。かたみに才をたよかはしけるが、後に夫婦連れて有馬の湯に浴し、妻はそこに髪をおろしたり。さて禪にも参して、白隠和尚京師逗留の日は、常に詣でしに、折々冷泉寂靜入道殿に出逢ひ参らせしかば、和尚、「此の尼は、もと島原の名妓なり」と語られし程に、入道殿、「さらば昔の投節といへるものを覺えたらむ。唄ひて聞かせてむや」と望み給ひしに、「それはふしはかせいとむづかしくて、今は久しくなりて忘れたるが上に、老聲にては聲振りもまねび難し、其の比の小唄といふものも、今のふりにはあらず。きこしめさむや」とて、諷ひたりしも興ありしとなむ。おのれ未だ若き時、夫婦ともに知れり。夫はもと類ひなき遊蕩にて、美少年に淫し、家産をも破りしと聞けるに、後はあらくれし老法師にて、大聲にてよく物云ひ、萬のこと皆知れるおもよちして自負せるを、にくむ人もあり、興する人もありき。京のうちにては人の知れる男なりしも、今は四十年の昔なり。此の妻人に語りしは、「都の四方にて景物のよき所々、月を見るには聖護

川竹のうき
ふし遊女
の堺界
馴はまさら
で新古今
集
みかりする
狩場の小野
の檜柴のな
れはまさら
で戀ぞまさ
れる
のどみて
延引て
かぶしをた
ち髪を切

我に物言はせじとてする業か、あなにく。なでふ尼にならむする心はあらむ」と、罵るを、かたへの人しづめて、「先其のかけるもの見給へ」と云へば、やをらしづまりて取りて見るに、「もとのねざしを申すはいとつよましかれど、父はあるやごとなき御方に仕へ侍りし者の、後にははふれて朝夕の煙もたえふなるうちに、重くわづらひて、薬のあつかひも詮方なきに、みづから身を賣りて、あそびになり侍りぬ。さて後、父も母もなくなりしかば、あはれ、頼もしき人もがな、此の川竹のうきふしを遁れて尼になり、父母の爲、みづからの爲も、涼しき道の行ひをのみし侍らむと、神にも佛にもねぎつゝ、月日をわたりしに、此の主人の君、年比馴れ参らするまよに、この志をあはれと思して、我身をあまたの黄金にかへて、まづしばしとてなむ、御あたり近く住ませ給へりき。さてはやう本意とけぬべきを、さすがに人の心ははかなきものにて、馴はまさらでとか、御情の程のやるかたなく、今はと別れ参らせむことの悲しきに、けふはあすとのどみて、思はずに月さへ日さへ重り侍りぬ。かゝるよしをもゆめ知らせ給はで、御正妻迎へ給ふ障なすものと、いかにく屈思しつらむと、御心苦しうこそ。今宵對面給はらむと聞えさせ給ふにつきて、思ひ定めてなむ、かうかぶしをたち侍りぬるは、うきたることにはあ

とつ國は
水草清し塵
かゝる都の
うちはずき
ぬまされ
り玄僧
都の歌
うけたばれ
承はれば
たとく尊
くすし醫
師
たはれ遊
女

らぬよしを見え参らせむ爲なり」などやうに、尙いとこまやかにて、歌もありければ、刀自よよくと泣きて、「さる心あらむとも知らで、はしたなめつる事の恥しうくやし。今はたどわれを頼もしきものに思せ。いかにもく思ひ給はむまよに計らひてむ」と懇に聞ゆ。さて住みどころは京の内にてさるべき所をといふに、「いな、とつ國は水草清しとか聞ゆれど、しるべなき遠き境はさすがにえ堪へ侍らじ。大原の山こそ、昔より世を厭ふ人の住所としもうけたばれば、そこに身をおくばかりの草の庵しつらひて給へ」といへば、やがて言ふまよにしたり。それより行をのみして、いとたくてありへけるが、二とせばかりありて、こゝちなやみけり。さりければ、刀自聞きつけて、山里便なして、おして近き所に移しぬ。くすし迎へて、あつかはすに、尼いなみて受けず。やうやう日を経ければ、刀自いかにせむと頭をかきてわぶるに、あるものはからく、彼がたはれにてありし時のとも、大橋といふは、今は人妻にて、その所にあり、ものの心しりて、歌などもよむ人也、彼を呼びていさめさせ給へ、と教ふるに、いとよき事とて、やがて迎へていはす。尼うち笑みて、「そよ。刀自君のあはれみかへりみ給ふ事は、山にも海にもたとしへなきまでに侍るを、唯わが姉の君ぞ、事の心をよく知り給ふべければ、思

地獄餓鬼、地獄道、佛敎にて死後罪惡ある者の墮つる處

たうべじ―食はじ

ふ事きこえむ。たはれにてありし時の心盡し、いかにとかおほす。はづかしく悲しき事云ひ立つれば、地獄餓鬼などいふさかひもよそならず。それを遁るよだにあるを、かう本意のまよにおとなひして明し暮すなむ、あが身はたゞ今唯佛の國に生れたる思ひにぞ。されど、もとよりはかなきものにはるゝ女の心の上に、年もまだはたち比に侍るうへはなむ、後いかならむとも、あが心をえ知り侍らず。もしたゆむ心いできなむには、いかにあさましう口をしからまし。かう心地の清くあらむほどに身まからばやと思ひとりて侍ればなむ、病の平らぎぬべき薬はさらにたうべじと思ひしめ侍れ。おほよその人は聞きもわき給はじと、今まではかうも聞えずすぐせしを」など、いとねもごろにくどきつ、其のこゝろの歌をもよみしに、さしもの女も、いさむべき言なくてやみつ。さていくほどなく終へたりしが、露亂るゝけはひなく、めでたかりしとぞ。

右の事状は馬杉亨安とて九十有餘までながらへて歌好まれし老人、予が忘年の友なりしが語りて、其のころ何がしの朝臣假名ぶみに書き給ひ、又ある儒士眞名にも書きしが、今はいづこに紛れつらむ、その尼の名も忘れし、と惜しまれしを、思ひ出でて記す。物語文めかしく書けるも、かの假名ぶみの名残を思ひてなり。又かのかぶ

しをたちたる時のうたを、擬らへてよみこゝろむ。

一すぢに思ひたちぬる法のため千筋の髪は惜けくもなし

おなじく、薬をのまで死なむとせる時のうたになぞらふ、

ながらへてあらむものは我ながら後の心の頼まれぬ世に

いと拙けれど、彼の志の儘を續けたるなれば、手向ともなり侍らむやとてなむ。

石野權兵衛 弟 市兵衛

石野權兵衛弟市兵衛、兄弟は、京師四條坊門西洞院の東に、桔梗家といへる商家也。兄弟共に學を好み、堀川の流を慕ふ。且兄は兼ねて佛學をも好み、殊に三論に通ず。弟は本艸に委しく、又畫を能くす。又雅樂を好む事兄弟ともにひとしく、道遠しといへども音樂ある所といへば必行く。友愛深くして、兄の妻ある後も久しく同居す。弟學文などにつきて出づる時、夜更けて歸るに、戸を敲く事なし、纔に咳するを、兄速に聞きつけて戸を開く事常なり。もし聞きつけざれば、門に立ちて朝に至る。母没して俗忌五十日の間、その墓所烏部山に曉毎に詣す。奠供と花水を携へ丑刻過ぐる比宿を出で

堀川の流―仁齋學派―三論―佛敎の一派―論、百論、十門論を所依とす―本艸―支那古代の植物學―雅樂―本邦の古樂



丑刻—午前
二時、卯刻
は同六時
すびつ—四
角形の火鉢

て、卯刻近く歸る。兄弟伴ひて一日も闕くことなし。その生前の孝養知るべし。市兵衛は一甫と號す。後同街の裏家に別居して、獨身にて住めりしが、夏冬となく頭を物に包み、すびつのうへにやぐらをおほひしを、机にかへて書を見る。伊藤東涯松岡玄達二先生、折々に訪はれて談話有りし外、世に知る人少なし。草廬龍翁まだ幼くて、文よむ事は、此の一甫の勧めによれりと、此の多能友愛の事をも語られぬ。後の様もまたよく知る人に聞き。市中の隠君子にて、近世めづらしとぞ。

隱士石臥

此の傳、安藤爲章年山打聞に書かれしまゝをうつす。

石臥、若き程は長野采女と名乗りて、眞田伊豆守信幸朝臣に仕へたり。劍術の諸流を極め、手かく事大かた能書にて侍りし。神道家に立入りて道を尊み、禪教の學に深く、歌林にさへ遊びて、詠める歌多く侍りしが、皆忘れたり。たま〜記憶せしとて、東湖禪師の唱へられ侍りし。

三吉野は櫻の外に峯もなし花やつもりて山となりけむ人の家にて庭のさくらを、

一本こそ長閑には見れ咲き續く山は花より心ちるもの
隱遁の後は、左右軒と號しける。正徳三年より二十年ばかりあなた、東海道沼津にて身
まかりぬ。七十歳にてありける。もとより、隱遁の志深く、妻子をも持たで侍りけると
ぞ。

賣茶翁

薙髮—髮を
方丈—住持
の居室
知識—學殖
高き人

賣茶翁者、肥前蓮池人也。姓柴山氏、諱元昭、月海と號す。早歲薙髮、龍津の化霖を師とす。
化霖は黃檗獨洪禪師の弟子なるをもて、携へて黃檗に詣る。一日湛召して方丈に到らし
め、賜ふに偈をもてす。少年といへども其の才器異なるを知れば也。翁益々自勉む。二
十二歳に及び、痢を患へて困しみ、自ら安ずる事能はず。こゝにおいて憤りを發し、
病未だ全く愈えざるに旅立ち、陸奥に至り、萬壽の月耕に附して歳を經、又あまねく諸
方の知識の門に遊ぶ。或は湛堂律師によりて律をも習ひぬ。西に東にあとをとどめず。
身たくはふる所なく、ひとへに此の道をもて任とす。筑紫の雷山の峰に止りて、火食
せず、一夏を過すがごとき、其の精苦を知るべし。省悟すといへども、尙自ら足れりと

釋氏—僧侶
洛下—京都
中
其の故國—
肥前國蓮池

せず。常の言に曰く、「昔世奇首座龍門の分座を辭して、是猶金針の眼を刺すが如き歟、
毫髮ももしたがへば晴すなはち破る。しかじ、生々學地に居て、自ら煉らむには、とい
へり。予常に是をもて自警む。もし能く一拳頭、偏く物機に應ずるに足らば、いでて
人の爲にして可也。其或は未だ然らずして、そごぼくの學解をかざりて、顔を抗て宗匠
と稱せむは恥づる所なり」と。後、肥前に歸りて師に仕ふること十四年、師歿して、法弟
大潮をあけて其の寺の主とし、自は平安に遁る。さて曰く、「釋氏の世に處る、命の正
邪は心なり、跡にあらず。夫袈裟の徳にほこりて人の信施をわづらはすは、われ自ら善
くする者の志にあらず」と。こゝにして始めて茶を賣りて飢を助く。凡春は花によしあ
り、秋は紅葉にかしき所を求めて自ら茶具を荷ひて至り、席を設けて客を待つ。洛下
風流の徒喜びてそこに集ふ。さればいくほどなく、賣茶翁の名あまねく世に聞ゆ。さる
に其の故國の法、疆を出づるものは必官のしるしを携へ、十年一たび歸りて更に命ぜ
らるゝことを受く。僧といへども同じ。翁七十に臨みて復國に還り、自ら僧を罷め、其
の國人の仕へて京にあるもの下に名をよせて、十年の限りを免れむと乞ふ。國もとより
翁の爲人を信する故に、これを許す。こゝにして自ら高を氏とし、遊外を號とし、笑うて

葛巾野服 | 隱遁者の服 | 装 | すぎはひ | 生活

蓮華王院 | 京都三十三 | 間堂 | 行實 | 履歷

松風 | 茶釜 | のなる音 | 盧全真妙旨 | 人、陸羽と | 共に茶を以 | て著はる

人に語りていふ、「吾貧くして肉を用ひず、老いて妻を悦ばず。葛巾野服茶を賣るのすぎはひかなへり」と、復京に去りぬ。凡そ人茶を賣ることを奇として稱すといへども、翁の志茶にあらずして、茶を名とす。其の平居綿密の行ひは知る人まれ也。晩に岡崎に居て、携ふる所の茶具を取りて火に投じ、是より門を杜ぎ客を謝して、天年を養ふ。或人いふ、「一旦座右に、長咄しいや、と書き付けられしが、老窮りては全く客を辭せり」と。終に蓮華王院の南幻々庵にして化す、世壽八十九。寶曆十三年癸未七月十六日也。右大典禪師、翁の生前著す所の傳、偈語の後に見えたるを取りて譯して、遷化の世壽年記等を加ふ。又偈語の中、翁の行實にあづかる作四五を採りてことに擧ぐ。なほ翁をよるこぶ人は偈語全書を見るべし。

題 錢筒

隨處 開 茶店、一鍾是一錢。生涯唯箇裏、飢飽任天然。

又

煎茶日々起松風、醒覺人間仙路通。要識盧全真妙旨、傾囊先入箇錢筒。

に題せる偈語多し、みな此の趣なれば略す

(錢筒)

又茶を賣る席に書き付けられし狂言、是は偈語には載せず、或人寫し置けるをにしるす。

茶錢は黄金百銖より半文錢迄はくれ次第、唯飲も勝手、唯よりは負け申さず。

達磨さへおあしで渡る難波江の流を汲める老の我が身ぞ

自贊三首

咄。這瞎漢。謾打風顛。早歲入釋。事師參禪。百城烟水。遠探要津。熱喝痛棒。嘗苦喫辛。歷盡雪霜。自救不了。顛頂面皮。懣懣多少。老來安分。爲賣茶翁。乞錢博飯。樂在其中。煮通天澗。渡月花。若人論味。慕口蹉過。因憶昔年王太傅。依然千古少知音。

髭鬚照雪。疎髮鬢鬆。瘦杖扶老。鶴髻蔽容。具籃荷去。獨步洛東。賣茶生計。足養衰躬。非儒非釋。又非道。一箇風顛瞎禿翁。

箇賣茶漢。籃裡維何。無底椀子。鞏縣茶瓶。爲糊一口。賣弄諸方。用力是大。得錢却微。箇擔板。咄。

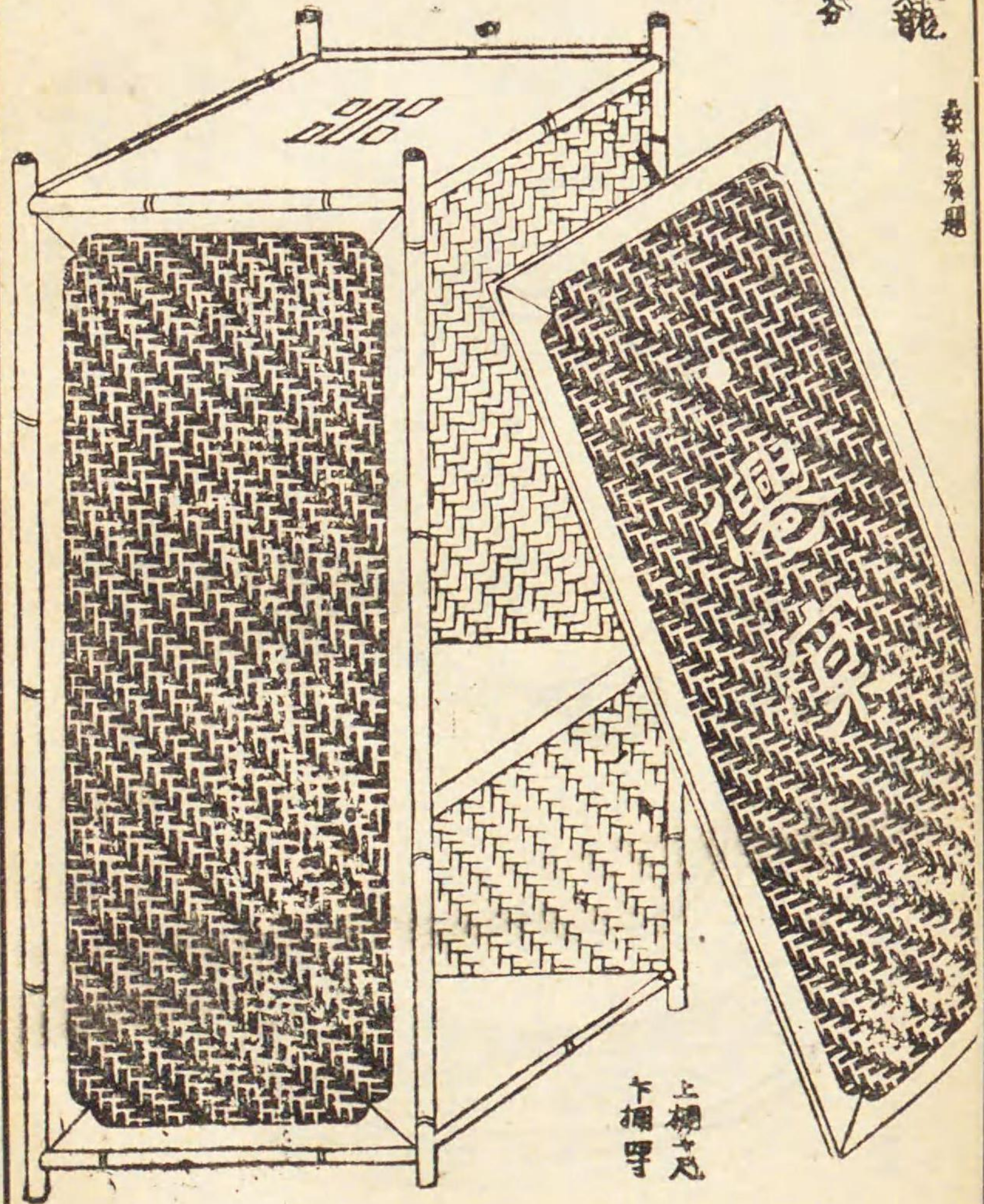
自警偈

擔板 | 擔板 | 漢は禪家に | 不通の者を | 置る常套語 | 自警の偈 | 自から氣を | 付くる爲の | 贊語

顛頂 | 大面 | 懣懣 | 慚

爐龕
高九寸五分
方八寸三分

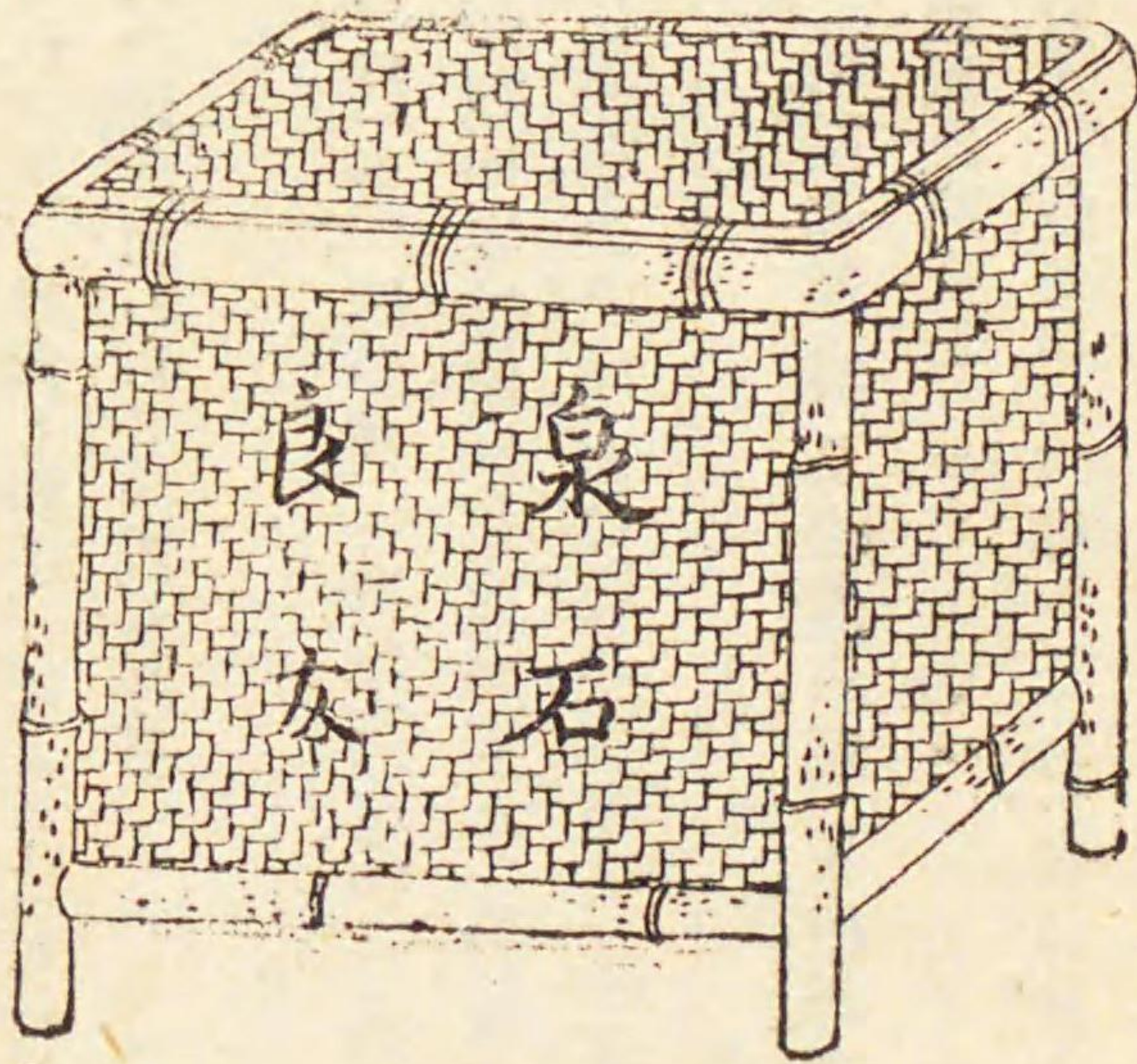
蘇州府



上榻七尺
下榻四尺

兼葭堂所藏賣茶翁茶具圖八品

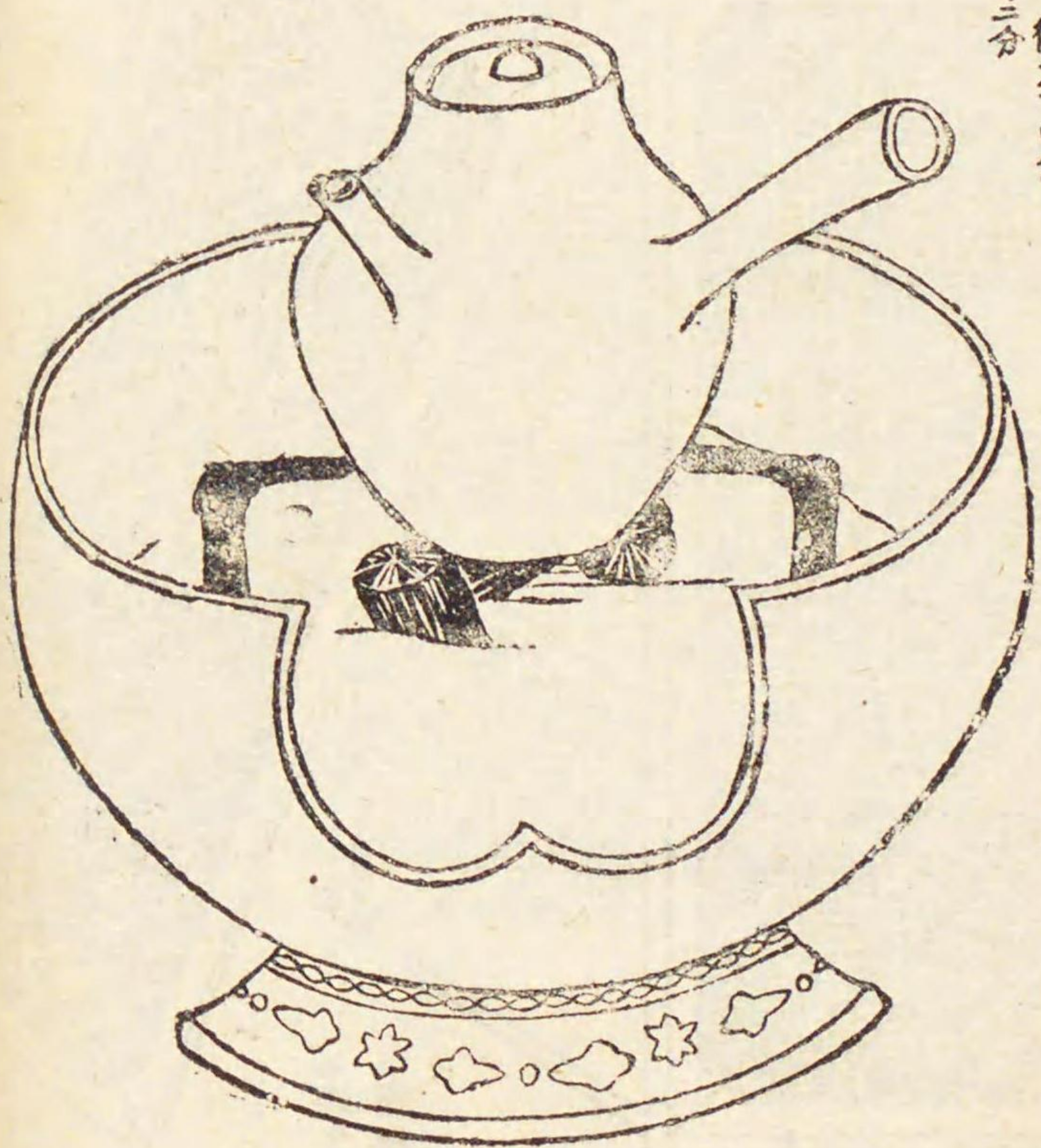
都籃
百抽隨
高一尺二寸五分
廣一尺



黃銅爐

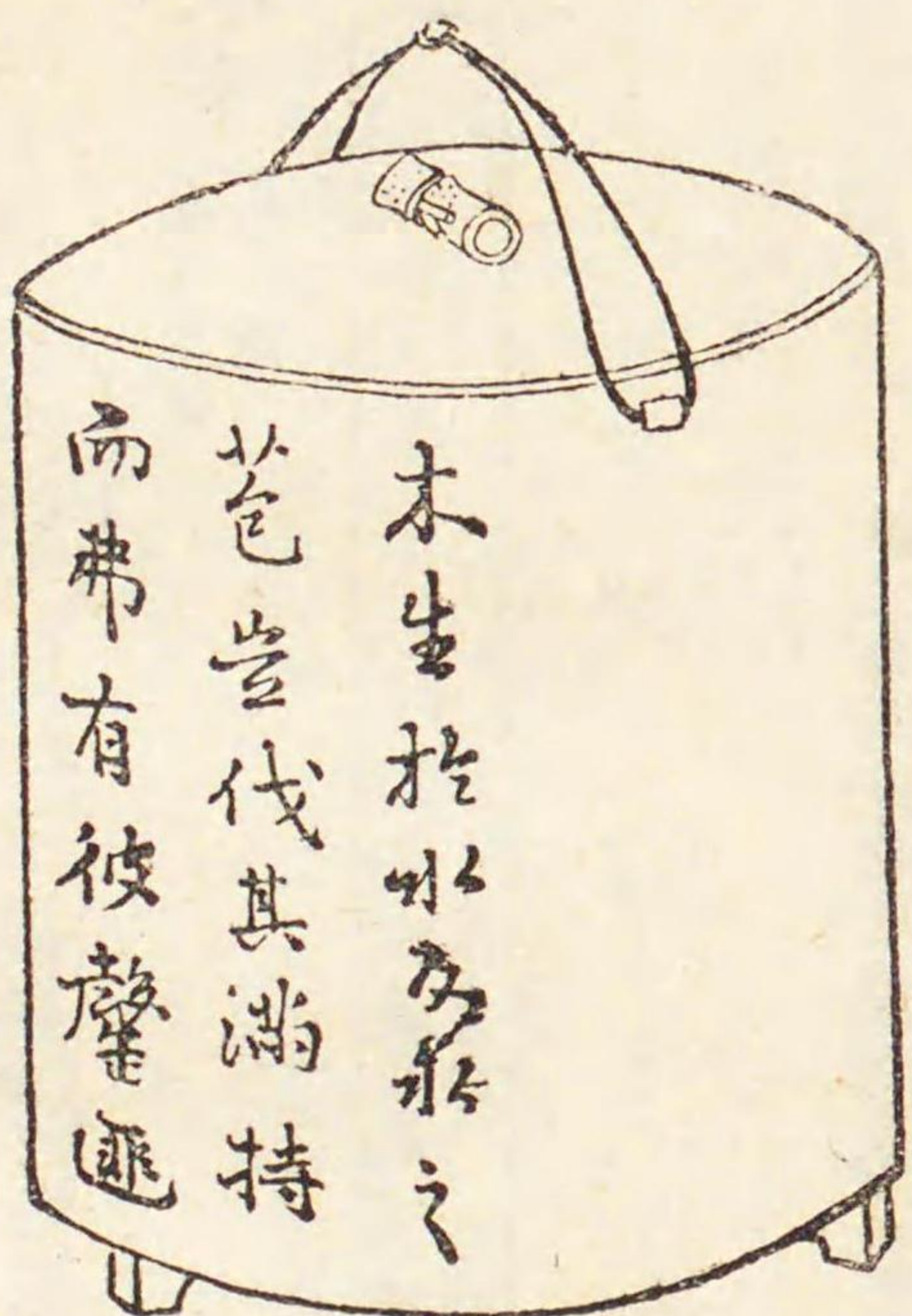
古製加長造
高四寸 徑六寸四分
足徑四寸二分

急燒 香山製



注子

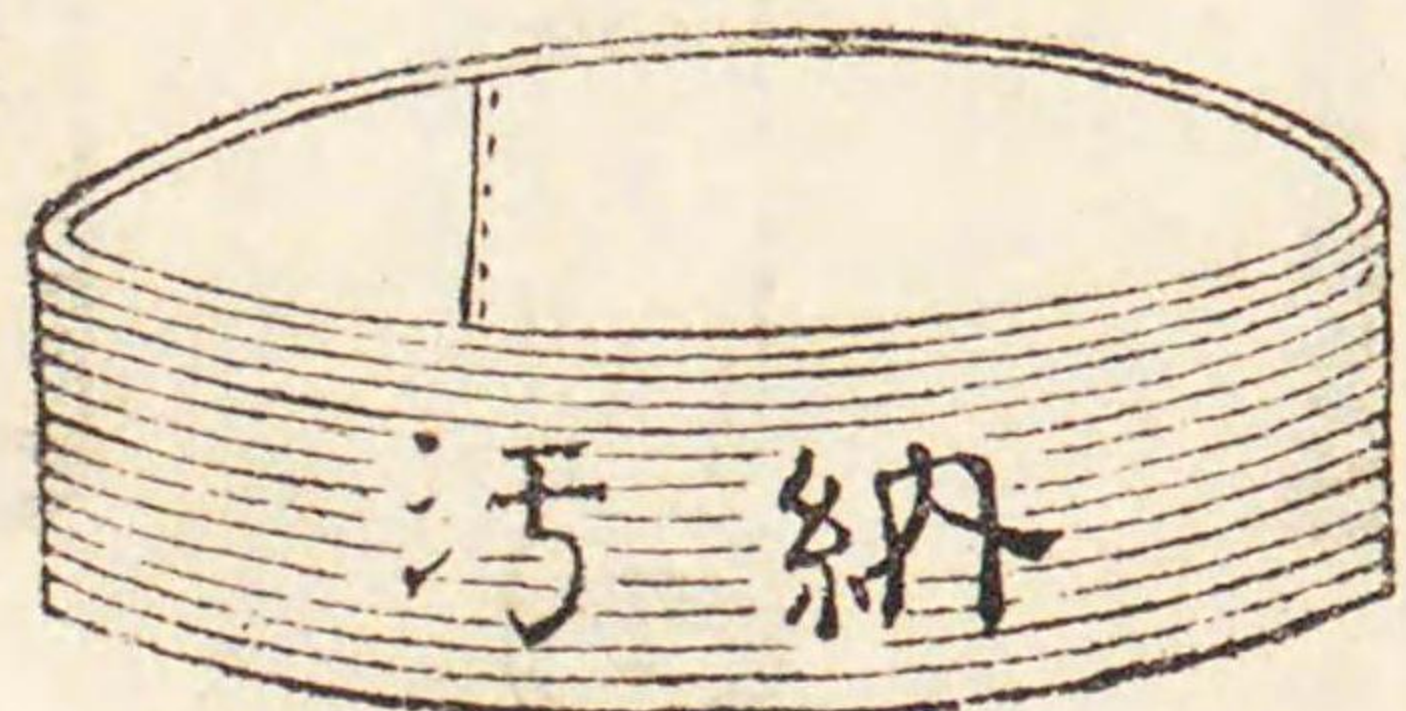
新製
高五寸五分 徑六寸二分



木生於水為於之
苞豈伐其滿持
而弗有彼聲匪

蓮水

終南製
高一寸五分半 徑四寸



瓢杓

竹柄 長寸五分
芙蓉書



吹管

長八寸二分
蕉中題



思孝曰翁肖像見翁傷故不贅今其隨其具者其燒心之餘
手新模造傾載浪蕩木世肅之家云

夢幻生涯夢幻居。了知幻化絕。親疎貪榮萬乘猶無足。退步一瓢還存餘。無事
頭心情自寂。無心事上境都如。吾儕苟得體。斯意廓落胸襟同。太虛。

偶成

警少年禪流
傲余茶事

太傅面前翻却去。千年舊案舉來新。腕頭無力全扶起。謾叫賣茶莫失真。

仙窠燒却語

仙窠是具監名所
以靈煎茶也

我從來孤貧。無地無錐。汝佐輔吾。曾有年。或伴春山秋水。或響松下竹陰。以
故飯錢無缺。保得八十餘歲。今已老邁。無力于用。汝北斗藏身。將終天
年。却後或辱世俗之手。於汝恐有遺恨。是以賞汝以火聚三昧。直下向火焰
裏轉身去。轉身一句且如何。良久云。劫火洞然毫末盡。青山依舊白雲中。便付丙丁
乙亥九月初四
八十一翁高遊外

江村專齋 附剛齋

專齋は江村氏 諱宗具、倚松庵と號せるはその庭に古松拾餘株ありける故なり。祖榮基
は備前三ツ石の城主にして、落城の後京に登り、宗具に及ぶまで新在家といふ街に住め

丙丁に付す
火にて焼
捨つ

三石の城主
別所氏の
族

聞香—香通
森美作侯—
森忠繼

鳩杖—頭に
銀製の鳩を
附けたる杖

近衛藤公—
關白藤原尚
嗣

り。父既在は和歌連歌を好み、殊に聞香の伎に名あり。宗具初めて學業に心ざし、ふねて醫を學ぶ。始め加藤肥後公（清正朝臣也）に仕へ、後森美作侯に仕ふ。されども身は京に住めり。壽百歳を保ちければ、

後水尾上皇仙洞に召して、修養の法を勅問ありしに、奏すらく、「平生唯一の些の字を持す。食を喫ふも些、食飲を節にするも亦些、養生も亦些。此の外に別の術なし」と。帝大に感じ思召して、鳩杖銀絹茶酒などをさへ下し賜ひしとかや。（此の一條は東涯の盍簪録に出づ）其の年の九月彼庭の松のもとに松茸數莖を生ず。奇異の事なりと人もてはやしぬ。寛文四年百歳に充つる元日に口號の詩歌あり。

もよとせも猶あきたらず行末を思ふ心ぞ物笑ひなる
といへるが、中にはまさりたらむとぞ。此の翁の話を書きし老人雜話といへるあり、面白き昔語なり。

○宗具の子宗珉、字は友石、全庵、又剛齋と號す。那波道圓に學ぶ。少年にて青山侯の文學となりしが、故有りて病に托し仕を致し、京師にありて教授す。其の後、紀藩より聘し給ひしかども仕へず。先主への義を思ふなり。後また慶安四年、近衛藤公、詔を傳

容藻—御製

吾が黨の人
—閑田子の
友人
濟々—多し
丈人—比肩
すべき人
榛荒—荒廢

へ給ひて、禁中の侍講たるべしとありしも、固く辭し奉りし。是また紀藩の義によるとぞ。よりにて容藻を下し給ひ、是正して奉りけるも、めづらしき例なるべし。

北村篤所

篤所、北村氏、諱可昌、字伊平、即通名とす。近江野洲郡北村の産なり。（季吟法印の氏族なり）仁齋先生の門人にして京師に住めり。嘗て、院中に召して學を問はせ給はむ爲北面の氏を嗣がしめむの、内勅ありしかども、異姓を嗣ぐことをほりせずと固く辭し奉りし。されども、其の人を慕はせ給ふ故に、儒服儒巾を制せさせて賜はり、しひて召ししかば、止む事を得ず、是を著て院中に書を講ず。疾の病くなりし時も、勘解由小路殿をもて人參と中山といふ御視を下し給はりしに、隱士の面目と世に稱せり。自筆歲暮書懷の詩、吾が黨の人、彼の子孫より得たるを左に寫す。其の生平を見るに足る故なり。

少小涉經史。性氣耽詞章。
共是丈人行。生平所畏敬。
後生何寂莫。聖學將榛荒。
宿儒時濟々。此日皆既亡。
長安幾萬戶。



升斗繫一官
職上の束縛

假張一外貌
を飾る
生理一生活
費
裘葛一裘は
冬衣葛は夏
衣
朝晡一朝夕
の食物

徳大寺家一
七清華の一

無_レ人_ニ共_ニ商_量ス
遭_レ遇_レ千_古少_レ
從_レ意_ニ自_ラ徇_レ往_ス
月_花屬_レ我_ニ去_リテ
老_去猶_堅強_。
車_馬不_須駕_。
不_用求_皇々_。
回_首一_世裏_。
未_嘗有_殷昌_。
梅_葉欺_雪色_。
依_舊迎_新陽_。

西生永濟

淡海蒲生郡中山の里の隱士永濟は、

西生と稱す。

父阿波守兼名と云へるは、

徳大寺家の

所_好與_世乖_。
吾_儕特_何傷_。
請_託絶_權勢_。
吟_哦習_爲常_。
眼_精耐_誦讀_。
冠_蓋何_假張_。
寒_暑給_裘葛_。
比_屋屢_低昂_。
悲_貧兒_女態_。
柳_條洩_春光_。

爲_愚又_爲狂_。
幸_無升_斗繫_。
拜_謁無_朔望_。
又_無沈_痾患_。
足_力涉_澗岡_。
生_理又_略足_。
朝_晡有_糟糠_。
吾_不覺_衰廢_。
豈_入丈_夫腸_。
一_歲此_夜盡_。

藏人—天子
に近侍し政
治に與かる
職

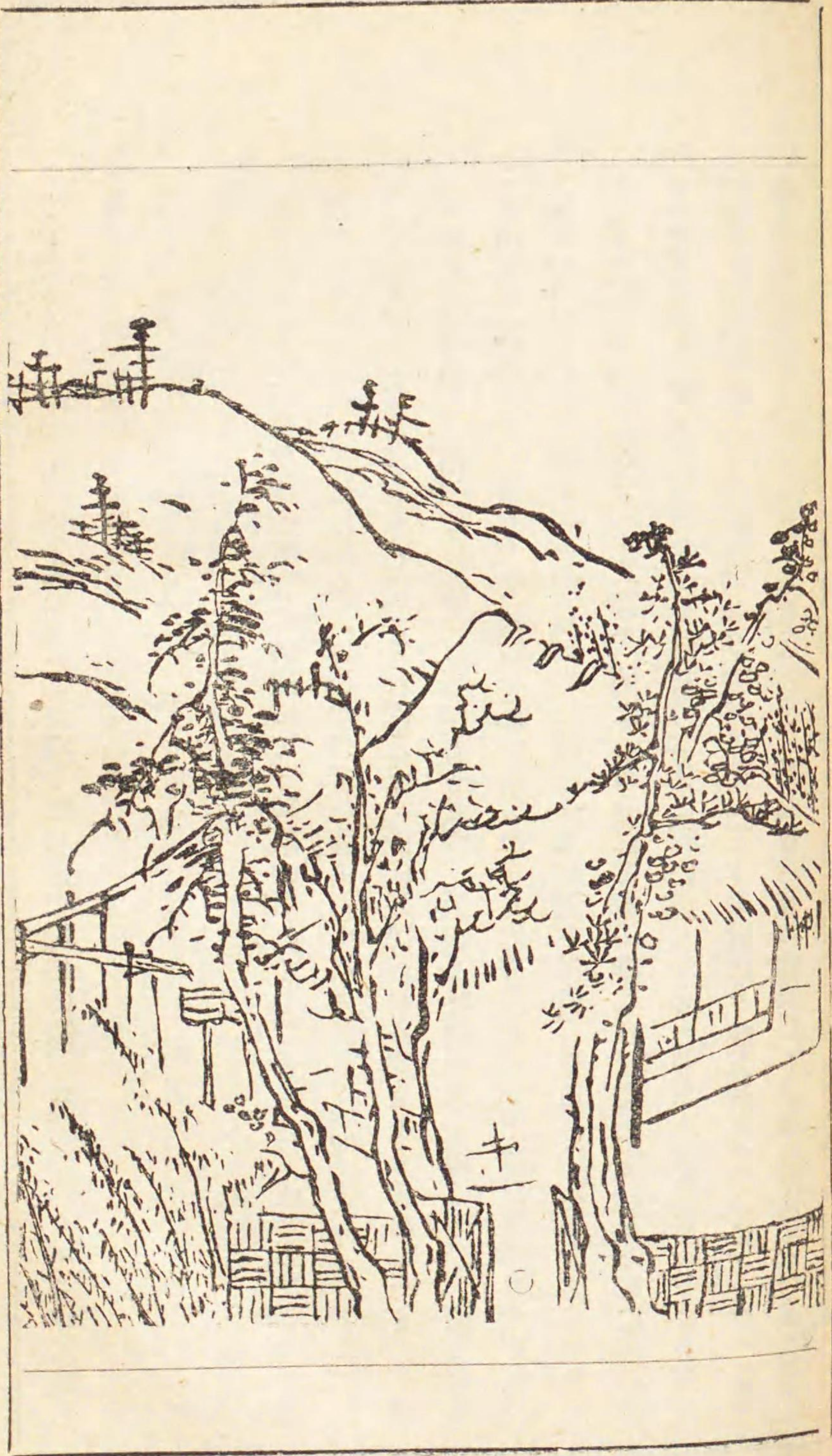
五山—京都
の五大禪寺
天龍寺、相
國寺、建仁
寺、東福寺、
萬壽寺

諸大夫にて、麻生庄を領し、莊内鑄物師と云へる所に住みしが、其の女弟は蒲生知閑の兄、音羽右馬允秀順が妻なりし故に、知閑を助けて戦死す。かゝる故に知閑、永濟を扶持せしとぞ。此の人もと滋野井殿に親しく参り通ひければ、中山に閑居せる後、(是まで地名皆日野に近き所也)藏人に補せらるべきよし勅を傳へ給ひしに、固く辭し申して、
勅旨 畏くはあれど友とせし我が中山の松や恨みむ。

とよみて奉り、終に出でずして歿せり。もとより和漢の才人にて、北村季吟法印の著せる和漢朗詠集の抄に、歌は自注し、詩は永濟の注を用ふるよしかよれしは、此の人なり。右勅に答へし歌も、清原元輔の集に、

遙にぞ思ひやらるようとからぬ我が中山の松の梢を

といふを取れるなるべし。是は大和の中山なるを、近江に取用ひたるも學者の仕業と覺ゆなど、日野の人富田氏の話なり。此の人を近比西生と稱を改めしは、もし遠き葉ずゑの露のゆかりもあるにや。凡此の書近世を集むる間に、此の永濟主は時代や古びたれども、かばかりの人を世に知らず。予も彼の朗詠集の注永濟とあるを、音にて讀みて、五山の詩僧にやあらむと思ひしに、此の説を聞きて明らかめ、其の隠操のしたはしければ、



こよに記す。蒲生氏も代々歌人にて氏郷主に及ぶ。鬪戦の間、風流の聞えありける家の姻族に、此の隠士ありけるも、ましてめづらし。

岡 周 防 守

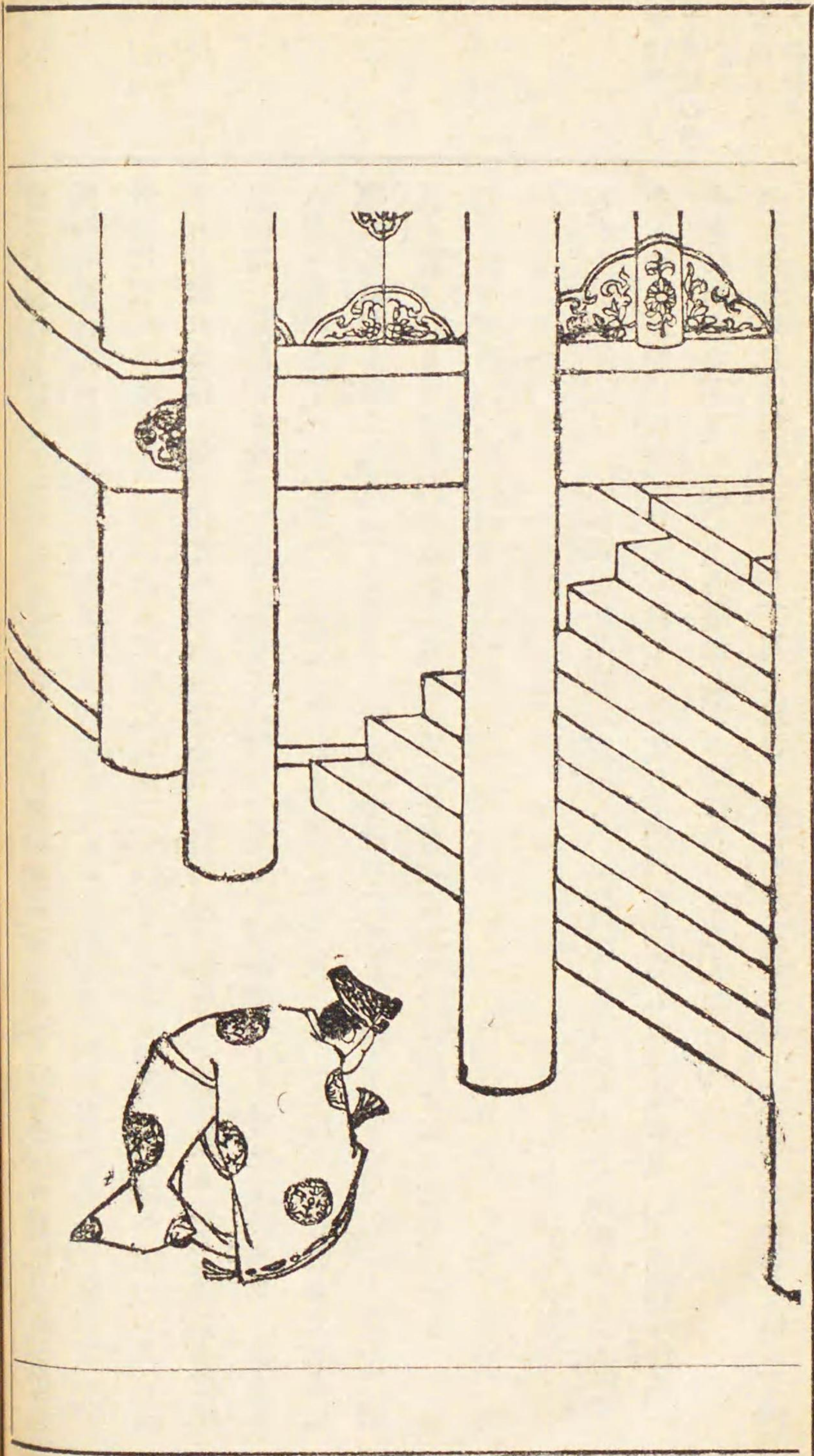
岡周防守某は、備前國酒折宮の神職にて、神學の名高くして奇人也。或時刀を買ひて帯びて出でたるに、思はぬ事をいひかけて、腹あしくなりたり。又他方へ行きたるに、同じく腹あしくなる事有りしに、「さればこそ、此の刀はわれに應ぜぬものなれ」とて、常に來る魚商人に、路次にて逢ひたるにとらせつ。又ある時山中にて道に迷ひ、雨さへ降り出でて詮方なく、辛うじて辻堂を見つけてたどり入りし間に、雨はやみたれど、夜になりて、いよく行くべき方も知らねば、一人の僕と俱に、そこの木葉をさぐり集めて、火をうち出し焼きつくれど、雨にしめりたる木の葉なれば燃えず。さる時に狼の聲などしばし聞えて、恐しさ言はむ方なきに、いつしかしめりたる木の葉の中より、おのづから火燃え出でたれば、やがて其の光にて木の枝折りくべなどするに、其の火よすがらに絶えず、ふしぎなる事なりき。又或る時脊に癰發し、さまざま醫療を盡せども

驗なし。今は死すべしと思ひけるとき、「今宵は御社へ籠りていとままうさむ」といへるを、醫師も親族も、「身を動かし給はむはいとあしきこと」とどめけれど、あへて肯かず、「假令途にて死すとも詣でずばあらじ」といへば、疊にするながら昇きて社頭へやり、あまたまもり居れるに、夜半の比、病人も守人も、我知らず眠りて、火の消えたるをも知らず。其の時、「周防守々々」と呼ぶ聲して、怪しき手して背を撫つると覺えて打驚き、まもるものを驚かして、「いかにや」と問へども知るものなし。火をともして、背を見せしむるに癰は名残なく愈えたり。さて是より後、二十餘年ながらへぬるとかや。尙かよる不思議度々有りしと、よく知る人かたりぬ。さこそ神慮にかなひけめとたふとし。

青木主計頭

青木主計頭長廣は、肥前國長崎某社の祝なり。岡周防守とひとしく、神學をもて聞ゆある時思ひがけぬ事に罪せられて、竹をもて門戸を閉ぢられけるより、今は神に仕ふべき身にあらずとて、都に上り隠れしが、時に名たよる人なれば、櫻町院かたじけなく詔を下して召し給ひ、神代卷を講せしめ、宸翰をさへ賜りぬ。やが

神代卷一日
本書紀の卷
一、卷一
宸翰一天子
の御親書



て是を首にかけて、わが守なりといひて片時も離さず、四方の國々に遊行す。ふじの山に登りし時よめる、

富士の根を登りて見れば敷栲の枕に結ぶ草だにもなし

この道のさかしかりければ、二腰を捨てて、その後は帯ぶる事なし。さておのが家には、二度歸らざりしとなむ。

敷栲の枕
にかゝる枕
詞

僧別首座

白隠禪師の弟子に別首座といへる有り、「出家は寺を持つべきにあらず、寺を持てば、在家にひとし」とて、所定めず行脚に年を送る。多くは丹波但馬の間に遊びしとかや。人問訊する時は、其の人の世態をもて示す。或時に乞巧僧示しを請ふ。首座即雨だれの石をさしていふ、「あの石を見よ。雨だりにて減りたり」と。又農人集りて説を請ひしには曰く、「田中に水あれば鷺來て泥鱒をもとむ。泥鱒は遁れむとす、鷺は踏まむとす」と。またある元日に、人の許にて雑煮を喰ふ時、主示しを請ふには、いはく、「昨日は大晦日、今日は元日なれば雑煮を喰ふ也」と。老婆親切といふべし。

問訊する
道を求めて
問ふ
世態其の
人現在の生
活情態

僧 圓 空 附 俊 乘

無我の人
私心なき人

僧圓空は、美濃國竹が鼻といふ所の人なり。稚きより出家し、某の寺にありしが、二十
 三にて遁れ出で、富士山に籠り、又加賀白山に籠る。ある 白山権現の示現ありて
 美濃の國池尻彌勒寺再建の事を仰せ給ふよしにて至りしが、いくほどなく成就しければ、
 ことにも止まらず、飛驒の袈裟山千光寺といへるに遊ぶ。其の袈裟にありける僧俊乗と
 云へるは、世に無我の人にて交善ければなり。圓空持てる物は、鉞一丁のみ、常にこれ
 をもて佛像を刻むを所作とす。袈裟山にも立ちながらの枯木をもて作れる二王あり。今
 是を見るに佛作のごとしかや。又豫め人の來るを知る。又人を見、家を見ては、或は
 「久しくたもつべし」或は「いくほどなく衰ふべし」といへるに、ひとつも違ふことなし。
 或時此の國高山の府金森侯の居城をさして、「此所に城氣なし」といへるに、一兩年の間
 に、侯出羽へ國替ありて、城は外郭ばかりとなりぬ。また大丹生といへる池は、池の主
 人をとるとて常に一人は行かず、二人行けば故なしといへり。さらに或時圓空見て、
 「此の水この比にあせて、あやしき事あり。國中大に災に罹るべし」といひしかば、もと



化度せられ
一教導して
智を開かし
め

よりその不思議を知る故に、人々驚き「いかにもして此の難を救ひ給はれ」と願ひしかば、やがて彼の鉦にて、千體の佛像を不日に作りて池に沈む。其の後何の故もなく、はた是よりはひとり行く人も捕らるゝ事止みけりとなむ。此の國より東に遊び、蝦夷の地に渡り、佛の道知らぬ所にて、法を説きて化度せられければ、その地の人は今に至りて、今釋迦と名づけて餘光をたふとむと聞ゆ。後美濃の池尻に歸りて、終をとれり。美濃飛驒の間にては、窟上人といひならへるは、窟に住める故かも。彼の袈裟山の俊乗は、人の空言するを何にまれまこととす。蓮華坂といへる所に、蓮華躑躅といふものあり、其の花の盛に人戯れていふ、「彼の花に背をあててあぶればいとあたたか也、試み給へ」と。俊乗ある日教へけるまことにしたるに、春日のかけうつろひて、いかにもあたよかなるを、日影とはおもはで、誠に花のゆるゑと悦びしとなむ。又ある人あざむきて、「坂を登るには牛馬のごとく這ひて登れば苦しげなし」と云へるを、まことにして、袈裟のふもとより八町が間、峻なる坂を這ひ登りけるが、是は「人のいひしに似ずいとくるし」といへりとぞ。かくおろかに直き人なれば、圓空も悦び交はられしなるべし。

中倉忠宣 附山中隱士

花顛子一畫
人、三熊花
顛、閑田子
と共に本書
の著者

中倉忠宣は、伊勢朝熊の産にて、京に來て學問す。故ありて花顛子が外舅太田良輔が弟と稱す。(良輔も聞香の伎に名あり)二十五といふ年、「今年は死すべし」とて、持てる物皆友達に與へ盡せしが、はたして一月餘りして病に臥したりしに、人々いたはり醫療を盡して癒えぬ。是より忠宣物をもともせず、「吾既に死を極めしに生きたれば、今よりの命は世の外の物なり」と云ひて、春秋の花もみちには、酒呑みて、夜晝をいはず。金を見れば人の物ともいはず遣ひ捨てつ、吾が物あれば人に與ふる事石瓦のごとくす。されども夏冬は門戸を閉ぢ書を讀みて、あへて人に交はらず。四條高倉の南に獨居せる時、友達度々呼び迎ふれども出でず。行けども戸を開かざれば、相計りて、「食ある故に此のごとし。今より糧を與へずしてこころみむ」といひて、一人も物を送らず。(此の時常の産なき故、朋友の助力を得つ。もとより多藝なれば、それを學ぶ人も食を贈る)されば、數日を経ていかにもせむすべなかりしに、折ふし、門を過ぐる雜貨賣ありしを呼びて、有り合ふ衣服を錢一貫文に賣り、さて此の錢のある限鮪といふ魚を買ひて、明け暮れたど

鮪一今云ふ
まぐる、京
阪地方の方
言

痿躄一足の
痿えて立た
ぬ病

是を喰ひて過せり。友達折々うかどふに、もの音もせねば、「もし飢ゑて死にたるも知らず」と、門の戸を破りて入りて見るに、かの魚を喰ひて居りしかば、大に笑ひぬ。また或夜、清瀧河に行きて箒策を吹きすさびしに、川音のさゆるにしたがひ、しらべ澄み渡りて面白かりければ、霜雪の夜を重ねて四十日にあまり、一夜も怠らず彼處に遊びし程に、明くる正月の比より寒濕に犯され、痿躄の症となりぬ。かよりしかば、いさよかなる勸進帳をとよのへて、

みよしのの花やを食をしてなりと

と書き付て恥づるけしきもなく、大路をるざりながら、知己の家々へ廻りしかば、日ならずして許多の金を得つ、さて吉野へ駕籠に乗りて行き、かへるさには、大坂へ出でて、又其處の知る人の家々へ廻り、此のたびは三吉野を橋立とかへ、花を月にして勸進帳に書きつけたれば、誰も興じて又數金を與へたれば、橋立より城崎の湯に浴し、其の功能にて脚疾治したり。それよりは何處となく行脚して、十三年を経て大坂へ歸り、妻を求めて住みしが、又或年伊勢へ詣づる日を送りて、枚方までとて行きつよ、直に伊勢へ伴ひ、又彼の友に別れて志摩へ渡り、其の後遊ぶ所を知らず。五とせ経て歸りし。此

人生れて云
云一後漢の
周澤が、妻
を虐待せる
より、時人
この諺をな
せり

御家流一香
道の家元三
條家の流儀

の妻かよ子は貞操ある人にて、忠宣旅にある間は、人の爲に裁縫の業をし、又導引などもして世を渡り、夏は蚊帳をたれず、冬は火爐に寄り、夫の旅の苦勞をとふ故となむ。人生れて忠宣が妻となる事なかれとぞいはまし。忠宣五十七といふ冬、かの兄とせる良輔が許にありていはく、「來むとしの二月初には必ず死ぬべし」と、花頭に命じて我が像を一筆書に畫かしむ。花頭此の時十歳にみたされば、何の心もなく、云へるまよに數枚畫きたれば、其の上自筆を染めて、

何やらに忠宣といふ名をつけて月よ花よと騒ぎけるかな

是をかたみとて人々に與へたり。さるに果して、明くる春二月七日に終れるも不思議なりき。此の人歌連歌詩作にも疎からず、香は殊に勝れて、御家流と云へるものを傳へ、百炷に二三をあやまらず。人も賞したり。其の詩歌の口號は、花頭幼時なれば記得せず。また自から書きとどむる意もなき人なれば残らず、惜むべし。

○忠宣志摩より何處へか行きし五年の間の事とかや、某山中にて一奇人に逢へり。人跡絶えたる所に庵を結び、年も老いたるが、いろくの物語をし、さて云へることは、「此の前なる谷川の水出でて橋落つる時は、食物を求むべき通路絶えなむ、と唯是のみ心に

かよりしが、此の比はさととりて、我が命ある限は食有るべし。食盡くるは我が命の終はる時也、と思ひ定めつれば、甚やすし」といへるには、さしもの忠宣も膽を驚かしたりとなむ。如何なる人の跡をかくせるにやと、いとゆかしくこそ。其の國所も聞きしかど、花頭幼くて覺えずといへり。

近世畸人傳 卷之三

隱士長流

此の傳もまた安藤爲章の年山打聞のまくをうつせり

若き時は下河邊彦六具平と名乗りたり。和州宇田の産。父は小崎氏、如何なる故にか母の氏を稱へ侍りける。それより妻子無くして、中年より津の國難波の傍に隱居を卜め、靜に書を読み、中にも歌學を好み、萬葉集、古今集、伊勢物語などは諳記したり。其の學問おのづから傳へ聞ゆるをもて、大坂の富人多く弟子となれり。生得世に誦はぬ人柄にて、心のおもむかぬ折は富家の招にも應ぜず、訪ひ來れる人にもものをもいはず、枕を高くしてあるひは眠り、或は書を読み、心に任せて過しける。西山公（水戸黃門光圀公）其の才を聞きしめし召しけれども、終に從はざりしかば、紙筆を賜はりて、萬葉の註を請ひ給ふにも、心に趣きたる時は一二首づつ註して、又懈りがちに侍りしまよ、果さずして、貞享三年丙寅六月三日に身まかり侍りぬ。春秋六十三歳、圓珠庵の契沖師と交深かりければ、遺稿を集めて晚華集と名付けたり。其の集中の歌、

晚華集一原
本晚萃集に
作る

述懐のこころを

あしづつ―
蘆の中にあ
る薄き皮、
薄きの枕詞

桂川こよろにかけしひと枝も折られぬ水に身は沈みつつ
 ゆづかづら仰げばいとど高き木のきる事難き大和言の葉
 よみとよむわが言の葉は葦原のうらみやせまし住吉の神
 わかの浦を知らぬ板井の蛙だに聲は詞の數にやはあらぬ
 和歌の浦にいたらぬ迄も紀の國や心なぐさの大和言の葉
 末の集の歌どもの、昔の歌に多く劣りゆくと見ゆるを
 難波津の流れに生ふる葦づつの末の世見えて薄き言の葉
 契沖が山にかくれてよめる俳諧の歌に「世の中にうめる心は山
 柿のまづほに出でてくだけぬる哉」とよめるを聞きて、
 世をうみのへたよりみてぞ好もしき其山柿にみのなれる人
 その外多く歌もあれども略し畢んぬ。
 爲章按ずるに、長流が歌大かた是等の風體なり。長流は儒學まさり、契沖は佛學に深し。
 在家出家のさまはかはりたれど、清操ともに昔の隱逸にも劣らぬ人品なりけらし。長流が



述作、累塵藻水集、續歌林良材、枕詞燭明集、萬葉名寄等也。

葛蹊云はく、予聞ける中、よしと覺ゆるは、

下野や那須野に繁る篠をとりて東男は矢にぞはぐなる

つひに我が著ても還らぬ唐にしき立田や何の故郷の山

此の立田の歌を、右の桂川の歌に合せて思へば、はじめは出身の望ありしかども、其の才を知る人なければ、思ひ捨てて隠士に終りけるなるべし。その萬葉の註語は、代匠記にまよ見ゆ。又季吟拾穂抄に或説とて出されしは、此の人の説とおほし。其の流義の説にあらねば、不用とのみ書かれしに、かへつて道理にあたれるが多し。歌の體は契沖師と此の人同じ筋也。契沖十七歳の時の歌を見て才を感じ、方外の友となるよし、契師の徒義剛も書けり。

僧 契 沖 附門人 今井似閑、海北若沖、野田忠肅

僧契沖、諱は空心、俗姓は下川氏、其の先は近江蒲生郡馬淵村に住す。祖父左衛門元宜、加藤肥後侯に仕ふ。父善兵衛元全、尼崎青山侯に仕ふ。師寛永十七年庚辰、尼崎に生

實語教一教訓の語を集めたる者、傳へて弘法大師の作と云ふ

腥葷を斷つ、肉食を廢す、法器一名僧たるべき人物、名區一名所、舊蹟、念誦、心中、念誦、心に唱ふる事、煉行、修行、菩薩戒、不殺、不盜、不淫、不誑、不誑、過罪、不誑、誑、他毀、不自

る。歳甫五歳、母間氏口づから百人一首を授くるに、不日によく記得す。父も實語教を授くるに、又同じ。父母おどろきあやしみぬ。七歳疫を患へ、巫醫するしあらず。師密かに天滿天神の號百遍を書く事三七日。一夜靈神を夢む、自から菅神の靈と稱して曰く、「汝が至誠を感じて、病を除き命を延ぶ。他日僧となりて自ら勗めよ」と、覺めて後病愈えぬ。さて夢中の事を説きて、出家せむ事を父母に乞へども聽かずありしかば、自から腥葷を斷ちて、常に佛號を稱ふ。父母其の志を奪ふ事を得ず、遂に是を許し、其の近き今里の妙法寺手定密師の弟子とす。時に年十一歳。手定はじめ般若心經を授く。讀む事四五遍にしてそらに唱へ、かつ書す。十三歳髪を薙ぎて高野山に登り、東寶院快賢に學ぶ。賢又法器として是を導き法を傳ふ。やうく時の爲に稱せらる。寛文二年檀越の請により、津の國生玉曼荼羅院に住めり。既にして其の城市に鄰り、かまびすしきをいとひ、壁上に歌を題して遁れ去り、一笠一鉢意に任せて、大和の諸名區に遊ぶ。長谷に至りては飡を絶ち、念誦一七日、室生にしては煉行三七日に及ぶ。(義剛遺事には、幻身をいとひて、こよに形骸をすてむともせしといへり)又高野山に登り、菩薩戒を圓通寺快圓に受け、持律益々清苦す。泉州久井の里に往きて、山水の奇を愛し、住める事年あり

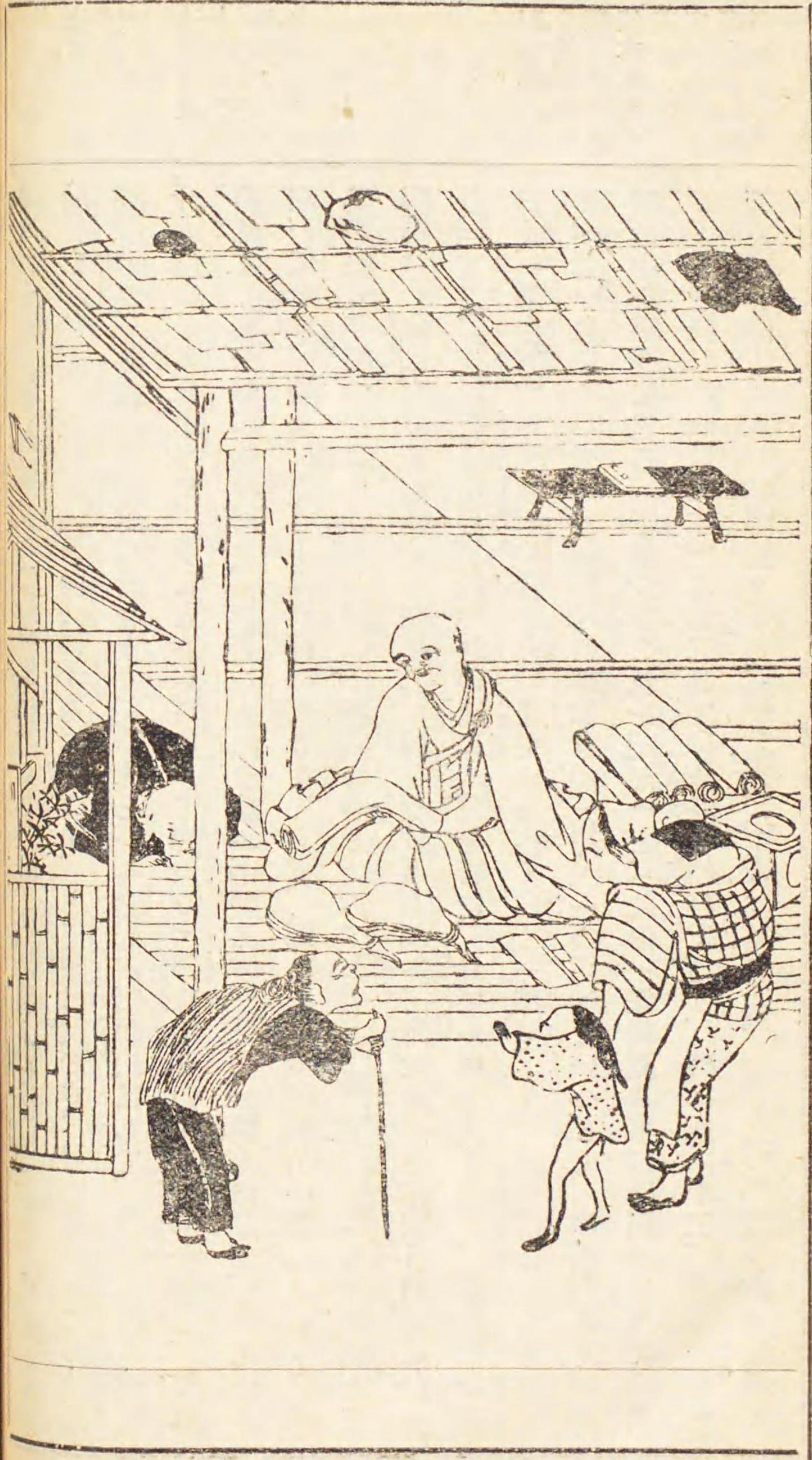
慳、不瞋、謗
三寶の戒
持律、戒律
を守る事
三藏、經、
律、論
章疏、注釋
書
安流灌頂
密教にて頂
に香水を灌
ぐ儀式の一
儀軌、密教
の祕典
水戸西山義
公、徳川光
圀
古今餘材抄
一寫本三十
卷あり

三藏を盡し、自他宗の章疏、及儒典詩文集におきても涉獵せずといふ事なし。従ひまなぶもの多し。又池田川の側に居て、徧く皇朝の實錄古記を読み、專國歌を好みて、廣く其の書を探る。延寶五年河内鬼住山延命寺覺彦に就きて、安流灌頂を受け、儀軌二百餘卷を手づから書きて、生駒寶山寺に納む。同八年本師手定寂せるにより、遺命して妙法寺に住持せしむ。師もとより好む所にあらざれども、其の母氏老いて此の里にあるをもて、止む事を得ずして往き、別に一室を寺の傍に構へて孝養す。水戸西山義公、長流が果さざりし萬葉の註を此の阿闍梨におほせ給ふとて召しよかども、これも亦固く辭して參らず。然れども、公の古義を好みたまふをよろこび、遂に萬葉代匠記廿卷惣釋二卷を作りて參らす。開卷第一首雄略帝大御歌に、籠の字の訓を知らず、「こ」とよみきたれるを加太麻と訓じ、神代紀の無目堅間を證とす。西山公その卓見を喜び、且其のおほす所に合ふ事を奇とし給ひ、白金千兩絹三十疋を賜ひて、是を勞ふ。師即寺院の修造に充て、かつ貧乏の者を贖して、一も蓄へず。又古今餘材抄を著す。「明石の浦の朝霧」の歌、古註眺望とし、或は行を送るとせるものを非とし、こは家山日に遠く、前程限なき波の上、朝霧濛なる間にたよふ旅懷を述ぶ。故に紀氏も羈旅部に納ると説く。義公これを

林壑の性
野人
清修自適す
自身を行
を慎み、他
を食らず

阿字本不生
眞言宗の
觀の名、諸
法本來空の
義
定印、伽趺
印を結び座
禪を組む事

讀みたまひ、掌を抵ちて「千古の發明」とし、書を賜ひて一たび來まみえむ事をしひ給ひしかども、林壑の性公候に謁するに慣はず、とて遂に就かず。母氏歿するに至りて院を退き、難波の東高津に居を下す。(高津といへども甚だ僻地にして、ゑさし町と號く。今も畠など多き所なり。予ことさらに往きて知れり)圓珠庵といふ。俗客を謝し、清修自適す。義公時に物を賜り、起居をとほせ給ふ事絶えず。此の公薨じ給ひて、師もまた續いて寂す。義公にあらざば、師の高きをしらじ、師にあらざば義公の選にあたらじ、其の終も亦須つがごとき者、誠に千載の奇遇といふべし、と義剛は書けり。水府の儒士安藤爲章、命によりてしばく往來し、説を受け事を問ふ。師元祿十四年正月微恙にかより、二十四日に至りて病革る故、其の徒に永訣を告げ、且疑ふ所を正さしむ。涌泉問ひて曰く、「師今阿字本不生域に住せりや否や」答へて曰く「然り。凡そ人平等にして差別あるべし。泉曰く「平等差別異なる事なきか」曰く、「心平等といへども、事差別あり。差別の中心平等に當る。老僧が事これを記せ」と。(此の一條義剛遺事には病中の自記に擧ぐ。大意同じければ略す)二十五日定印伽趺を結びて逝す。時に歳六十二。庵後に葬る。師爲人寛厚愛人、恭謙能く下る。然も密教の上に邪義を説く者あれば、是を闢きて避く



る所なし。其の論辯當時有識といへども當り難しとぞ。且記憶比類なき事は、圓珠庵にして萬葉を説くに、古今の事實援引せる所の歌詠等、始より思慮に互らずして綿々口に絶えず、連珠の函を出づるがごとし。或は人ありて師の古歌の記得を問ふに、「三千首以上自から知らず」と答ふ。著所厚顏抄三卷、(古事記日本紀の詠歌童謡を註す) 勢語臆斷四卷、百人一首改觀抄三卷、源注拾遺八卷、勝地吐懷篇二卷、(予校合且補を頭に記して書林に附す 近刻すべし) 河社二卷、類字名所集七卷、名所補翼抄八卷、和字正濫五卷、代匠記二十卷、總釋二卷、古今餘材抄十卷。以上爲章著す行實に出す所此のごとし。又正濫の難記に答ふる書八卷、義剛遺事にいふ、此の外予知る所、雜記、維々記、新勅撰の評、二十一代集、古今六帖の校合をはじめ、物語の類に、此の師の書入あるもの多し。又其の宗門の疏鈔若干卷、其の徒につたふるとぞ。

右傳、安藤年山爲章著す所の行實に、法系南山補陀洛院僧義剛錄遺事を錯綜折中して國字に譯して記す。圓珠庵の墓前に建る五井氏の碑文、其の法に優なる事は此の兩事狀に譲り、唯國學に功あるよしばかりを録せるは、道同じからざる故か。世人も又此の長ずる所を稱へて、其の法徳をとほざるのみならず、或は僧なる事をさへ知ら

顯昭法橋の
説―其の著
袖中抄の説

漫吟集―二
十卷
境界の歌―
自家情態を
観るべき歌
尾をひく―
官に仕へず
民間に隠る
る事、莊子
の故事

ざるあり。予師の爲に深くいたむが故に、繁きを厭はず始末を擧ぐ。安藤氏の書ける行實の終に、師歌學卓絶といへども、是は其の餘事のみ、歌學をもて師を論ずるは、師を知るものにあらずといへるこそ、公論なるべけれ。
蒿蹊又按ずるに、此の師の歌學、顯昭法橋の説を梯として、古書を見明らかしものと思し。凡近世の人、唯中川の流の説にあらざれば、道の言にあらざらず。是によりて過を過にて傳ふるが道なりといふ説さへ起れり。此の師此の關を透過して、一事一語徴をいにしへに探る。其の中或は過不及なくしもあらざらめど、一度此の道ひらけてこそ、是に次いでいふ人もいで來けれ。然れば千歳の一人といはむも過言にあらじ。詠歌は家集漫吟近刻につくよしなれば、たゞ其の境界の歌少し、安藤氏の出せるを擧ぐ。
山家のこころを
忘れても都のかたにながめせば風吹きとちよ峰の白雲
山里に折焼くましば珍らしく花より外の香に匂ひつつ
山川の龜の心を心にて尾を引くことをならひてぞすむ

心の猿―心
の迷へる事
の喩
輕の市―大
和の地名、
古繁昌せる
市場
おもひの門
云々―出家
の縁語
阿佛尼―藤
原爲家の室
安嘉門院四
條、薙髪し
て阿佛と號
す、十六夜
日記の作者

述懐のこころを
我こそは蘆の下をれ一節のありとも誰かありと見るべき
山にてもなほ忘れぬ此の身のゆる心の猿は靜けくもなし
世の中の重荷は早く捨てながら輕の市路に賣る事もなし
二十九になりけるとし
我が身今みそぢもちかの鹽竈に烟ばかりのたつ事ぞなき
糧絶えけるととき
やくとみて思の門は出でしかど烟絶えては住む方もなし
など、長流のうたよりもやはらかにおほゆ。又この師の國文高古にして趣味あり、亦學ぶべき體なり。
○門人今井似閑、見牛と號す、京師の人。隱居しては六波羅の東、阿佛屋敷といへるに住めり。(此の家今尙残れり。大廈にて庭おもしろしとなむ。見牛作れる所か、未だよく知らず。地は阿佛尼公の舊居といへり)所著萬葉緯あり。又寫本數車を上加茂の神庫に納む。不朽をはかるとなり。(契師の著述みなありとぞ)

萬葉緯一二十卷、萬葉集の參考となるべき諸書を抄出したる者、和訓類林七卷、和漢の古書に據りて和訓の正字を集めたる者、傳奏一禁裏にて武家の奏聞を傳達する職、梓に上せたり、印行したり、屈景山子、堀杏菴超、安藝侯の儒臣、詩文に長ず、

○同じく海北若沖、岑柏と號す、浪花の人。所著和訓類林あり、甚要なる書なり。○同じく野田忠肅、攝津今津の人。富豪なれども、古雅を好み、はじめ長流に従ひ後契沖に學ぶ。其の居武庫山を望めば、自六兒樓と號す。後住吉にすめる時、萬葉類句數卷を著し、何某の卿の傳奏をもて、靈元法皇に奉り、歌をも添へたりとかや。又柏傳といへる書を著せしを、近年その氏流の人梓に上せりとぞ。此の外の人なほあるべけれど知らず。江友俊といへるも契師に學べるよし、圓珠庵後光源光に合して碑を建つ。文を五井蘭洲に請へる旨、即碑文に見ゆ。○京師に樋口主水といへるは、似閑門人なるよし。此の家に代匠記の善本、講説を書き入れし萬葉集など藏せる由。二十年前自火に燒亡す、惜むべし。印行の改觀抄は此の樋口氏、屈景山子にはかりて校合せる所なり。寫本に合せては其の功見ゆ。

荷田春滿附姪在滿、門人加茂眞淵

春滿、(阿豆萬磨となふ) 姓は荷田宿禰にして、羽倉を氏とす。通名齋宮、洛南稻荷の祠官なれども家を嗣がず。弟を主とし、自らは國學の復古を任とす。神代卷萬葉集に

於て家學を成せり。契沖と時を同じうして是は後輩か。彼の説は知るや知らずや。契沖は佛者なる上に、其の人綿密に過ぎて泥滯せるものもまゝ見ゆるを、此の翁は一層登りて説を立つ。凡そ元祿年間は諸道復古の運にあたりたる時にして、國學を唱ふるは契師と此の翁なり。よみ歌は主とする所にあらずれども、又凡ならず。今覺えしは、

けふみればきのふの淵はあさか瀉汐のみちひぞ世の姿なる

などいとめでたしや。又中世以後淫靡風をなせるをいきどほりて、生涯戀歌を詠せず。その家集を見るに、當座によせ戀の題を探りては、其の物を雜になしてよめり。たとへば虎に寄する戀を雜によめるは、

仇むくう思ひ巴提使にたぐへては虎も拙き物とこそ見れ

日本紀欽明卷の故事によりて讀まれしも學者のしわざなり。(巴提使百濟國に使用して、虎の爲に小兒をとられ、雪の中に虎のあとをとどめていたり、その虎を殺せる故事也。巴提使、「使」字印本に「便」と書き、訓もはすひとつけたるを、若沖和訓類林には、てすとよむべし、便も使の字ならむと、考へられしを、今此の歌に合せて學者の見る所同じきを感じず)戀歌をよまれざる方正尤賞すべし。(戀の題詠のことにおきては、予もまた私に著す)

論あり。はた先年荷田三峯子の托によりて此の翁の家集を校考し、序を書きしにもいへり。國學の學校を京師に開かむとて、官の許を受け、既に地を東山に卜するに及びしが、(今の東本願寺墓地の邊とぞ)病に罹りて年を経、成らずして終れり。惜むべし。著述大やう散失す、自から焼き失ひしともいへり。伊勢物語童子問、萬葉の解などは彼の家に傳はれり。神代卷は家祕にして、門生にあらざれば傳へずとなむ。

梨棗に上す
一印行する
うひまなび
一五卷
某の君一田
安家徳川將
軍三卿の一
江府一昔の
江戸の異稱
の女弟一在滿

○在滿(滿字是も亦麻呂と稱ふ)通名東之進、春滿の姪也、同じく國學を唱ふ。大嘗會具釋、同便蒙等を著す。今代故實の行はるよによりて、其の考索の明なるもあらはれぬるとぞ。又國歌八論あり、後世の弊をためて見る所なきにはあらねど、大過せり。皆梨棗に上すに憚有りて寫本也。又百人一首古説とて、此の人と眞淵と共に著せるもの有り、又世に公ならず。近比印行せる眞淵の「うひまなび」は、是にもとるせるなり。關東にして國學により某の君に仕へしが、かの君おほす所ありて、其の説に従はしめむとす。在滿聽かず。貴賤品異なりと雖も、各志す所あり、己が見る所を捨て、人に従ふは諂諛なりと、終に祿を辭して去る。家居教授して終る。其の子御風通名東藏、家學を嗣ぎて江府にあり。女弟民子もまた古きを好み、歌をもよみて同じく教授す。俱に近年物故せり。

新古今集一
二十卷、後
久二年、院
鳥羽院の院
宣に依りて
定等撰進
新墾云々
初めて歌學
を開きたれ
ど
あらずきか
へし云々
大鉢にわた
りて手を入
れたる

よみて同じく教授す。俱に近年物故せり。
○眞淵は姓加茂縣主岡部衛士と名のる。はじめは三枝といへり。遠州濱松の人。春滿に従ひ、家僕のごとくして京師に學ぶ事年あり。學成りて江府に下り、大に古學を唱ふ。春滿は萬葉の解に功ありといへども、歌はその風をよまれず。もとより詠歌は主とせず。在滿は、萬葉の比は文華いまだ開けず。故に、麻ふますらむ、其の草ふけの、のごとき、語を成さざる者あり。歌の盛は新古今集の時なり」といへり。(國歌八論に委し。要をとりて記す)眞淵に及びて、はじめて萬葉の風をよみうつし、文章もまた古言をもて綴り、一家を成し、世の耳目を驚かす。従ひ學ぶもの多し。その説に「契沖は新墾しつれど未だよく植ゑつくさぬ程に過ぎにしこそ惜しけれ。大人は(春滿を指す也)歌のみか、舊りぬる千々の書どもをあらずきかへせしいたづまのかひさはなれど、まだ刈りをさめ果さざるに病に臥しつ」などいひて、己是がなりはひを遂ぐるよし也。實に古を發揮して後生を誘ふ功、少なからず。其の證をいはば、或時、南郭服部氏を訪ひて物語らふついで、「唐詩の風韻おとろへて六朝に及ばぬは、汾上驚秋の詩にて知りぬ」といふ。南郭いかにと問ふに、「さればよ、北風吹白雲、

萬里度河汾といへる起承の句誠に羈旅の秋情いはむ方なきに、心緒逢搖落秋聲不可聞の轉合の句、上の意を註せしに、氣格の落ちたるをおほゆ。吾が邦の歌も後世のさま劣り行くは、唯此のごとし」といへれば、南郭も大に感服せしとなり。(私按するに、今の世の歌、巧みなれば苦しく、輕ければ卑弱なり。その卑弱なるは、やよもすれば、めづらしな、たぐひなや、えならずよ、悲しさ、うれしさなどいひはてて含蓄の氣象なし。この論よくあたれり)又山邊赤人大人の歌、

田子のうらゆうちいでてみれば眞白にぞ不二の高根に雪はふりける

といふを注して、(百人一首に入られしは、萬葉の古にあらず、改めたるなり)「田子の浦より磯傳に、薩埵の山陰をうち出でて見れば、不二の高根の雪眞白に、天外に秀でたるを、こはいかで見えて、感じたるさまなり。何ともいはで有のまゝに述べたるに、其の時その地其の情自づから備はること、古の妙なるものなり。赤人は短歌の神なる事、此の一首にても知らる」と解きて、細注に「悠然視南山」といふも相似たりといふ人侍れど、かれはその所にての事、是はふと山陰より立出でて見出したるなれば、其の義異也。又悠然としてとは、みづからの心を注せるに似たれば、

悠然云々
晉陶淵明の
詩採菊東
籬下悠然
見南山に
出づ

宇萬伎一加
藤美樹、幕
府大御番、
眞淵の門人

猶作れるもの也。此の歌は唯有のまゝなるが似る者なきなり」など論ずる所、深くその旨を得たりといふべし。されども、何につけても、大成を任とせる故に、疑を闕かず、強解もまたまゝ見ゆるにや。又唐國の事を仇のごといひて、孔子をさへ議する事あり。是は近世の儒士、みづから夷と稱し、此の國の非をかぞへて、彼處に生れぬを恨むるごときをいきどほれるなるべし。是もとよりの罪いふべからず。

皇神の御惠にもれたる國の靈なり。されども亦眞淵も甚しといふべし。譬へば、病を藥せむに、是になき物は、彼處に求めむに、何の忌む事あらむ。唯病のたひらぐを瀬とすべきのみ。こは心狭きの故か、家學を興すにもとるせるか。生涯國學を任として江戸に終る。歳八十有餘とぞ。よみ歌、門人宇萬伎が記し置ける中、すこし書きいだす。

春の日山を望むてふ題を、

見わたせばあめのかぐ山うねび山争ひたてる春霞かも

すみれぐさを

故郷の野邊見に來れば昔我妹とすみれの花咲きにけり

其の住居を縣居と名づけける所にて、長月十三夜によめる。

秋の夜のほがらほがらと天の原照る月影に鴈鳴きわたる

あがたるの茅生の露原かきわけて月見に来つる都人も

鳩鳥の葛飾早稲のにひしほり汲みつつあかせ清き月夜を

しはすのはじめつかた、こびなたの傳通院の室に詣でたるに、明けなむとは増

上寺へうつりて、大僧正ときこえむまうけ、うちく〜にありと聞きて、

あさ日かけにほへる山に、紫の雲ぞたつなる春近みかも

遠江のさやの中山の西に續きて、今は阿波が嶽とていと高き山あり。式にあはば

の神社あるこれなり。こよのかたを繪にかきたるに、その山の下に旅人ある所に
書きつけ侍り。

あづまちは衣手寒し白雲のあはばがたけの秋の初風

神無月ばかりあらしを

科野なる菅のあらのに飛ぶ鷺の翅もたわに吹く嵐哉

又若き程の歌とて、別に朱をもて宇萬伎が書き添へし中、

鳴鳥の枕
つしかの枕
傳通院東
京小石川
土宗
増上寺東
京芝公園
土宗本山
紫の雲大
僧正なる
事
式延喜式
神名帳
佐野郡阿
波神社

中さだ一中
年頃

記のかなよ
み古事記
の訓讀

鳴子ひく門田の稻のほどもなくたちてはかへるむら雀哉

移香を花にかすめてたどるかな一夜のいめの春の明ほの

宇萬伎いふ、是等姿も詞もよろしきものから、心かしこきに過ぎて、いと後の世の

さましたり。中さだには、詞もすがたも唯あがれる世のさまにのみよみうつされし

多かりしを、やゝ老に至りて、かゝるさまに(前のうた共をさす)のみ詠みいでられ

しは、いと高しともたかし。世に聞きしる人はありやなしや。蒿蹊云ふ、此の老の

後のは、己も聞きしる人の數に入るべし。又若きほどのは、後の世のさまなれば、歌

ぬしの後の意にはかなはざらめど、其の才のたけたるを覺ゆ。かゝればこそ、一家

の學をも唱へ出しけれ。中さだのは、姿詞人を驚かせど、誠には力もいらざるもの

なれば、我もくとまねびよむ人多く、よくも心得ぬからに、腹を捧ふるに堪へざ

るものもまよ聞ゆ。また國文は此の叟一體をはじめ。例の古言をとりまじへて、一

言も字音をまじへず、記のかなよみ、又祝詞をよむがごとくして、しかも自在なる

もの也。此の人著述多し、萬葉考(壹貳卷、別記一卷刻につく)冠辭考(印行す)

祝詞解、又祝詞考、伊勢物語古意、五意(國意、語意の類五部有り)萬葉新採百首

解(以上皆寫本)百人一首うひまなび、淨土三部假名抄言釋(二部は印行)此の外人の間に答へて著す所、竹取歌の解の類、小冊に數部あり。此の門人の中、藤原宇萬伎、楳取魚彦もまた著述あり、世間に聞えし人なり。又倭文子といへるは、歌文章ともに奇才ありて、はやく歿す。碑文國字にて、眞淵著して甚惜めり。その家集梓に行はる。

桃山隱者 附 高倉街門守

いかなる人といふ事を知らず。伏見桃山に乞巧のごとく藁席をもて圍ひたるものして住む人あり。いかにして便りけむ、稻荷羽倉氏のもとにて書を借りて見る事常なり。遂に名をいはず。そこにて身まかりし後、いとさわやかなるさましたる士、供人など供したるが、羽倉氏に來りて、其の人の臣なるよしいひて、生涯の恩を謝しけるとぞ。いとあやしき事なり。今は八九十年前、三條高倉街の門を守りける化子も、夜時を撃間に、その小屋に書を高く積みておしまづきにかへ、書を見居りけるが、これは迎ふるもの不意に來りて、しひて伴ひ歸りしさま、いときら／＼しかりしと、其の街の人、老の後に語ら



れし。相似たる事なり。

位田儀兵衛

淡海神崎郡位田邑に(位田は伊牟天と訓ず。もとは里人の訛稱なるべし)儀兵衛といふものあり。産るゝ所は知らず。二十有餘にして此處に來り、賃雇を業とす。もし雇ふ人なき時は、他村に行きて食を乞ふ。雇ふ所一日の糧に過ぎず、餘を與ふれば辭して受けず。其の邑人「他に往く事を止めて邑中に喰ふべし」といへば、「否、邑中の人は我が行歩かなはぬ時頼むべければ、今は煩さず」と答ふ。身にはつゞれをまとひ、居所は方丈にも足らず。暇ある時は豆を取りて數ふ、何の爲といふ事を知らず。又常に口の内にてつぶやく事あり。是はた人の耳に聞きとり難し。(或人いふ、明朝に大豆を數珠とし念佛せし人あり。これもそのたぐひならむかとぞ)路の傍に建てし札の類、書きたるものをよむ事を好む。邑中に吉凶の事あれば、かたぎぬを引かけ往きて慶弔す。且葬あれば必送る。しかも一言を出さず。人もし新しき衣服を與ふれば、舊きを脱ぎ捨て、嘗てたくはふることをせず。又人の家に雇はれし時、夜に及びて務あれば、夜の食を喰ふ。

沓をうつー
草鞋を作る

月代一男子
が額より頭
の中央へか
けて髪を剃
りし事

然らざれば喰はず。萬正直此の類なれば、邑人甚愛しけるゆゑ、莊官ふるき家と田十畝を與へしに、苗代の時より刈り收むる迄は、其の田に庵を作りて是を守り、沓をうつ。稻をこくにこき箸といふものを用ふ。是は昔のならばしにて、今はみな稻こきといへる具をもて便利に従ふに、このをのこ衆に異なれば、いかにと問ふに、「われいなこきなし。人の物を貸りてつかへば損じてあしし」と答ふ。(因にいふ、昔はみなこきばしを用ひ、所作なき老寡婦などは是をこくに雇はれて口を糊せしに、いなこきといへるもの出でてきて便利につけば、かく悲しきやもめのうれへとなりぬる故、いなこきをあだ名して、ごけだふしともいへるとぞ。世のこと捷徑によれば、皆つひえある事此のごとし)常にうち笑みてあれども、兒童などあしきわざすれば必叱す。月代を剃らず、生ひたるまゝの髪をわらにて束ねたり。終るとし七十に餘る。誠に稀代の者なりしと、その近邑の人語れり。

手車翁

享保の初、京に手車といふものを賣る翁あり。糸もてまはして「是は誰がのぢや」とい

へば、「これはおれがのぢや」と答へて童へ買ひて翫ぶ。されば此の人いで來れば、童べ集ひて喜ぶ事なりし。後はまた難波に往きて、賣る事京のごとくして、終にとある家の軒の下に端座して死す。傍に小さき卒都婆を建てて、

小車のめぐりくつて今こゝにたてたるそとばこれはおれがのぢやと書きつけたり。いかなる人の世を翫びてかよりけむと、その時を知る人語りぬ。

山科農夫 附 評中五名

山科の傍に田業をする父子ありしに、道行く人の金の入りたる袋を落し置きけるを、其の子高き丘にかけ上り、呼びて還さむとす。「何事ぞ」と問ふに、しかくくと答ふ。「落すも拾ふも世のならひなるに、よしなき事にたづさはりて、わが田わざをな捨てそ」といひけるとなむ。此の人は實を荷ふ丈人の類なるべし。

右は雨森芳洲先生「たはれぐさ」にかけける儘也。けにもこれは杖を植てて芸る人に似たり。又管幼安が、金を見る事瓦礫にひとしく、鋤を揮ひし、佛を覺ゆ。奇といふべし。然れども、落す人の憂をはかりて呼びて還さむとするは、惻隱の誠なり。吾は之

卒都婆—上部塔形の細長き板、經文或は梵文を書し供養の爲に建つる者

山科—山城紀伊郡

實荷丈人—論語微子篇「篠を荷ふ」に出づ
雨森芳洲—安藤對馬守に仕ふ、平安の人、實



曆五年歿、隨筆たばれ草、三卷管幼安一擲の難義に同情すること孟子の語蒙求にも云云一蒙求卷下

に與せむ。固より物を拾ひて還すはさるべき理ながら、私心におほはれて是を行ふ人稀なればこそ、蒙求にも、黄向訪主と標し、黄向行於道拾得金囊乃訪主還之と註す。それはなほ名もさだかなるほどの人にや。予が見聞くところ三人、皆貧賤の人にして、此の事をなす。一人は化子の老婆、三條室町街にて、絹被の帛に包みたるを拾ひて、其の前なる商家によりて、「尋ぬる人あるべければ還し給はれ」といふ。商家事繁き由をいひて肯がはざりしかば、「情なの人や、落せる人のうれへを思ひたまへ」と誠めしに、恥ぢて預り、また其の名をも問ひしかば、「宇谷の龜」といへり。さてしばしありて、物をたづぬる様なる者を見つけて、とひ正して與へしに、大に憎むて、これが報いに、米せなどを持ち來り、「彼の婆子來る事あらば贈り給はれ」と托す。果して又來て、「いかに落したる人は知れたりや」と問ふ。しかば、そのよしを告げて、彼の報いの物を與へしかば、笑ひて、「是を受くる程ならば、彼のものを賣りて錢を得待らまし」といひ捨てて、歸れりとぞ。
又一人は近江八幡の近邑北庄といふ所の老農、八幡の人の金三十片を拾ひてかへせり。これも露ばかりの報いを受けず。其の老人繻紳一ツ著て、孫を負ひてありし

を指さして、此の事を知る人語りぬ。

貨殖せしめ
一財産を増殖せしめ

又一人は湖中長命寺の濱にて、旅舎のあるじ、巡禮の一連が路費の金數十片を、一つにして持てる男、袋に入れながら遺亡せるを見つけ、觀音寺へ至る道を考へ、二三里ばかり追ひかけて返したれば、其の旅人は越前敦賀の人にて、此の恩に感じ、故郷に歸りて後、交易の事を紹介して、湖中の人に貨殖せしめ、今孫の代に及びてもかはらず、敦賀へ往來し、その家乏しからずと、長命寺の僧語られき。貧人にしては殊に感ずるに堪へたり。
又三熊生語らく、其の祖父京師千本通にて、金百片を拾ひ、そのわたりの茶店にやどりしてたづね來る人を待つ。あくる夕つかたに至り、落せる人にあひて還しければ、此の金をわかつて與へむといふを受けず。しひてとかくいひしかば、其の茶店にやどりしほどの價を、彼の主より出させしとなり。
又くだくしけれど、ついでに思ひ出せし事を記さむ。伊藤東涯先生、二條街にて藥の袋の落ちたるを、つれし書生に拾はしむ。内を見れば方金數枚あり。先生眉をしわめて、「よしなきものを拾ひし事よ、しるせる名もなければ、還すべき由なし」と

伊勢の御師
—新年の曆
を持ち來る
神官
宗廟—大神
宮

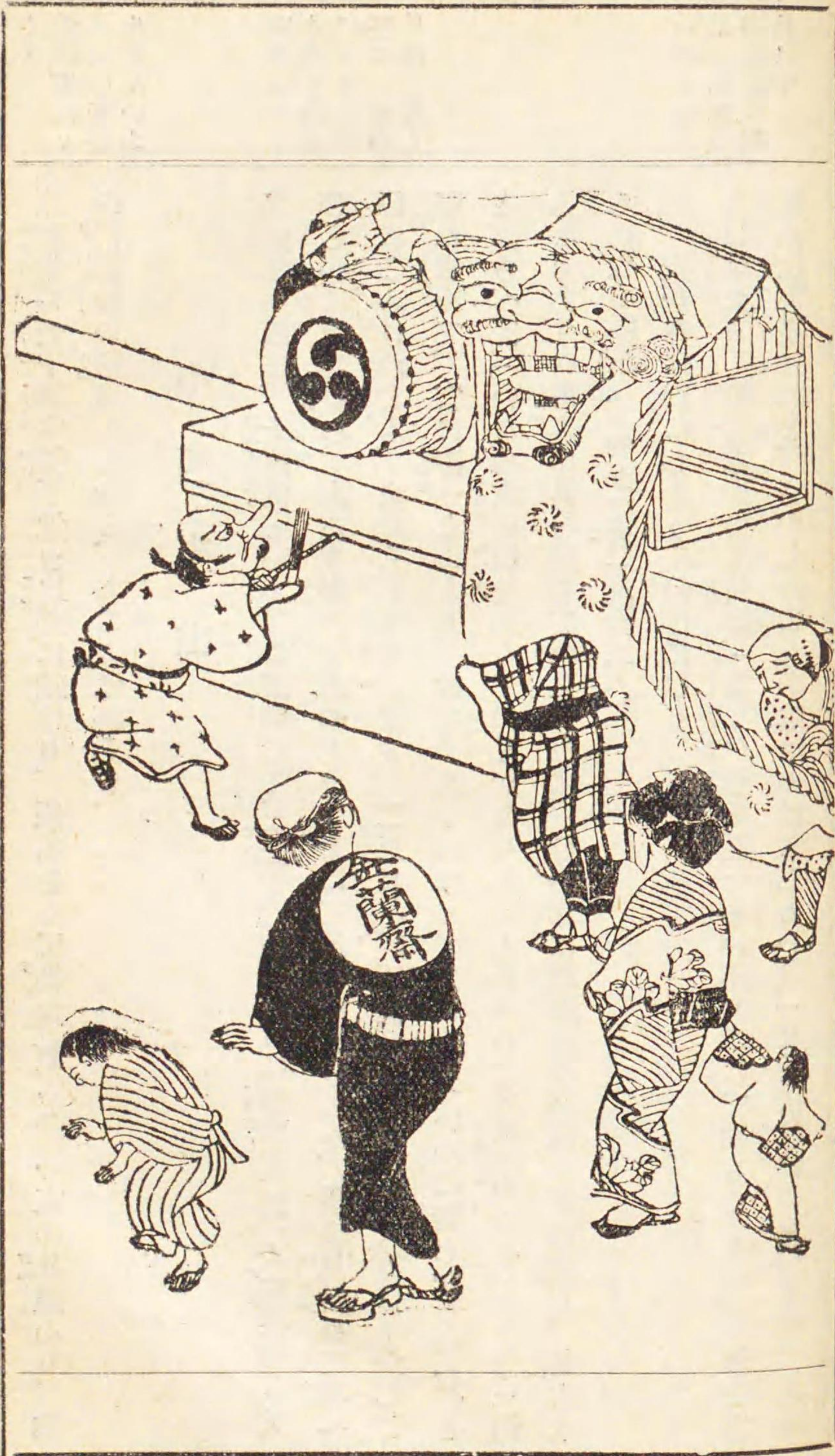
金蘭齋—姓
名不詳出羽
秋田の人
老莊者—老
子莊子の學
者
まどしく—
貧しく

代神樂—太
神樂、市中
を獅子舞品
玉などの曲
を演じて歩

わびながらとりて歸られしが、そのまゝ神棚に置きて、その年の暮に伊勢の御師の來れるに附せられしと、其の拾ひし書生の話せし。これは還すべき主なければ、宗廟へ納むる心なるべし。よき計ひにこそ。

金 蘭 齋

金蘭齋は、眞の老莊者にて、心も境界も是にあへり。尤家まどしく、いづれの書にても講を乞ふ人あれば、「吾其の書なし」といふ故に、購ひ求めて贈るに、開講の日に及び書生到れば、其の書は既に米に代へたりといふ。止む事を得ず、書生の本を與へて講せしむ。又門人常に衣服を調へ贈るに、程なく賣る故に、あるたび背に圓形を白く大にして、中に金蘭齋と書きたるを贈られしに、さながら著てありき、物とも思はず。又或時客至りしに、猶寐ねたり、おどろきて衾の内より出づるを見れば、袴を著ながら臥したり。又或時は講の半に代神樂といふもの、笛を吹き鼓を鳴らして街を過ぐる聲あり。書生にも謝せず、たどちに走り出でて、小兒とともに彼の者の後につきて歩きける。あるは道路にて、女の帯の結を指さし微笑して、「造物者の無盡藏」といひしもをかしかりしとぞ。此の



く者
造物者云々
—女の子を
生むをいふ

曠達云々—
心廣く物事
にかまはず
邏卒—市中
見廻り番人

いづこの云
字—原本の
字缺けて判
然せず

人著せる老子國字解、近き比刻に就けり。假名をもて書きしかど、一家の見識あり。他の俚諺抄の類にあらずと、ある人は評しき。

小西來山

來山は小西氏、十萬堂といふ。俳諧師にて、浪華の南今宮村に幽棲す。爲人曠達拘らず、ひとへに酒を好む。ある夜酔ひてあやしきさまにて道を行きけるを、邏卒見咎めて捉へ獄にこめけれども、自から名所をいはず。二三日を経て歸らざれば、門人等こよかしこ尋ね求めて、官に訴へしにより、故なく出されたり。さて人々「いかに苦しかりけむ」ととぶらへば、「いな自炊の煩ひなくてのどかなりし」といへり。又或年の大つごもりに、門人よりあすの雜糞の具を調じて贈りたれば、「此の比は酒をのみ呑みて食に乏し。是よきものなり」とて、やがて糞て喰ひて、

我が春は宵にしまうてのけにけり
と口號たり。妻もなかりし旨は、「女人形の記」といふ文章にて知らる。其の中「湯を呑まぬは心憂けれど、さかしけにもの喰はぬはよしといひ、又舅は何處の土口ぞや。あら

うつよなのいもせ物語や」と筆をとどめて、

折る事も高根のはなやみたばかり

といへるもをかし。すべて、文章は上手にて、數篇書きあつめたるを、昔ある人より得たるが、ほどなく貸し失ひて惜しく覺ゆ。發句どもは、人口に膾炙するが多き中、箏の繪贊を、禿筆して書けるを見しと人の語れるに、「その物を育てむとて、其の物を損ふ」と詞書して、

竹の子を竹にせむとて竹の垣

といへるなど、行狀にくらべて思へば、老莊者にして、俳諧に息する人にはあらざりけらし。さればこそ、その辭世も、

來山は生れた咎で死ぬるなりそれで恨みも何もかもなし

といへりとなむ。

加島宗叔

加島矩直、通名莊右衛門、薙髮して宗叔といへり。美濃岐阜の人にて、京に家す。學を

印籠—薬を
入れて腰に
帯ぶる小
さな
鹽見—鹽見
小兵衛京都
の人、研出
し蒔繪の名
工

好めり。豪富なりしが、後は甚貧し。されども愛とせず、酒を好みて狂態人の笑資となるもの多し。事に感じては、頻に涕泣し、激論に及びては席を打ち、高聲四隣を驚かす。ある朋友の所にて此の如くなりしかば、去りて後、主人獨言して、「あよきちがひ哉」といひしを、侍婢聞きて、「されども、多言なるばかりにて、騒ぎ走り給はでよし」といひしは、眞の狂人と思ひし也。書を講ずる時も、吾が意に愜ふ説あれば、「朱子大明神徂徠大菩薩」などいふ。意にいらねば、「誰めが此の悪説」など罵る。ある時、人の送れる蠟燭ありしに、講説夜に及びしかば、手にまかせて焼き盡し、狭き室晝のごとくなりし事もありし。予が家舊交あり。同じく三條高倉街に住みしかば、來りて酒飲まれしついで戯れて、「乃公のたまへる印籠貰ひ給へ。吾と共に購ひつる鹽見が蒔繪のもの善し」と勸む。予まだ六七歳ばかりにて、頻に乞ひしかば、父叱りしほどに、泣出したり。宗叔「よし、乃公の與へ給はずば吾參らせむ」と約して、別の印籠を、あざむかず、その明の朝とく持ち來りて與へられし。是はまだ貧に至らぬ先にて、其餘の態も唯此の如くなりしとぞ。此の人にして殊に稱すべきは、家母に孝ありて、其の生涯は貧を苦しませじとせられし。家母もとより富の中に育ちし人なれば、茶香、風流の事を翫びて終るに、一言制止せざ

岡白駒—京
都の儒者、
明和四年歿

おもひもの
—愛妾

りしは難き事といふべし。又其の文學の師、岡白駒、物をいひ出でては他人の諫に従はず、甚偏屈なりしに、宗叔一言を出せば必ず折れたり。故に家人もてあましたる時は、必ず呼びたりと、同門の那波魯堂話せられき。著書論語の解寫本にてあり。古註尙書、禮記、京にて印行の本は此の翁の句讀なり。

文展 狂女

天正の比、年四十にかたむける女物狂して、一卷の文を筥に入れ首にかけて、花の比は東山の木かけ、また月の夜は、五條の橋の上などについて、彼の文を出し高らかに讀み、又沈みて讀みなどして、聲をあけて泣き悲しみ、何やらむ獨言いひて後、取納めて去る。これは織田信長のおとどのおもひもの、小野のお通に仕へし千代といへる女にて幼き比より侍らひしかば、女の態は更也、文の道も心をよせて、情あるものなりしに、ある時、都の商人喜藤左衛門といふものに忍びて逢ひ初め、心を通はす事みとせばかり、思ひあまれる秋の暮に、
うらやまし人めなき野の 蜚鳴くも心のままならぬ身は



とよみて打ふしがちなるを、お通はもとより情ある人なれば、色にいづる心の亂れをひそかにとひ聞きて、やがて喜藤を召寄せ、千代を得させれば、よろこび京へ伴ひ、五條のほとりに住みけり。さていかどしたりけむ、家衰へ世に住み侘ぶるからに、かたみにうらむるふしなくもいできて、おのが世々にならむとす。千代このよしを岐阜へ告げて歎きける文のはしに、

絶えはつる物とは見つつさよがにのいとものめる心細さよ
 といへる惟喬の親王の御うたを書き添へてやりける。お通あはれに覚えて、かの男への文に、

久しくよすがなく、おとづれきかまほしき折から、千代かたよりあらましの事ども、文して聞え侍らふに、さよがにの糸たえ果るものとは見つよもふる事など、くれなく歎きこしさむらふまよに、このかへりごとに、
 とにかくに折節ごとのたがひめを恨むる中ぞ契なりける
 と申し遣はし候。さなきだに、女は心浅くて、何くれの事を、せばき胸に保ち侍らば、男にすさめられがちにて侍らむすれども、「もとの清水」忘れがたき御心を、我し

すさめられ
 がち―飽か
 れ勝ち
 もとの清水

古今集
「古の野中の清水ぬるけれどほととの心を知る人ぞくむ」
うへー織田信長

とりぐに
なりてー織田氏の没落して
そごるになりてー狂氣して

もたのみ入り候。所がらの御住居、夕顔の垣ねもまばらに、人めもつらくおほしめしむらばど、東山のうくわん房へ御たより候はど、よろしくはからひ申さるべく候。法師は取つきあらしく候へども、底意なくて、山の井を結びわけてもあしからずはからひたまひまらせ候。折から所々のさわがしさ、うへにも御けしきおだやかならず、つきぐの人も心ならず候ゆゑ、うれしき便までに、あらまししどけなう候。かしく。

此の文に、男もなぐさみてわかれず、五とせほどへけるが、男身まかり、岐阜もとりぐになりて、世のさまかはりしかば、此の女氣そごるになりて、うかれありきける。かよみけるは、此のお通の文とぞ。狂女もさすがに哀なり。尤お通の心ばへ、文雅の其の代にも似ざるがめでたく覺えて、近世の例には、やよふるびたれど、こよに録す。

長崎餓人

長崎の人某氏(今遺忘す)吉左衛門といへるは、貧にして學を好み。生平酒を嗜む事人に過ぎたれば、狸々翁と稱す。ひととせ、此の地米穀乏しかりし時、數日食はず。知

近思錄十卷、宋の朱子呂祖謙の合著
嗟來の食ー禮なくして與へたる食物
狂狷ー狂は志のみ高くして行及ばざる、狷は知識及ばずして守るもの餘あるもの

音の人々食を贈れどもあへて受けず。「吾此の恩をかづきて報ゆべき餘命なし」といひて、遂に近思錄を看ながら餓死せりと、本地の儒士、西川氏の記に褒賞せり。
私按ずるに禮檀弓に、餓人嗟來の食を受けず。與ふるもの謝せりといへども、遂に喰はずして死せるを評して、曾子曰く、「微與。其の嗟や去るべし、其の謝や食ふべし」と、見えたるにつきて思へば、乞丐をもてみるは嗟來也。然るに是を謝せば、食ふべしとさへいへるに、此の長崎人の知音、よも禮なくして贈るにはあらざるべく、もとより朋友に財を通するの道あるをや。餓死に及べるは狂狷の甚しきものか。但し次に龍袋を評せるをあはせみるべし。世の貪る人には、是等の人の毛髮の末をも吸はせばやと嘆す。

相者龍袋

龍袋は赤塚氏なれども、幼より他家を繼いで中村を稱す。名は重治、通名孫兵衛といへれども、號をもて知らる。爲人世務に疎く、家の有無を心とせず、相學に長じ、門人も亦多し。相者は多く既往を知りて、將來に味きに、此の人常に門人に會して、其の血色

心術—心様

を見て曰く、「子明日は花見に遊ばむとするや」また一人にはいふ、「暮れなば青樓に登らむと思へるや」など、其の言一もたがはず。あるとき一人を制して出入をとどむ。いかなる故とも知らざりしに、後に或家婦に淫せり。其の知れるもの翁に問ひて、「もし此の事にや。然れども、其の時はさる事なかりしにはいぶかし」といふ。翁云く、「血色既に動きたり。それも諫めてとどむべきなれば、事に先だちてとどむべし。諫の及ばざるを決する故に交を断てり」と。又博奕に耽りしものも、かくのごとくなりしなど、其の門人話せり。凡そ人を相するに、必心術を説きて曰く、「相善也といへども、志不善なれば益なし。相の不善も亦能く志行をもて勝つべし」と。又曰く「相を見る人は世に多し、相を行ふ人は稀也。吾は孤相なり。孤なれば必貧なり。孤に居て貧を安んずべし」と。其の家を然るべき人に譲り、一子新次郎といへるも、他の嗣とす。妻は早く失ひたれば、獨身にて、食あれば喰ひ、盡くる時は食はず。後又知己門人等に別を告げて曰く、「我餓死の相あり、徒に生きて他の施を費すべからず」と。是より門戸を閉ぢ出入を禁じて食はず、數日の後逝せり。齡五十有七也。

按ずるに、近世相をいふ人多く、俗客亦多く是を喜ぶ。然るに此の人相によりて心

蜀の嚴君平
漢の通人
漢の鄧通
班史の漢前
班史の後漢の
班固の撰な
れば云ふ
中行—中庸
の行

弱冠—二十
家官—公卿
官家—公卿
堂上方
糗糧—瓶糠
味噲瓶
金峯山—大
和國吉野、
山坊—金峯
山の御師の
坊

行を教ふるは奇特也。猶蜀の嚴君平が賣卜によりて人を導くがごとし。自から孤相に住し、遂に餓死せるは甚しけれども、人に寄りて喰ふは、餓の相にして、漢の鄧通が餓死の相ありて、終に長公主の衣食を假り、一錢も吾が有と名づくる事を得ず。寄死人家と班史に見えたるにひとしく、かくては生けるも死ぬるにひとし。されば、中行にはあらざれども、死生の間にわづらはざるは、奇人といふべし。

森 金 吾

森金吾某は、阿波國小鳴戸の里の人なり。弱冠より隱遁の志深かりしかども、京師の官家に仕官せること年あり。終に四十近き比、致仕し、故郷に歸り、只膝を容るばかりの庵を結び、糗糧瓶をもたくはへず、蕎麥の粉をもて朝夕の飢を凌ぐ。米を炊がむづかしければとて、たま〜徳島の城下に至れば、知る知らぬ人ともなるやまひもてなして、好める酒をすよむ。老いても健なる人にて、七十にあまる年金峯山に詣でしかば、かよる齡の人の登山昔より例なしとて、山坊の記録にもとどめしとなむ。生涯心ゆく所に遊び身の貧を知らず。八十歳にして、安永九年子歳に終る。其の病中の吟



昨日にはかはるとなしに身にぞしむ萩に音なふ秋の夕風
 さしたる節はなけれど、自からあはれに覺の。

太田見良 猩々庵附 僧覺芝 畑房

翁主—支那
 にては皇族
 の女を云ふ
 語
 官家—公卿

太田見良字は資齋伊豫の大洲加藤侯の士也。學を好み醫を學びて京師に遊ぶ。初め富
 商某が僕を療する日、衆醫並び座す。適主人其の席を過ぐるに、衆醫皆伏す。主人敢て
 答禮をなさず。見良大に恥ぢて復その門に入らず。後故國の侯の翁主、官家に嫁し給ふ
 に召されて侍醫となる。養生の法をもてしばく諫むれども用ひられず。故に脚疾に托
 し、祿を辭して退く。此の後永く家居し櫛を踏まざるは、此の言を實にすと成り。自ら往
 かずといへども、病客門に充ちて醫療を乞ふ。學生も亦數多従ふ。其の清白の一事は、
 藥物において極品を選みて價をとふ事なく、その言にいはいはく、「もし時の價を知れば、お
 のづから鄙吝の意生じ、調劑の間其の價貴きものは減するに至る。わが淺ましきを思ふ
 が故に慎しみてとはず」と。聖護院邑に住みて、常に室を淨除し、書畫花瓶盆栽などを
 翫び、樂しみて一生を盡せり。もとより禪を信じ、槩宗の諸老に交る。就中淡海の覺芝

疾間なる時
一病氣の少
し快き時

和尚といへるは、殊に相得て善し。和尚京師にして疾甚しかりし時も吾が宅にて介抱し其の妻女起臥を助く。和尚疾間なる時戯れて、

女程めでたきものは又もなし釋迦や達磨をひよいくと産む

和尚疾重しといへども、疾と真心と主客正しく別れて見ゆ。及ぶ所にあらずと深く感ず。

又賣茶翁も知己にて、翁茶をうらば、吾は藥をうらむと、既に其の具をも調へしかども

禁足の志決せしかば止りぬ。終る年六十一歳なりき。

○狸々庵 原松は、伊賀の人にして、後京師に住めり。其角門人にして俳諧を業とした

れども、文學あり。專禪に參し、又酒を嗜む。背面の達磨尊者の贊に、

こちらむけ酒がいやなら寒の餅

又ある時、布袋和尚の圖に題して、

小袋に大千いれて花ごころ

といへるを、右の見良覺芝和尚へ語られしかば、和尚微笑して、「いまだし。我ならば、底

ぬけの俗に實あり芥子の花」とすべし」と、示されしを聞きて、速に往きて教の忝きを

謝し、後しばらく問訊す。ある時、生死の間に答へて、和尚、

生死事大通れはないぞ諸人よ昨日のゆめが今日もさめねば

居士かへし、

夢に死し夢に生るよ朝寢坊さめて苦をする釋迦よりはまし

吉備津のかたへおもむくとて、和尚に留別す。

行く水をつなぐはどこの葛かつら

某の年、

氣がむけば杖にはねあり庵の春

と歳旦せし正月、頓に死せり。

右、兩傳の間に混じ出せる覺芝和尚、諱は廣本、京師の人にして、淡海馬淵庄嚴藏

山福壽禪寺の一代也。(嚴藏山は予が曾祖父汲江軒是閑、族人と共に建立せる禪院也)

其の比檠門の獅象と聞え、機發閃電のごとし。嘗て本山の幹事たりしを、病をもて

辭して退く時、僧問ふ、「和尚は是金剛の性體、何の病かある」答へて曰く、「金剛に

金剛の病あり」と。平生機用此の類也。其の外一回耳目に觸るゝ事、何事によらず

よくせずといふ事なし。小僧の袈娑衣まで自ら裁縫して著せらる。又醫藥の事をも

獅象—俊傑
機發閃電—
頓智の早き
事

見良などに問ひて能く得意す。されば、知る人は強て醫療を乞ふもあり。予も幼くして痰を憂ふること深かりしを、此の和尚の醫療によりて、今に及び、其の時のごとき苦を知らず、大に賜を受く。和尚「只一事桶工の輪を入ると味は知りがたし」と語り給ひぬ。延享三寅年五月住院に遷化す。時に遺偈を書きて、(偈は遺忘す)五月といふ所に至り、侍者「是にて止め給へ」といへるを、和尚「意に知れり」と答へて、直に十四日と書き終り、ついで寂す。歿後身體柔軟にして生ける人のごとし。是等正しく予の知る所也。是は前に一傳を立つべけれども、和尚の法德行狀はことごとまるべからず、今は纔に予の幼くして知る所のみなれば、附録に屬せり。

○原松門人に、原元 佃房といふは、淡海八幡の人にて、多能なれども、生來赤貧なり。酒を好みて意氣慷慨す。其の比郷人大菊の新花を競ひ、一莖あるひは數十金の物を翫ぶを諷じて、

柴の戸へ支ふる菊を貰ひけり
また月見に、
誰々は死ぬうつぶいて月見哉

意氣—奮激

李白云々—
唐の詩人李白の作れる把盃問月の詩をいふ

李白が句意によりながら、實情を發露せるも哀なり。又「春は來ぬれど、こもりをる」てふ言書ありて、

子ども等よ松の字をかけ子の日せむ
なほよき句ども多かりし人也。予二十年前の舊友なれば、ついでにこゝに追慕す。世並の俳諧行脚などいふ類ひの人にはあらざりき。

僧 佛 行 坊

佛行坊僧都敬已は、もと日枝山無動寺善住院の一代なれども、院務を厭ひ、まだ中年なりし比、院を辭して、坂本に隱居し、律儀をたもち、ひたすら念佛の一行に歸す。しかはあれど、また風月の情やまず、俳諧をたしむ、佃扇と交深し。その句聞き傳へしが多かる中に、

依物に松かさもあり冬籠
因果應報の心をとて、
おどしたる報いにくつるかよし哉

我執—我を
立つる事

山法師—比
叡山の僧
山王—近江
日吉の神
大師—傳教
大師
冥加—佛の
助力

蚊ひとつに施しかぬるわが身哉

是は淨土に志を決したる身にも、流石に我執の離れがたきをみづからいましめたる意とぞ。俳諧には、都不覺と名をしるさる。また艸花にすぎて、朝かほあるはなでしこ、さゆりのたぐひすら、同じ花ながら、様かはりたる者數十百程に及べれば、此の境界にしては奇僻なりと人はいひけるとかや。また奇なる話は、或年の彌生に、山僧多く伴ひて、師の庵を訪ふに、櫻盛なるを皆めでければ、「此の花のうつろはぬうち再び來給へ」と約せらる。さりければ、他日又誘ひ合ひて行きたるに、ひねもす唯茶を出さるよばかりにて、何のもてなしもなし。長き日も暮れかよりければ、「今日は花見とて招き給ふかに、たどにはあらじと思ひしに、たがひたる事なめり」といひしかば、師顔をしわめて、「さてもにがくしき山法師かな。わが若かりし時まで、さはなかりしぞよ。かゝる花を見ながら、尙心の飽きたらで、飲食を求むるやうやはある。かく足る事を知らぬ心にては、山王や大師の冥加もよもあらじ」といましめられしかば、各花の興もさめて、すごく歸りしとなむ。佃房がとひし時も似たる事にて、雅話數刻に及びしかば、「門前に賣る所の蕎麥を取り來て此處にてたうべむや。煩らはしとおほさば彼處へいきてむや」と

ゆ—行か
ん

行走—行
きて食を乞
ふ

とたづねしに、しばらく首を傾けて思惟し、「門前へ行きて參れ」とありし。世情に疎き事すべて此の類なり。寶曆六年丙子の歲四月十七日、今は限りに見えしかば、年比仕へたる下部の僧、師の畫像を持ち來て、枕邊により、「今迄師の御贄を乞はむと思ひしかども、阿り給はむを恐れていひ出ざりき。今は御限と見ゆれば、一言書きつけて賜はむや」と乞ふ。師「よしなき事をするもの哉」といひながら筆をとりて、
ゆかうくと思へば何も手につかずゆこやれ西の花の臺へ
と書いて、西に向ひ合掌して逝せられしとぞ。

僧 日 初

攝津國池田に寓居せる禪僧日初は、もと何處の人と云ふ事を知らず。食あれば閉居し、食盡くれば行走す。甚貧しくして、袈裟破れ、衣薄けれども心とせず。禪餘國學を好み、反古の裏に筆を染めて、日本春秋といふ書を著す。水戸の日本史に類すといへども、其の所志、他を善に導かむのまうけにて、人々の傳に褒貶あり。されば春秋をもてなづくとなむ。其の書は、池田の人寫し持てりと、聞きぬるばかりにていまだ見ず。たゞ此の

人の志を貴むが爲に、聞くまよにこよに擧ぐ。近年その里にて化せりとぞ。

僧 涌 蓮

高田派—浄
土真宗の一
派

僧涌蓮は伊勢の人、高田派の僧にて、江戸院家地に住職せるが、高僧傳を見て、頻に感發し、病に堪へざるよしの一封書をとど、草衣にあらた忍びてひとり京へ登り、生島なる人の假初なる物見の亭に潛みしが、後は嵯峨のこよかしこに住めり。生涯一物もたくはへず。明け暮れ念佛するいとまには歌をよめりしに、歌書一卷をだにもたらねば、詞を莊ることもなく、思ひに任せたるが、かへりて真率人の及ばぬ所ありき。今記得たるをはつかに擧ぐ。

ふるさとのほよのもとへ行く人あるとき、

忘れても寢覺するとはかたるなよ子は老いぬると親の驚く

美人の鬚髻を見る繪の贊

朝夕の鏡も今は手にとらじこれをまことのすがたみにして
もじをかしらにして數首讀みし歌の中に、

真率—真面
目

野邊見れば知らぬ烟の今日も立つ明日の薪や誰が身なるらむ
月にかりの贊

かりかりと鳴きわたれども秋の夜の月にはとまる我が心かな

人のしき衾のあとまくらをわかつたむために、白ききぬを頭のかたに付けて、歌書

き付けよといひしかば、

まくらかる床のうみなる汐干潟こよをあしかる沼となすなよ

浮木法師が二尊院の坊をかりてすめるが、火をあやまちて焼けし時、かけりいき

て、

かよる時つねの心のうごかぬを終りみだれぬためしにはせよ

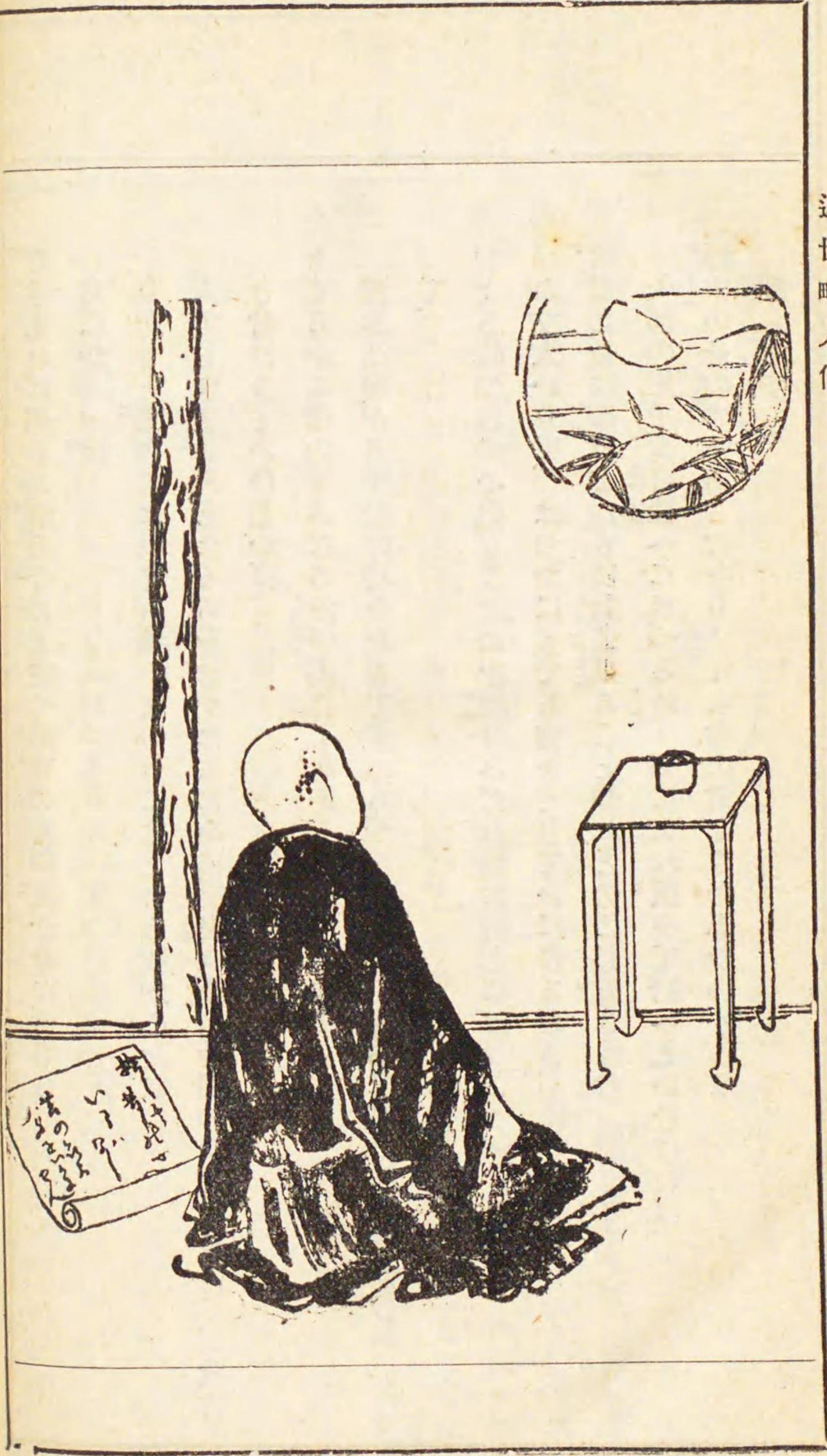
ぬす人いりて、はつかにもてる物をとりていにけるとき、

捨てし身は破れごろもに麻衾足ること知れとのこし置きけむ

矢部の正子が宮仕へに出づる時、何にまれ讀みて給へといひければ、

行末の身のさちあらむをりくも世の常なさを思ひわするな

題しらす



あすもまた朝とく起きてつとめばや窓にうれしき有明の月
 捨てし世を猶も忍ぶの草ならばおふる軒ばを又やいとむ
 神祇の歌とて

捨てし身に何の願ひはなけれどもこころの道を神に祈らむ
 此等は其の常の體也。或はけしきの歌にては、瀧を讀めるに、
 うきて立つ雲をなかばのとたえにて千尋を落る山の瀧つせ

無題

有明の月靜なる庭の面にをりく落つる木の葉をぞ聞く
 興遊未央といふことを、

暮れ行かば桂にくだせ月も見む花の大井をさしのほす船
 猶よき歌ども多かりしを、さのみはえ覺えず。才ある人なりしかども、人にたとみられ
 むさまをせず、きすぐに、はた狂したるやうにてありき。或人は評して、「いらぬ人に才
 の有ることかな。これをたからのもてくたしとはいふべし」と笑ひぬ。記憶最もつよく、
 智度論を見られし時などは、長き文段をそらに唱へられしに、「其の中かきて給へ」と云

たとみられ
 む—尊ばる
 べき
 きすぐに—
 朴直に—
 智度論—龍
 樹菩薩の作

冷泉民部卿
—冷泉爲村

發心遁世し
て—佛道に
入る志を發
し出家して

彼の卿入道
し—冷泉爲
村の剃髮し
山がつ—山
夫に住める賤

ひし處半枚あまり、物語しながら書かれしを今なほ藏せり。はじめは冷泉民部卿の君の御もとへ立ちいりて、歌の事とひまらせしかど、是もよしなきさびとて、後はまるらざりき。予ある時、戯れて問ふ、「はじめ發心遁世して江戸をいで給へるにあはせて、やごとなき御あたりに立ちいりて歌を學び給ふはにけなし。其の道いかにぞ」法師笑ひて、「さばかりあわたどしくいで走らずとも、のどかにせむやうも有るべきを、若き時の心すすみ、ひとへに野狐の精靈也。さてしも歌を好むからに、かしこき御あたりに参りしも、またきつねなり」と答へられしが、理に覺えき。さて年を経て、彼の卿入道し給へる後に、嵯峨へ尋ねおはせしに、法師あらざりしかば、そこらの山がつにつけて、一筆を残し給へり。
住むかたは都の西と聞きながら霞へだてて春もへにけり
御返し、後にもてまるりしは、五首ばかりなりき。
春がすみへだてこし身の怠りも今更くやし君にとはれて
といへる外は、今忘れたり。又或時、わらびをこの御もとへまらせける時、添へたる歌、

たてまつる龜の尾山の早蕨は千世を數ふる手に似たる哉
入道殿 甚賞し給ひ、秀歌に返しなすとむ、のたまひおこせしとか さるに、安永三
年午歲五月二十八日に、彼の君薨じ給ひ、此の法師も寂せり。同じ年月日なりけるも
あやしく哀なる契なりけり。

近世畸人傳 卷之四

柳澤 淇園

大和郡山同姓柳澤家
 俱舍論一著
 薩の作水
 朱舜水儒餘
 戸の漸江儒餘
 明の漸江儒餘
 姚の漸江儒餘
 邦に歸化す
 祇南の儒者紀
 伊藩の儒者紀
 文人畫を善
 登極天子
 の御即位野
 大雅池野
 大雅池野
 の畫家有名
 内を好む
 婦人を好む

淇園柳澤氏、諱里恭、字公美、一號玉桂、通名權大夫、大和郡山同姓の士也。文學武術を始めて人の師たるに足れる藝十六に及ぶとぞ。佛學さへ心得て、俱舍論を聞きし僧もありけるとかや。中にも畫に長ず。朱舜水傳來の彩色の法を紀の祇南海に學びて、殊に人物の設色、世これを賞す。水に漬し、力を用ひて揉み洗へども落ちずとなむ。爲人曠達不拘、容を好みて、才不才をいはず、寄食せしむるもの幾人といふ數を知らず。或はかりそめに來たる者をも、年を経て還さず。家祿多けれども、これが爲に乏しきに至る。初め某の年、候使として登極の御賀のため都に上りしついで、大雅にまみえて相歡し、これより往來絶えず。或時、大雅大和に行きしに、路費盡きたれば、假初に立寄りて是を借るに、例のごとくとどめ、門を閉ぢて還さず。家臣又いふこと有り、「幸にとどまりて内を好まるゝの病を諫め給はれ。多慾の爲に身を亡し給はむを憂ふ」といふ。こゝに



大雅諫めて、其の由を説いて曰く、「もし諫に従ひ給はゞ止まらむ。聞き給はずば速に還らむ」と。あるじ首をふりて「諫にも従はじ、還しもせじ」と、ますく門を堅くして守らしむ。大雅終に裏の垣を越えて歸りしとなり。或時は驛路に出でて、回國あるひは順禮の道者をも引きて、禮を厚くして留むるに、鐘をたて供人あまた具したれば、刀のためしもの料にあざむかるゝならむと心得て、大に懼れて逃るもの多かりし。又博奕の罪によりて世の境を放たるゝ者を、更に私して邸の内に引入れていふ、「生涯こゝに宿せば、猶禁獄も同じ」と。其の者をも賤しめず、詞を厚くして其の伎をなさしめ、その術の微に入るをよろこぶ。又ある時には従者あまた引連れ、馬上にて野路を過ぐるに、女乞丐の絃歌して錢を乞ふものにあひて、やがて其の絃をとりて自から弾きすすさびて興に入り、金を與へて去る。絃またもとより妙手なりき。凡爲す所人の不意に出づるは、王子猷に似たりとやいはむ。客を好むは鄭莊、孔北海の風あり。

池 大 雅 附 妻 玉 瀾

大雅池氏、諱は無名(阿利奈と唱ふ)字は貸成、通名秋平、書畫には或は九霞山樵と書す。京

絃—三味線
 王—猷—晉
 子—義—之
 鄭—莊—則—漢
 孔—北—海—後
 漢—孔—融—北
 海—の—相—たり

養拙様一寺
井養拙の書
風
望玉蟾一望
月玉蟾
唐伯虎一明
の人人名は
寅字は白
虎、詩文畫
を能す倪雲
林一倪迂、
元の人、雲
林は其の號
詩畫に工な
り

師の人。爲人肅敬、寵辱をもて心をおどろかさず。善く物と化して、苟も合し志を紆さず。外疎放にして、内實修、人と交りて謙遜し、しかもおもねらず。禮法に簡にして、往くべくして往かず、答ふべくして答へず。是を義にかへりみれば、いまだかつて失ふところあらず。惠みて望まず、廉にして鬪らず、其の取予得失において恬如たり。平生行事多く人の不意に出づ。是に於て畸人の目あり。幼にして穎異、文を學び書を學び能くせずといふ事なし。獨り繪の事に長ず。山水を圖する、尤妙なりと墓誌にいへり。幼くして穎異の事は、三歳初めて書を爲す。五歳書を善す。一日黃檗に至り、堂頭千呆禪師に謁し、席上大楷書をなす。禪師深く奇とし、謁を賜ひ、寺中の大衆もまた詩を賦して是を賞す。初め養拙様を法林寺中清光院に學び、後古法帖をとりて晉唐に沂り、畫は紀の國に往きて祇南海に畫法をとひ、又大和の柳里恭に彩色の法を學ぶ。又土佐光芳に國畫の法を學ぶ。時に望玉蟾とともに相いへらく、「從來畫家いまだ漢法を學びず。俱に是をはじめむ」と。玉蟾は唐伯虎を學び、此の翁は梅道人を學ぶ。各竟に一家を成せり。後又倪雲林に倣へり。漢法の山水を畫きはじめたる比、扇面に圖して自から携へ、近江美濃尾張の國々に售らむとす。人多く怪しみて買ふ者なし。是に於て空く京へ歸らむと

近江高島侯
一佐久間安
次

むつかりて
一ぢれて

て、瀬田の橋を渡る時、其の扇を出し、ことごとく湖水に投じて曰く、「是をもて龍王を祭る」と。後いくほどなく、書畫の名、海内に擅なり。好みて名山に遊び、高峻幽奥到らずと云ふ事なし。即取りて筆端の趣をなす。しばし富士に登るに、毎に其の路を異にして、富士の圖一百を作る。其の變状みな自から見る所、古今畫工未だ及ばざる所也。其の行事多く人の不意に出づる話をいはゞ、或時難波に出で立つに、筆携ふる事を忘る。妻玉瀾見つけてもちてはしる。建仁寺の前にて追ひつきて授くるに、道人おしいたゞき、「いづこの人ぞ、よく拾ひ給はりし」とて別れ去る。妻もまた言なくて歸れり。又近江高島侯の許にて障子を畫く。京に歸りて後其の報を賜ふに、吏云ふ、「禮服をつけて謝を申さるべし」と。道人諾して、やがて高島迄袴を著ながら行きたり。又江戸に下る時、某侯の邸に知る人有りて宿りす。六月十八日になりて、「けふは古郷祇園の社の御輿洗の神事なり。いでそれを學ばむ」とて、とみに紙もて偶人を作り、火ともし、はやしものして邸の内をめぐらむとする時、其の侯の世子「見たまはむ、先もて參れ」との使有りけれど、囃物に紛らはし、聞かぬさまにてかしくこゝに行きめぐりし時、「などもて參らぬ」とむつかりて、使たびくりに及びしに、今參らむといふ時、其の偶人を燒き失

ほりし—欲し

石刻の十三
經—清高宗
乾隆五十八
年大學にて
刊刻せしむ

ひ、「こはあやまちし侍り、されどこれは祇園の御神に奉る志なれば、又人に見せ奉らむ事を、神のほりし給はぬなるべし」といひしかば、にくみて速に邸を出されたり。「けにさもこそ」とて笑ひつ。又ある豪富者、畫を托せしに、月日を経て果さず、使至る毎に近日とのみいふ。一日童僕例のごとく来るに、尙畫かざれば、門を出づるより獨罵りて、「這の死畫師、人を勞する事幾度ぞ。自負歟、情歟、人をあなどるか」といへるを聞きて、急に走りて引きとどめ、「君がいふ所甚理なり、吾過てり過てり」とて、直に筆を染めて與へたり。又一書林の僕、主人の金を用ひて遊興し、放逐にあひ他國へ行かむとする時、道人の許へ來りて別を告ぐ。道人甚憐み、「我主人に佗びむ」と云ひて、持てる所の書畫調度を賣りて、その金をつくのひ、歸參せしめたり。中にも奇なるは、石刻の十三經を得むとて、年比心にかけしかば、たくはふる所の錢百貫に及べりしに、書賈なほ售らず。嘆息して其の錢を祇園の社に奉納す。時に御社修造の事あればなり。其の時のさま、わらむしろの大なる袋に巴を畫き、(神輿の紋なり)拾貫文つつ拾にして、門人とともに禮服を著し、青竹の棒もてさし荷へり。社司其の名を掲げむとせしを、固く辭す。されど誰となくてはあるべからずとて、玉瀾と記せりき。定めて此の類の話いかほ

眞葛原—山
城愛宕郡
舟岡—山城
愛宕郡

鞆衣—破れ
蓬髮—散し
がみ
磯材—書畫
川字云々—
感興至るな
り
玉の一字—
柳澤淇園の
號玉桂

ども有るべし。今は予記得たるものを擧ぐるなり。其の死病の時、初めより藥を服せず、此の度は起すと決しぬ。時安永丙申四月十三日、眞葛原の草堂に終る。歳五十有四。舟岡の南淨光寺、先人の墓側に葬る。墓誌は大典禪師著して石に刻む。此の爲人の全體は墓誌により、聞く所の話を添へて其の實を證す。

惠恩院六如大僧都圖像贊 竝小引

丈人以書畫著名海内。余向以室邇。屢相往來。略知其其人。蓋其真耦俗。隱于小伎者也。頃有入齋其遺像。求題一辭。余私欽高風。不揣燕陋。輒爲賦長句。字々實錄。不敢文飾。丈人有知。應撫掌於無何有之鄉矣。

鞆衣蓬髮意怡然。言語近禪形肖仙。避世仍懷濟世志。賣山不蓄買山錢。磯材滿屋纔容膝。川字成腔時弄絃。至竟深心誰可會。空令姓字藝中傳。

妻町子は、祇園林百合子が女なり。大典禪師の墓誌に、夫の行に配すと書き給へるおもむき、さきに擧ぐる筆を持ち行きながら、夫に應じ、無言にして歸れるごとくなり夫に學びて畫を善くす。柳里恭の號の玉の一字をもらひて、玉瀾と號す。夫とともに冷



名のいつくしきに玉瀾の名の立派なるによ
 大原女一京
 都の近在大
 原の里より
 出づる物賣
 女わらうづ
 草鞋
 與み一組歌
 數年の後一
 天明四年歿

泉殿へ招かれて参り、歌を學ぶ。始めて参りし時、所がらといひ、名のいつくしきに、
 いかなる婦人ぞと、御内の女房達、今やくと待ち居たるに、思ひの外糊こはき綿衣
 に、魚籠を引提けたる様、大原女のわらうづはかぬごとくなれば、大きに驚きけり。是
 亦寵辱を心とせざる夫の行に配するなるべし。道人はかゝる高名の畸人なり。かれよ
 り招き給へるなり。富みたるにもあらねば、夫婦ながら假初の禮義を表しても有るべき
 を、世人にまさりて季節の謝物をとよのへ参れり。歌はかの氣象に應ずるやうに添削す
 とのたまへりとぞ。又殿より、興じて、あかき蔽膝を婦に賜りしかば、春は母が名残の
 茶店に出でたる事もありしとなり。夫は三絃の與みといふものをさびたる聲して弾きう
 たへば、妻はまた古びたるうたをつくし箏にかけて弾く。其の箏の與みもまたよくせり
 となむ。世づかぬ家のうちのさまなりき。夫亡して數年の後身まかりぬ。

求大雅僧

大雅江戸より奥州に遊びし歸るさ、いづこにてか禪利に入りて午飯を乞ふに、住僧は他
 に行きてあらざりしかども、こころよくもてなして飯茶を進めたり。されば大雅卒に一

偈をとどめて去りぬ。住僧歸りてその偈を看て甚賞し、これが和を作り、跡を追ひて京の方に趣きしに、道路の間逢はず、つひに京まで來りて、こよかしこ尋ねれども、彼の偈に池無名と書けるまよにとひたれば、其の名を知る人なし。もともめ佗びて空しく歸らむとせしに、「せめて東山の寺社拜み給へ」と人の勸むるにつきて、まづ祇園の社に詣でたるに、繪馬殿に掲げし蘭亭圖に池無名と記したるを見つけて、やがて坊に入りてとひて、始めて其の所を知り、到りて對面に及びしが、「今は本意とけたり。京に用なし」とて、其の日旅立けりとかや。一偈の爲に數百里を追ひて、事遂けてまた他意なき洒落、いとも奇なり。大雅歿後に此の話を門人に聞きしかば、其の奥州の地名僧名ともに洩しぬ。惜むべし。

澤村琴所 苗村介洞 附妻女

國侯—井伊
家—譜弟
世臣—
の家來
心疾—發狂

彦根隱士維顯、字伯楊、澤村氏、號琴所、通名は宮内、國侯の世臣なれども、江戸に近侍せる日、心疾によりて退く。國制心疾を憂ふるものは復出で仕ふる事を得ず。故に意を官途に絶ち、城南松寺村に閑居す。其の居を松雨亭といふ。後再び起つ事を諷する

宋學—朱子
の立てたる
理氣の學

者ありといへども肯かず。貧を分とし、琴書を樂しみて隱を全くせり。天資溫恭、長中人に及ばず、狀貌婦女子のごとしと雖ども、事に臨みて勇敢なる、其一ツをいはゞ、平安より歸る日、湖中暴風にあひて船覆らむとす。衆人皆生ける心地なきに、琴所ひとり自若、舷を扣きて歌ふの類、其の平素に異なるを見て人怪しふに至る。又自から云ふ「吾固より一善狀なし。唯貨色二のものに在りては、未人に對して云ひ難きものあらず」と。又過を聞きては欣然として改む。奴隸の言といへども取るべき事あれば、必したがふなど、行狀に記せり。始め宋學を事とする事年あり。後東涯の門に遊び、又徂徠の書を読み、ますます古義を喜ぶ。其の主とする所經濟の學にして、著す所、桓公問對、富強録あり。出で仕へずと雖ども、國を憂ふるの志により、時を救ふの要務なりとぞ、又兵法に精しく、八陣本義其の外著書數部有るといへども、稿を脱せざるもの多しとなむ。又詩歌を好む。詩には琴所稿刪、歌には閑窓集をとどむ。元文四年己未歲正月九日卒す、壽五十有四也。其の詩歌は口氣平溫にして雅正なるものといはむか。おのれがおろかなる手にて選み出すにはあらず。唯その事狀にあづかるものを採りて、こよにまじへ掲ぐ。

京にありける比、名里持長亭にて、立秋の日、歌よみける中に、
かへらむと契りしあきを故郷のまつにもけふや風の告ぐらむ

松井幸隆亭にて、瀧の紅葉、

もみぢばの色にうつろふ瀧のいと染めて悲しき類ともなし

都の東山なる何がしの院にしばし在りける比、月いとあかりける夜、南面の

板鋪にひとりふせりて、むかし今の事、そこはかたなく思ひつゞけて、すこし

まどろみたる程に、過ぎし比なくなり給へる我が姉君の、ありしまゝの姿にて琴

をかいらし、いと心よけに見えたるを、あなうれし、つよがなくてぞおはしぬ

ると、打まもりてゐたる程に、夢さめぬ。夜ひややかに、人しづまりて、山松の

聲のみひゞきあひたる、いとあはれに物がなし。

はかなくもさめける夢か玉ごとのしらべは庭の松にのこして

このことを便に付けて、ふるさとの父君につけ侍りければ、今更に胸ふたがりて

など聞え給ひて、父左兵太之章、
麻山と號す。

見し夢をきくにつけても玉の緒の短きことの音をのみぞなく

雪ふりつゞきていとどしく、人め絶えたりける比、松寺邑の庵にてなるべし。

跡たえてとはれぬ雪のふる里はまがきの山も三吉野の奥

移居

都城西畔古街隈、三徑新依酒店開、非爲晨昏違定省、那堪琴鶴落塵埃、陶

潛門外先移柳、林連堂前未種梅、我自人間忘機久、江邊白鳥莫相猜、

去歲癸卯遷居城下、爾來應接日多、不堪其煩、乃將辭去、寄別諸子、

城外西風秋已深、荷衣轉覺塵埃侵、浮雲落日山川色、蕙帳杉扉猿鶴心、世路無端

多按劍、生涯寧復問遺金、接輿元是疎狂客、好去行歌楚水陰、

此の時の歌

いでてしも世に光なき三日月ややがてかくろふ山の端の雲

守野といへる山里にしばし住みし時、人のよみて贈りしうたのかへし、

なら柴のなれゆくともも世にぞ似ぬ秋の小田守る野守山守

こよをも住みすててし明の春、これかれ誘ひて、又遊びてなど、ことばがきあり

て、

古街—松寺
村—
我自云々—
我身の隠者
なるをいふ
蕙帳の決心
接輿—狂心
與—莊子に
見えたる畸
人

知らぬ翁云
「云一躬恒集
「ます鏡、底
なる影に
向ひぬて、
見る時にこ
そ、知らぬ
翁に、あふ
心地すれ」
丁未の春一
享保十二年

即事一見た
るまを直
に作れる詩
幽齋一静な
る書齋
烏紗一黒き
まどかけ

花もまたさすがに知るや立なれし山櫻戸の去歲のあるじは
物まうでの記の中に、あはれにおほえし詞とうた。老會の杜にぞ來たる。若かり
しそのかみ、笈を負ひ師に従ひて京に物學びしける比、行きかへる毎に、此の森
を過ぎし事幾度なりけらし。あはれ、身をたて道を行ひてと、心ばかりはこよな
うおもひあがりてけるも、名をあけ父母をあらはすこともなくて、いつしかに知
らぬ翁になりはてにけるよと、今更にいとかなし。
いたづらに老會の森の下露をわが袖にとはおもひかけきや
松寺の草庵は、ひととせ出でいにしより、こと人の住みけるを、丁未の春より、
又わが方へかへされてけり。秋にも成り行くまゝに、むかし植ゑ置きし萩のいと
よく咲きけるを見て、
年月をふる枝の眞萩いまさらにもとのあるじを花も忘るな
幽栖の趣を見るがごときは、秋夜の彈琴
醉把雙琴聊自彈 古松風定夜方闌 朱絃一曲千秋淚
回首西山落月寒

即事

幽齋讀書罷

靜嘯岸烏紗

遙見前村暮

歸牛度

稻華

題肖像

詩集本篇以
此作終之

有志無德

體柔氣剛

知厥不可

爰逃爰藏

短琴孤劍

荷衣蘿裳

十年心事

秋月滄浪

江の螢を題してよまれける述懐の意も哀なり

おもふぞよ入江の水草朽ちてもよはの螢のひかりある身を

ある禪院のはしらに書き付けられしうた

身ののちの名さへ朽ちずば埋木の花さく春はよし知らずとも

この心ばへいとかなしうおほゆれば、此の草案を書きつゞくる間に、かへしの意

を口ずさび侍り。

朽ちぬ名を誰もしのべと書きつめし君がみさをの松の言の葉

右詩歌集共に、此のわたりに藏せる人なかりしかば、近江の舊友にもとめて、からうじ

堀川伊藤氏
伊藤仁齋
の家

て得つ。和漢の文章もともに兩集に出でたれども、あまりに事繁ければもらしぬ。
○介洞は苗村氏、通名道益、世々醫を業として近江八幡に住す。若き時は堀川伊藤氏に
學びて文學あり。日々の事務をも漢文に筆記す。性豪にして物にもとせられず、しか
も無我なれば、人憎まず。其の一二をいはば、近村へ醫療に行く路の程、農人の早苗を
運び植うるにあふ。世のならはしに、苗植うるときは、行人勞を慰して過ぐるを、此の老
翁さもせねば、農夫等つぶやきて、「彼れ八幡の道益禮なし」と誦る。老人之を聞きなが
ら行過ぎて、歸るさに又此處を経る時、田にある人を小手招きす。さすがに知る人なれ
ば、田を出でて來るに、曰く「さきに我を誦れり。子よく思ふべし。子が苗うるも業也。
吾が醫療に通ふも業也。我もし子を慰勞せば、子もまた吾をしかすべし。いかに」と。農
人え答へず、頭を掻きて退く。又或家の請に應じて、病人を診て速に去らむとす。あ
るじ藥を乞ひしかば、曰く、「既に門を出でて數百歩行きたる客の爲に鑿をまうくるがご
とし。及ぶべがらず」と、終に出で去る。これらにて常の趣知るべし。其の口號も氣象を
見るべきものなれば、ここに擧ぐ。

惡ム 蚤ヲ

王猛—晋の
豪傑

漢君—武帝
不死の藥を
求めしこと

邊幅を修め
ざる—表面
の見えを飾
らざる

捕渠計盡復防難。開戸偶然見二月殘。

王猛手空憎爾

幾回誤把腐綿丸。

病中作

花欲辭枝看色移。

丹爐還少有誰知。

漢君衰晚豈無

感。起感秋風蘭菊時。

此の作ありて後、いくほどなく卒す。壽七十有五。寛延元年戊辰歲、十月二十三日なり。
介洞先に妻ありて蚤く亡す。後妻其の眞率邊幅を修めざる事、主翁に過ぎたり。老
後薙髮して貞信といへりしかど、ある名はいはで妙雷と人よびしは、其の聲四隣に
ひびき、心に思ふまよのこを打出す人なれば也。或は徒然なる所へ人到れば、喜
びて茶酒をもてなし、昔今の事をかきくづし語り出て、なきみ笑ひみ興に入る。客
座久うして、對するに懶くなれば、「われ酔ひてねぶたし。今は早歸られよ。いざい
ざ」と催さるゝ類ひ、常にゆきとする人は馴れて心にもかげざるのみか、戲に逆
ひて長居するもありし。是も若きより文雅を好み、師にもよらで歌をよまれしが、
中には俊發のものもありき。今其の二三を擧ぐ、

題しらす

同じ枝をいかに時雨のふりわけて青葉が中に紅葉しぬらむ

八十四といふ春、かけまくもかしこき御方より、高き齡をいはひ給ひて、連歌の

一句を、親しく御筆を染めて賜はりける。

百千とせ行末長き春日哉

此の時によめりしうた

かしこしなかなたのの草の露をしももらさで月の影宿すとは

享年八十六にして、身まかりなむとせしとき、

あま小舟八十の湊を漕ぎ過ぎて彼の岸近くなるぞうれしき

おのれもかしこにありける日、長居せしまらうどの數なれば、こよに追慕の筆を染む。

手島 堵庵

堵庵は手島氏、富小路三條街の人、家名近江屋源右衛門、隠居して嘉左衛門と改む。爲人篤實謹慎、少より石田勘平に従ひ學ぶ。石田氏は心法を主として、市井の人の爲に專

彼の岸佛語の到彼岸を思ひ寄せてよめるなり

束脩入門の時師に贈る禮物

ら修身を説き、齊家論、都鄙問答等いへる者を著し、一家の學を唱ふ。此の人歿して後、

高弟全門といふ老人（六角街の人近江屋仁兵衛隠居也）續きて講説すと雖も、其の徒尙

多からず。堵庵もとより貧しからざれば、金錢品物によらず堅く束脩を受けず。故に貧

賤吝惜の徒も喜びて學に赴く。社中の請に應じて、こよかしこに俗講をつとむる事年

ありて、終に其の學海内にひるがり、教の及ぶ驗もまたまよ見ゆ。近年米價登揚の間、

貧人に施を行ふ者、多く此の門下に出づる事は、世の知る所なり。尙又一二をいはば、

或婢女郷里に祖母一人有り、貧にして親族の養を受く。知るもの勸めて、「其の身得る

所の金をわかちて、養を助けよ」といふに、婢肯かず、「吾が身親族の手をからず、自から

衣食するは、猶祖母の幸なり。其の上に何の奉養をかいはむ」と。然るにいつの比よ

りか、その仕ふる所の家婦に従ひて、堵庵の講を聞きしより、先の言を悔いて、しばし

ば祖母に物を贈り、孝の心を運びしとなり。又或女、鼠に衣食を嚙はれて、腹立ち悲し

みしが、かねて彼の心法を聞きしはこよぞと思ひて、一夜靜坐して省る事あり。自か

ら怡悦て口すさむ。

今までは鼠が喰たとおもひしに私が喰たとおもやをかしい

不生佛門
上條阿字本
不生を見よ
王陽明一明
の大儒、良
知を致すを
主とす陽明
學派の祖
良智良能
學ばずして
知るを良智
とし、學ば
ずして能く
するを良能
とす
一丁字を知
らす一山文
黒谷一山城
愛宕郡にあ
り

といへり。凡教示の旨、自を抑へて他を恵み、庶人の分を守りて、希望を斷つべし、儉をつとめて、吝なる事なかれとなり。又常に本心を觀よとすよむ。或は物を扣きて「是何ぞ、手を拍て聲いづれにありや」と、時々研究せしめ、旨にかなへば許可す。其の著述を看るに、播磨盤桂禪師不生佛門と説かれしによるよしなり。故に或は禪儒の諷ありといへども、是また王陽明の所説、良智良能に基せるか。其の師石田氏、母の病めるに藥を進むる時、省する事ありしとかける趣なり。また此の流の人、文字をいはず、門生目一丁字を知らずして、常に俗講して、大に行はるゝもあり。是によりて、文學の人は甚だ卑しむれども、もとより學者を教ふとはいはず、市井の人の人道をしらず、自性を識ざるを導くとなれば、世に有益の事とすべし。腹中萬卷の書を藏し、文章天下を驚すとも、只利名の媒とするにまさらざらむや。世間此の流を汲むものは又聖をもて仰ぐ。一とせ此の翁大和へ講に赴く旅途の間、竹籃を擧げ出でて、しひて乘らしめ、道を聞き傳ふる恩義の爲にすといふ人あるに至る。去年歿せる時も、遠近四方葬に趣く者、千をもて算ふ。其の居より黒谷に及びて、二十有餘町ばかり、道路の間往來是が爲に狭く、先だちて至り、後れて急ぎ、終日人立込みしも、今世僧俗の間聞く事稀なる所

定省一父母
の安否を問
ふこと

御厨子所預
一禁中にて
朝夕の供御
の物を調ふ
る厨所の頭
庖丁一食膳
の調理
有職一朝廷
の禮儀作法
の故實

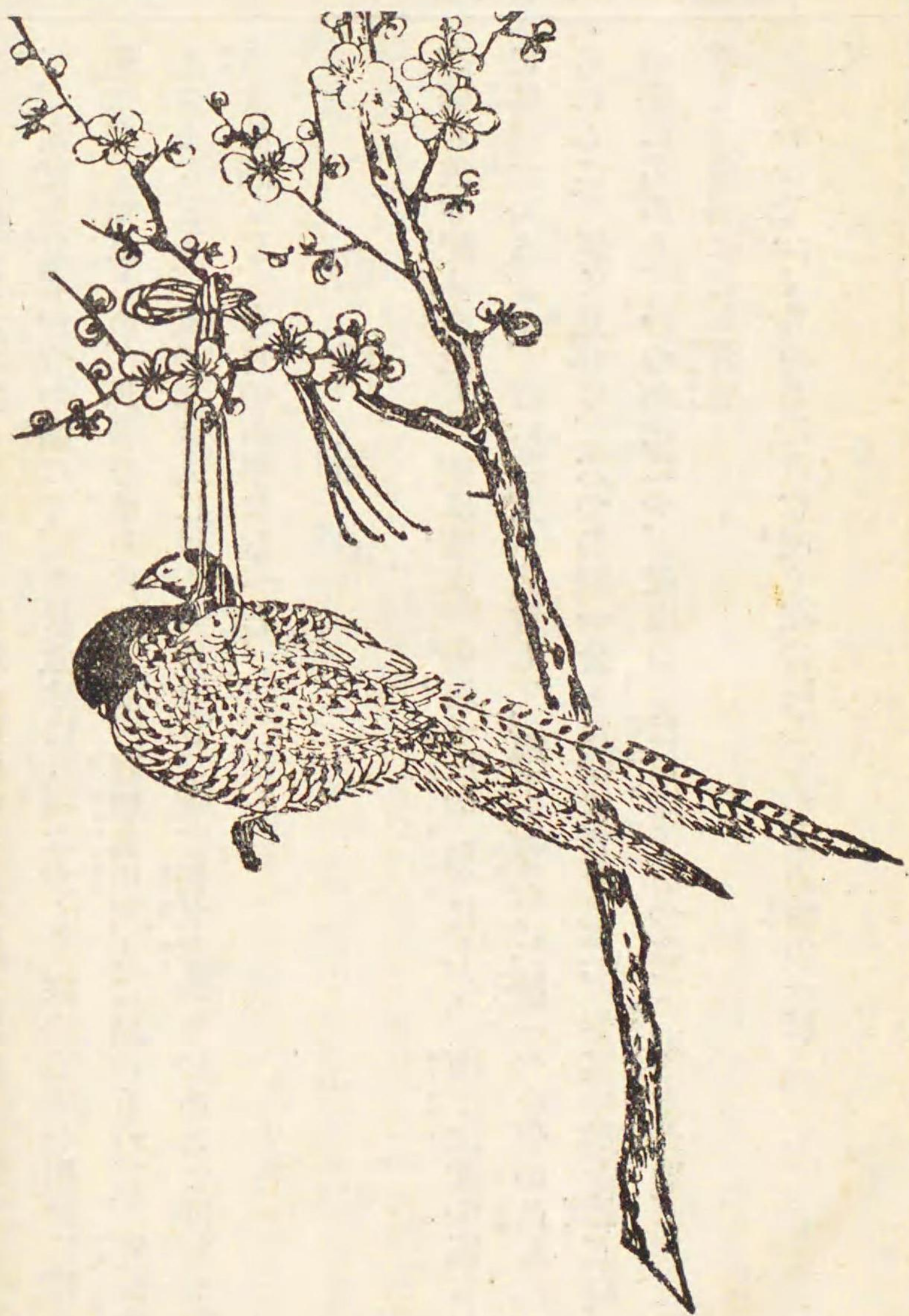
なり。翁晩年山水の興を思ひて、郊外に通れむと思ひしかども、子弟定省の爲めに勞して、家業を怠らむやの懼にて、本居近きに住みながら、庭のさまを田野に摸して、僅に稻などを植ゑしめ、思ひを遣りけるとぞ。野服葛巾門人に助けられて、花紅葉に遊行せしさまなども、風流なき人にはあらざりき。著書假名書のものあまた印行せり。兒童に示す前訓など、今日の小學なるべし。

高橋 圖 南

高橋若狹守紀宗直老人、號は圖南、御厨子所の預にして、庖丁は其の家なれども、殊に勝れたりとかや。或時諸友六人會して、庖丁を望むに、鯉一つを何の品もなく六つに切られしに、能く見れば、六つの割一分もたがはざりしに、皆其の妙を感じぬ。尤有職の學に名あり。いつの比にや、紅梅の作枝に雉子をつけて奉りし時、
靈元法皇賜はせる御製

又

いかでかく作り出でけむ咲く花の時しもわかぬ梅の一枝



中御門院の御時、勅によりて、同じく梅に鳥をつけて奉るとて、よみて添へたりし、

時しあれば傳へしわざもあらはれてもてはやさるる梅の一枝

寶曆十三年
御即位後
櫻町天皇御
即位
小御所將
軍參内の時
裝束を更へ
休息する所
笏束帶の
時手に持つ
小坂
紫清兩殿
紫宸殿と清
涼殿
大内裏正
式の宮城

寶曆十三年御即位の日、白馬の瑞祥の勘文を奉る賞に、從四位下を授けらる。又某年、小御所にして白鳥庖丁の時、祿を賜はりしに、笏なかりしかば、懷のたよう紙を是にかへて拜す。手に取るものなくて拜舞するは、其の儀にあらずといへりしを、知る人は感じき。又紫清兩殿の圖を古にかうがへて正しけるを、勅によりて奉りしも譽也。猶大内裏の圖も考へ置けるよし語られしが、有職の故事を集め、自から撰ばれし寶石類書百餘卷に及ぶを家に藏す。其の奥に書かれし歌、

拾ひとり捨つるもをしといろくの石を寶とおもふおろかさ

又一笑話有り、上京の鍛冶に狐つきて、「今は此の業をせじ。出身する」などいひて狂ひけるに、老人たいめして、「狐にてあらば庖丁をうちてあたへよ。是はおほやけの御物を調する料なり。是ばかりはうつべし」といはれしかば、雌雄二刀をうちしに、雌のかたよ

堅田祐庵

苻朗易牙
苻朗は晉の
人、易牙は
齊の大夫

厨下—臺所

祐庵は北村氏、淡海堅田の浦の豪農にて、茶事に熟し、物の味を知る事は、いにしへの苻朗、易牙にも恥ぢず、傳ふる所の話多し。常に奴僕をして湖中の水を汲ましめて、茶の水に用ふるに、某の所と令す。其の指所にあらざるを汲み來れば、必又其の所を知る事神のごとく、終に欺く事を得ず。魚鳥の得る所を知るもまたかくのごとし。しかのみならず、ある人豆腐の串に貫きたるを(俗に田樂といふ)食はしむるに、「此の串の竹は遠く來れるものなり」といふ。主も知らず、厨下に問ひしに、「浪花より物を荷ひ來る竹をもて削りたり」といひしなどは、奇といふも餘あり。又或る家にて、碎菜の羹を出せしに、「此の菜は男のたよきしなり」といひしかば、厨下に問ふに然り。「是はいかにして知り給ふや」と問ひしに、「男の扣きしはあらし。女の力能く是に適へり。必女にせさせ給へ」といひしとぞ。かよれば、人に物を饗する事必ず慎めり。所がら湖中の鯉鮒の類を調するに、魚板數枚を用ふ。はじめ鱗をはなつより、肉を切るにいたるまで、次を追ひて板を轉す。「かくせざれば、うつり香ありてなまぐさし」と云へり。一日京師にて茶事の友に

源五郎鮒
鮒の變種
近江琵琶湖
の特産

探幽—狩野
守信
加賀侯—加
賀中納言
扶持—俸祿

逢ひたるに、「名にしおふ源五郎鮒食せ給へ」といふに、「さらばいくかに」と契りて歸る。其の日友人の至る時、其の門鮒數十をとり入るよを見るに、食につきて出したる所、僅にして腹に満たず。友人恠みて、「さしも數多取入れ給ふと見しに、是はいかに」といへば、主笑ひて、「望み給ふ所の源五郎鮒の眞なるものは、數十の内にて一二を得難し」といへりとなむ。又庭園の作意に長ず。其のつくれる所の庭、堅田大津などに残れるを見て、その道知る人は及ばざるを嘆ずとかや。此の人の所爲、畢竟茶博士の奢侈なるものにして、子弟の爲に語るべからずといへども、味を知るの異能におきては、他に比すべきなし。奇といはざらむや。享保の中比まで有りし人にや、予相識の老人、茶事をもて交りたる人ありき。

久隅守景

守景は久隅氏、通名半兵衛、探幽法印の弟子にて晝を能くす。家貧なれども、其の志高く、容易人の需に應ずる事なし。加賀侯、守景を召して金澤に留め給ふ事三年に及びしかども、扶持賜はるけしきもなかりしかば、「かくては故郷にあるも同じ。歸りなむ」と

て、候の近侍せる士に別を告げしかば、「理なり」とて、そのよしを申しけるに、侯笑ひ給ひて、「吾よくこれを知れり、然れども、守景は膽太くして、人の需に従ふものにあらず。其の畫もとより世に稀なるものなり。されば、此の男に祿を與へば畫を描くことをばせじと思ひて、かく貧しからしむ。今は三年に及べば、畫も國中におほく残りなむ。さらば扶持すべし」とて、ともしからず賜ひしとぞ。

樂天—唐の
詩人、白居易
易

按ずるに、守景の爲人固より奇なり。侯の人を知りたまへる事明にして、又謀り給へる所尤も奇なり。樂天が鷹を養ふ篇に、飽しむれば放れ、飢しむれば馴れずといひて、人事をさとしけるも思ひ寄せられぬ。

土肥 二二三

二三じさんは俗稱土肥孫兵衛といふ。(茶人花押藪に土岐といへるは誤也)三州吉田府、牧野侯に仕へ、祿二百石を食む。一子を失ひて、忽隱心を生じ、仕へを辭して頭おろしたる時、とく聞きつけて文おこせたる人々あり。其のかへりごとを、人におほせて書かするに、「今までの名は似つかはしからず。法師の名は何とか」と問ふに、「否、まだ名はなし。二

中風りたり。

二三翁自畫

タアア
花すめ

た
と
う
き

有
り

ら
く
か

味
あ
れ



岡崎—山城
愛宕郡
火宅—現世
煩惱の苦を
火に、宅を
三界に喩へ
たる語
自在—束縛
なき意を自
在鍵に言ひ
掛く
織田の風—
織田有樂齋
の流
伯倫—晉の
劉伶常に一
僕をして鋤
を荷ひて從
はしむ曰く
我を倒れん
處に葬れと

とも三とも書けかし」といふに、やがて二三と書きたれば、是よき名なりとて、それにし
たるなり。後都の岡崎に住みて、自在軒といふ、纒に膝を容るよばかり也。
火宅とも知らで火宅にふらめくは直に自在の鑑子なりけり
是より軒の名によびける。茶は織田の風を學び、また香を好む。平家を語りて、琵琶はし
かも上手なりしとぞ。常に驚くばかりの美服を著たりしが、あるとき古下駄を繩につな
ぎてもたるを、「いかに」と問へば、「かりし人に返すなり」と云ひし事もあり。物事に
心をとどめず、往來する所定なし。懷に金貳片をたくはへて、其の包紙に、「いづこにて
も倒れなむ所にて、體をかくし給はれ。是は其の費に充つるなり」と書き付けしは、伯
倫が鋤を荷はせたるよりも、たやすきしわざなり。されど、すぐよかなる人にて、齡九
十に近づきて、足駄はきて、黒谷の茶店へ物喰に行く事日に三たび、「三十文錢一日を過
すに足る」といはれしとなむ。始めは火けし壺といふものに米をたくはへぬるよし。それ
も、懶くなりけむかし。杜鵑と銘ある琵琶一面、平家二巻を、三河の士、山田氏にあた
へて、今なほ其の家に藏せりとなむ。

廣澤長孝

長孝は望月氏、名兼友、京師の人にて、廣澤の閑居をさよのや（小々の意なるべし）とい
ふ。歌學は貞徳翁に傳へしが、其のよみうたは藍よりも青しと見ゆ。
けふもまた垣根のうばら傳ひきて霜踏む鳥の跡は有りけり
とよめるより、其のやどりをまた、霜ふむ鳥の庵と人は呼びけり。ある時、人の許へ庭
の栗を贈りて、

つらかりし寐覺のおとも忘れられて明くれば拾ふ庭のさよ栗
など幽居のさま思ひやる。されど、其の代此の道に名高くおはする公卿も、花によせ
月にかこちては、とぶらひきませる趣、家の集に見ゆ。其の中、八月十五夜に、やごと
なき御方々と共に雨を恨みて、

よしや吹けあきの草木の嵐山月のかつらも雲にしをるる
此の歌によりて、其の集を桂雲と後に名付けたり。諸卿深く感じ給へる故とぞ。其の卷
頭の歌、年内立春

貞徳翁—松
永貞徳、俳
諧の大家
藍よりも云
云—青は藍
より出でく
藍より青し
師より勝る
事の喩

年はまだつれなく残る有明の月よりかすむ春は來にけり
同じ比、或宗匠のよみ給へるに、

年はまだのこる日數を朝がすみ立隔ててや春の來つらむ
といへるは、いとよく似たるものよ、廣澤の霞や立まさるらむと云る人も侍りしか。延
寶九年辛酉三月十五日、即天和元年なり。六十三歳にして終る。此の門人に、風觀窓長
雅洛下に名有り。その次に、有賀以敬齋長伯、家傳を嗣ぎ、此の流れを汲む人多く、地
下の一流と稱す。以敬齋は和歌よみかたの書をあまた著し、初學を導く。印行拾貳部に
及べり。

僧 似 雲

僧似雲、始の名は如雲、安藝の國廣島の人なり。歌を好み、都にのほりて、儀同三司實
陰公に學ぶ。(後ゆゑありて參らずなりぬるとぞ)名山靈地こよかしこに遊び、住所を定
めざれば、世に今西行といへるを聞きて、自らも、
西行にすがたばかりは似たれども心は雪とすみぞめの袖

地下の一流
—民間の一
派
印行十二
和歌八重垣
濱のまさご
和歌麓の塵
等名高し
儀同三司—
准大臣の異
稱、實陰は
武者小路三
條西の支族

救世菩薩—
觀世音菩薩

と戯れける。されば此の上人の墓所さだかならぬを歎きて、石山の救世菩薩に祈り、其
の靈告によりて、河内國弘川寺をもとめ得たり。そこにて唯行塚といひならはして、其
の由も定かならざりしを、石のしるしを建て、はた其の寺に有りける肖像をも搜し出で
て、堂を造立し、自からも山中に庵を結びて住めり。春雨亭といふ。其の時の歌に、
なみならぬ昔の人のあととめて弘川寺にすみぞめのそで
その庵のひろさ、疊一ひら二ひらに過ぎざれば、人々見て、今すこしひろめよといひけ
れば、

我が庵は方もさだめず行雲の立居さはらぬ空とこそ思へ

此の山にあるほど、又いづこにまれ一人住める時は、搔餅といふもの二ひらを舌にのせ
て、一日の糧に充て、飯炊く煩を除きけるとぞ。こよにあまた櫻を栽ゑさせて後、所の
山人へまうすとて、石に彫る歌、

折り添へて徒に散らすな山柴にまじる櫻の下枝なりとも

須磨の浦に有りける時、久しく絶えたる鹽竈を興じて、しほやきそむるとて、
是延享四年卯
正月十五日
とその自記
に見ゆ。



絶えて見ぬもしほの煙たちかへり昔にかすむしほ籠の浦

しほたれし昔の人の心まで今日汲みて知る須磨のうら波

我が再興せし鹽かまも、又けぶりの絶え侍りければとて、

身にぞしむ又こそすまに焼くしほの煙も絶えし跡の浦風

あらし山のふもと、大井の川邊には、弘川とまたく同じきさまの庵をつくる。

住みかへむ秋はもみぢのさがの山春はよしのの花の下庵

その吉野にて、庵を結ばむとせしに、さはる事ありしかば、

露の身をおく計なる草の庵むすばむとすれば山風ぞ吹く

されど、苔清水の奥に、しばし住みける跡あり。

其の外高野の奥、龍門の瀧の邊など、世離れし所々に住める趣、其の自記「おもひ出ぐ

さ」「年並草」などに見ゆ。八句にあまりて、和泉國躰尾なる豪富北村氏に身を寄せて、

そこにて歿す。骸は遺言して、弘川に送り、西行と同じさまの墳を築く。著す所、右二

記の外、似雲聞書と題して、儀同公の御説をたゞ事に書きつけたるものあり。雑話もまじ

れり。耳底記の體にならへるか。葛城百首といふものは、弘川にありてよめる所にして

耳底記一
卷、細川幽
齋の説を、
烏丸光廣卿
の記せるも

長秋詠藻
藤原俊成卿
の歌集

一圓相云々
一圓窓を作
る事
持佛一常に
己の室に安
置して崇拜
する佛
須達一梵
語、施主の
義

信仰の人梓にのほせたり。その外ありやえしらず。

似雲は、其の比風流の道心者といへり。その跡を見るには、名を好める人にやと評せる人侍りき。按ずるに、西行上人弘川寺にて終り給ふことは、長秋詠藻にさだか也。そこに葬るとまではなけれども、尋ね行きてもとめなむには、其の行塚も知らるべきに、観音薩埵を勞し奉りけるも、かたじけなし。其の靈夢のなぞく、尤もむづかしきことなり。凡此の人は夢をよろこぶにや、その自記のうちに、なほ見えたる事どもありき。又居を好む僻あるか。その弘川と嵯峨の庵、作りざま、またくひとしく、西に一圓相を穿ちて持佛に代ふ。廣さは纔に二疊かほどにたくみ有りて、庵室のごとし。これらの跡を見て評せるにや、狭き庵の好みに過ぎたるは、其の意の狭さ知らると、涌蓮法師もいひき。されど、其のまねぶ所の西行上人のうたに、世を厭ふ名をだにもさは止め置きて數ならぬ身の思ひ出にせむとあるを見れば、此の人も亦其の境界の名をとどむるは、一種の風流とや思ひけむ。何れにまれ、善き須達を得て、生前歿後、其の好にかなひけるは、たれもうらやむべし。かう書きつくるも、毛を吹き疵をもとむるの誚を得ぬべくやあらむ。

僧 惠 潭

僧惠潭は奥州白河の士、姓は坂上にして、並河を稱す。諱は義豪、通名は遁世の後深くつよめるよしなれば、こゝにもらせり。其の人となり、温順にして、文雅を好み、しかも弓馬の達者にて、從ひ學ぶ人もありき。然るに、若き時より遁世の志を懐く故に、妻をも具せず、甥を子として家を繼がしめ、姪女を娶りて是が妻とし、子一人ある比ほひ、自からは同家のしりへに隠居してありしが、時よしと思ひけむ、髻を切り、ひそかに家を出で、刀脇指をも具せず、携ふる所は歌書一まき、金壹片の路費のみ。駿河の原に至り、白隠の徒に從ひて禪を學ぶ。年比の歌の師一室梅井氏に來りし日、昔にも似ずやつれたる姿なれば、鼠色したる木綿の小袖を施したるに、頓て同行の僧に與へたり。銀を施したる時もたくはへず、直に伴ふ僧とともに、「めづらしく京に登りたるかひに」とて、劇場を看たり。よろづの事に心をとどめざる事此のごとし。吉野山の奥赤瀧といふ谷深き里にも、一歳ばかり住めりしが、熊野の奥山にして終れり。時六十八とかや。遁世の後は、故郷の親族にも在所を知らせず、終りけるよしも、彼の梅井氏よりほめかしかけるのみ

とぞ。されども、勤仕全かりし上、出家は先君の御菩提をとぶらはむ爲の志と聞えける故にや、其の家は祿も減ぜず、さながら相續したり。此の人は西行をまねぶにはあらで、おのづから趣似たりとやいふべき。歌もあしからざりしかど記得せずと、梅井氏云へり。

矢部正子

正子矢部氏、はじめの名は久子、美濃國芝原の郷北方の人、年十六にして、同じ國結の里大平氏に結びて、一人の女をまうく。十九といふ歳、其の夫の忍び妻の故をもて忘られて、かの女をつれて母の親の許に歸れり。後再び嫁せず、家移して母兄ともに京に住めり。歌よみ手かく事を蘆庵小澤氏に學び、其の外茶香の風流をはじめ、女禮長刀の態まで學ぶ事多かりき。此の間かりそめに故郷にくだりたる時、もとの夫、後の妻もあり、子もいできたるに、野中の清水わすれがたくやありけむ、仲だちしてとかくいひなびけむとし、文をさへおくりしを、さながらかへすとて、一首のうたを添ふ。

秋にあひて枯れにしものを今さらに何おどろかす荻の上風
女の爲に、おのれ宮仕への志ありしかば、二十六といふ歳に、何がしの國の守の姫君

野中の清水
いにしへ
の野中の清
水ぬるけれ
どもとの心
を知る人ぞ
くむ

のかしづきに参りしが、名を呉とたまひ、江戸に仕ふ。才あるからに、たぐひなく時めかし給ひしに過ぎ、女伴の妬にあひて退く。さて江戸にある事一歳あまり、相知る人の勸むるにより、歌の道を教へけるが、學ぶ人百に及ぶ。さるにはからず火の災にあひて、こかしこ逃げまどひ、辛うじて身一つまたくして京へ歸らむとするに、母にあづけ置きたる娘先に死し、つぎて母も失せにしとき、歸りつきて、悲しみに堪へず、こしかたの身の幸なき事をもとりあつめてやらむかたなく、尼になりて惠靜と名づく。時に年二十八なり。その時親しき人々とどめしかば口すさびし歌、

浅からず諫むることに背かめや大かたに世をうしと思はば
やつがりも、おとどひながら常に交りし人なるに、この折はあふみに侍りしかば、いひやりける。

かわく間も涙に袖の朽ち果てて衣かへぬときくはまことか
思ふにも違ひのみ行く世のうさや眞の道のしるべなりけむ
返し

墨染にころもの色はかへしかどかはらぬものは袖の上の露

やつがり
拙者

思ふ事けに違はずば世の中のおだなる道に迷ひ果てまし
 おもひのつもりにや、登る年の秋長月病みて終る。才ある女の中々に幸なきは、妾薄命の詩題あるがごとく、大和唐土にためし多かれど、正に知る人の上にかゝるがいと哀にてしるす。骸は鳥部山に葬る。其のよめる歌は、よしと思へるも多かりしを、例の數多はおほえず。

雁をよめる

鳴く雁の聲もはるかに隔たりてつばさ消え行く秋霧の空

衣によするこひ

おもふ其の人には著せじ月草のはな摺衣うつろふがうき

題しらす

水底に沈める月も入り果てば何を憂身のたぐひにはせむ

瀬によせておもひをのぶ

世の中は飛鳥の川と聞しかど身の憂瀬こそ變らざりけれ

歌の集は其の兄敬壽正直が許に藏せりしが、正直もまた此の比疫によりてとみに身まか

る。京にありわびて故郷へ歸らむとせしが間なりしも哀れなり。此の人さして長せる事はなし。唯記憶の強き事はさらに類なかりき。涌蓮法師生存の日は、「吾が歌此の人に語り置けば、筆に記すよりもさだかに、時ありて問ひ聞くによし」といへりし。是につきて奇特なる事は、人の詩歌を聞きて、たまく文字一つ、てには一つなど、思ひたがへしまよに人に語る事ありて、聞き直しつれば、やがて其のかたりし人の許へ行き、其のよしを告げし。かりそめの事なれど、かたきことなり。

祇園梶子

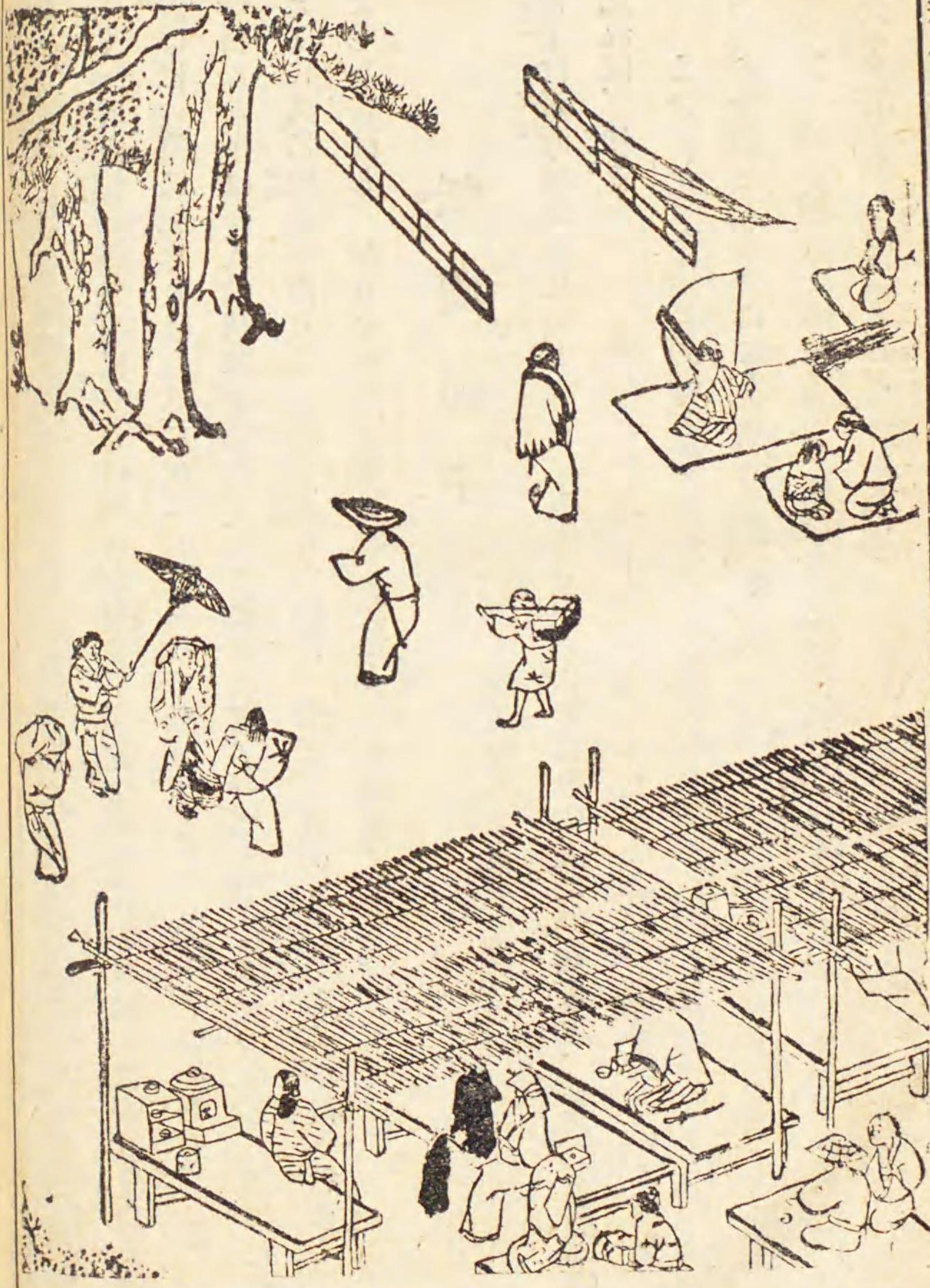
梶子は祇園林の茶店の女なり。もとより其のわたりの人にや知らず。其の家集梶の葉を見れば、幼きよりよく歌をよめり。十四になりける年の暮に、歳暮戀といふ事を、

こひ／＼て今年もあだに暮れにけり涙の氷あすやとけなむ

又其の秀逸とて人の口にあるは、夜霞を、

雪ならば梢にとめてあすや見む夜の霞のおとにのみして

また立春の歌、己はよしとおもへり。



のどけしな豊葦原の今朝のはる水のこころも風のすがたも

○百合子は、梶が茶店をつぐよし、自からいへりし。是も歌を好みしかども、梶に及ばざる事遠し。たゞ茶店の女にして歌よむといふが、めづらしさに、るなかまでも、その名聞えたり。これがむすめ町子は、大雅が妻となりぬ。既に大雅が傳に出せり。

室町宗甫

うるせく—
うるさく—
かごかなる
所—靜なる

宗甫は、京師室町四條街に、何がしといへる豪商なりしが、男子二人俱に無頼なるがゆゑに勘當す。然りし後、世の中うるせくおほえて、「他の子を嗣として家を譲るとも、此の二人のわるもの來りまつはらば、心よからじ」とて、其の家をはじめ、ある所の調度ども、皆賣りたてしに、貳萬金になりぬ。おのれは、かごかなる所に籠りて、世の交もせず、彼の金はまどしき人に施す料とす。されば、「かうくくなる人いと悲しきさまなるを、錢少しあたへ給へ」などいふ人あれば、「いな、我もまどし」と口にはいひて、ひそかに金五兩包みて其の家に投げ入る。あるじ此の人ならむと推して、謝に來れば、「否、われにはあらず」といふ。不意に人にあたふる金は必五片に定む。もしまた貧にして家を賣

心のゆくま
ま—氣儘に

る人ありと聞けば、價高く買ひ、損じたる所をつくるひて、移り住むかと思れば、やがて價賤く賣りはなつ。常に陰徳を行ふ事此の類にて、二萬金残なくなりぬ。またをかしき事は、河豚を好めども、世にありし時は怖れて喰はず。「今はあるもなきも同じ身なり」とて、あけくれ是を喰ふ。貧しくなりて好む物は、唯こればかり也。常に鼠色の綿衣、墨染の布衣を著たるまよにて、病みて死なむとする時、纔に錢三百文米二合あるのみ。されども、此の人の恩によりて、富みたる人々、これかれ聞きつけて訪ひ來り、ねもごろに介抱して、終をやすくせり。二十餘年心のゆくまよに過して、七十有餘なりしとなむ

惟然坊

惟然坊は、美濃國關の人にして、もと富家なりしが後甚貧しくなれり。俳諧を好みて芭蕉の門人なり。風狂して所定めずありく。發句もまた狂せり。されば、同門の人彦根の許六、其の句を集めて天狗集と名づく。ある時ばせをと俱に旅寐したるに、木の引切りたる枕の、頭痛くやありけむ、自からの帯を解きて、これを巻きて寐ねたれば、翁見て、「惟然は頭の奢りに家を亡へりや」と笑はれしとなり。或時、故郷の篠田氏なる人の

和讃—經文
の偈を和語
にて作れる
もの

もとにて數日滯留し、浴に入りたるが、いづこへか行かむと思ひ出でけむ、其の浴所に女の小袖のありけるを、あやまりて取かへ著つよ、忽失せたり。さも知らで、其の家くまぐままでをたづねて、大きに騒ぎしが、四五里外の里に遊びてありしとなむ。又師の發句どもをつどりあはせて、和讃に作りて、常に諷ひありく。これを風蘿念佛といふ。(風蘿はばせをの號なり)

まづたのむく推の木もあり夏木立音はあられか檜木笠南無あみだく
此の例にて數首あり。此の人の娘は尾張名古屋の豪家に嫁したるを、かく風狂しありく後は、音信もせず。或時名古屋の町にて行きあひたり。女は侍女下部など引つれてありしが、父を見つけて、「いかにかおはしましけむ、なつかしさよ」とて、人目も恥ぢず、乞丐ともいふべき姿なる袖に取つきて歎きしかば、おのれもうち涙ぐみて、
兩袖に唯何となく時雨哉

といひ捨てて走り過ぎぬとなむ。此の人の書けるもの、或人の持てるを見しに、手いよくて、詞書は、有_ル千斤金、不如_カ林下貧_ニと書きて、
ひだるさに馴れてよく寐る霜夜哉



又關の人の持てるには、詞書、世の中はしかじと思ふべし。金銀をたくはへて人を恵める事もあらず。己をもくるしましめむより、貧しうして心にかよる事なく、氣を養ふにはしかじ。學文して身に行はざらむより、知らずして愚なるにはしかじ。

人は知らじ實に此の道のぬくめ鳥

これらにて其の情その生涯のありさまを知るべし。

淡海狂僧

いづこの人といふ事を知らず。乞巧のごとくにて近江愛知川のわたり、高宮のほとりを狂ひ歩く僧あり。或時、彦根某寺の和尚に行き逢ふ。狂僧問ひて曰く、「和尚法味は如何」答へて曰く「流るゝが如し」詰りて曰ふ、「塞かば如何」和尚答ふる事能はず。狂僧頓に和尚を推し倒し、柱杖を奪ひて背を春きうたふ、「一夜ちんくちがはば、いく夜さちがふも知れませぬ。和尚什麼」と、即走り去る。是の比の童語を用ふるなり。彼の師家も恥ぢて寺に歸らずといふ。

ぬくめ鳥
冬夜、鷹の
小鳥を擒へ
て握み、其
の脚を温め
たる後、之
を放ちやり
其の鳥の飛
び行きし方
には、其の
日は行かず
とぞ、この
鳥をぬくめ
鳥といふ

表太

表太は貞享元祿の間の人、京師新町四條の北表具師太兵衛なり。人唯表太とのみいひならはせるとか。老いて後男子三人、皆家をこくに構へたるがもとに、一夜づつめぐりてやどる。明くれば出でて野山に交りつゝ、春秋の花紅葉は更なり、月の夕も雪のあしたも一日も怠らず。されば人その花はいつ比ととひ、かしこの梢はいつ染めむなどとふには、其の比をさすに必たがはず。何時となく黒き頭巾かうぶり、身のたけにあまる杖のうちにしこみて、肴を入れ、瓢のさましたる白かねの器に酒をたよへ、ながくと提けて、腰は二重にて歩む。或春仁和寺のわたりにて、俄なるむらさめに、人皆まどひてかけ走る中に、この翁のみのかなるおもよちにて、「ふるは春雨か」と唄ひしを、今もわすれずと、四十年前語る人も侍りし。花のもとにて唯獨酒のみ、眼鏡をかけてゆきよの人を見、又何かゑがけるものを常にたづさへて、木のえだにかけ、ともとす。その比、京師奇人の第一名なりしとかや。また書畫の鑒定には長じたりとなむ。世は澄めりわれ獨こそ濁り酒酔はばねるにてさうらうの水

仁和寺山
城國葛野郡
さうらうの
水「候ふ」
に滄浪の水
を言ひ掛く
屈原漁父辭
に滄浪之水
清兮可以濯
吾纓濯兮



と戯^{たは}れたりしもをかし。

近世畸人傳 卷之五

並河 天民 附 馬杉亨安

國老—伊豫
松山侯の家
老

天民並河氏、諱は亮、字は簡亮、即通名とす。誠所五一（名永崇、字永父、仁齋の門人、五畿内志の作者、後伊豆三島に住す）の弟、城南鳥羽横大路の人。自から丹波と書けるは、その本國か。爲人膽斗才秀、比すべき類なし。伊藤仁齋に學ぶと雖も、後その學を疑ひて、自から一家を成せり、其の説は、天民遺言に見ゆ。此の中伊豫松山に下り、學を講じ、別に臨みて、其の國老の請に應じて、著せる松山語語の一篇、「其の領地の治まらざるは一己の治まらざるなり。座禪僧の蒲團上に鼻端の白きを守るときにはあらず」といへるなど、其の經濟の才を見るべし。又論語郷黨篇に題し、
 畫得金毛獅子。畫皮不畫骨。那箇這骨。道々。
 と書き、其の説に、「此の篇孔夫子の禮貌を形容せりといへども、是皮毛なり。「我を用る者あらば、芥月のみにして可也。三年にして成る事あらむ」或は、「訟を聞く事我猶人の如

六尺の孤云
云一遺孤を
託して國政
を委ねべき
人にあらぬ
事、論語泰
伯篇の語

し、必や訟なからしめむか」など宣ひ、又魯の政を聞く事三月、魯國大に治まるごとき、その骨也」といはれしとぞ。仁齋歿後、其の徒東涯に従ふ者と、天民に屬する者と分れたり。或時門人集りて、「先生もし志を得給はば、吾は何にか使ひ給はむ」などとりぐいへる時に、一人「吾ごときものは物の用に立つべからず。唯倉廩を守るにおいては、一粒米をも掠むべからず」といふ。天民、「子がごとき人に、いかで倉廩を守らすべき」といへれば、その人色をかへて、「こは情なき仰や、盗むべきものとや思し召す」といへれば、先生笑ひて「否、自から盗む才ある人には托すべし。子は人に盗まるべき人なり」といへり。又東涯此の人を評して、「其の才は拔群也。されども六尺の孤を託すべからず」といへるを告ぐるもの有り。天民點頭して、「東涯よく我を知れり。自から奪はむは、はかるべからず。唯人の爲には欺かるべからず。東涯は是に反せり。危し」といへり。其の器量凡此のごとし。官に上書し、松前に續ける蝦夷の地を本邦に屬せしめむの志ありしかども、齡足らず、三十有九にして歿せれば、事に及ばず。また國學をも心得たる人なり。伊勢物語芥川の段を評して、「比喻の體、神代卷の文法をうつせるものなるべし」といへり。(此の説は左注によりていへり。加茂真淵が左注は、後人の裏書なりといふ説に

徹書記一名
は正徹、東
福寺に入の
る、歌を善
くす、長祿
五年寂す
松井幸隆
京都の歌
人、中院通
茂の門人、
後に一家を
成す

は違へり) 又徹書記のよめる都擣衣の歌に、

聞くによも麻にはあらじ都人うつやいかなる衣なるらむ

といへるを難じて、「擣衣の情にあらず。都といへる題をたしかにせむとて、麻にはあら

じ、綾か錦かと心をつけむは、いと卑しき心ばへなり」といへり。又松井幸隆が「寄車

戀の歌、

牛ながら引も入れやとあけて待つ我が門過ぐる小車や誰

是は源氏物語はよきどの方違のところ、「牛ながら引きいれつべき門やある」といふ詞

を取りてよくよめる、といひあへりしを難じて、「かくては何某の花奢をのこが、妾の家

のさまなり。戀の歌は、いかにも人目を憚るこそ似あはしからめ」といへり。(按ずるに

此のうた、近比上木せる幸隆の家集には見えす。幸隆にはあらざるか、若又集を撰ぶ人

省きけるか) 其の自詠ははつかに一首を聞けり。その故郷鳥羽にゆきて、

霞みけりさすがに春と白鳥の鳥羽山松の雪けながらに

以上は前に出せし大橋の妹の尼の傳をも話せし馬杉亨安老人、始は仁齋に學び、後

此の門人となりしが、昔語なり。天民の説は、此の翁ならでは知れる人もなく、予



秋齋問語
多田義俊の
隨筆

度會の神主
風雅集、
度會朝棟の
歌、かたそ
ぎの千木は
内外にかは
れども誓は
同じ伊勢の
神垣、
千木鯉魚木
一原本千木
鯉魚に作り
木の字なし

ならでは聞き傳へし者もなくなりたれば、残りなくこよに擧ぐ。又此の老翁藏されし天民の著述「かたそぎの記」あり。國文もまた凡にあらす。しかも寫本なれば、知る人稀に、失せなむを惜むが上に、既に此の記をぬすみ略して己が發明にして、秋齋問語にかけるなどを惡むが故に、事長けれども全文を左に掲ぐ。

かたそぎの記

七尺ばかりにけづりたる木ふたつを、あぐらの足のかたち斜に打ちちがへて、神社のむねに、牛の角をいたどきたらむやうにたてるものあり。ちぎとぞいふ。または、かたそぎともいふ。あるはかつを木ともいふ。度會の神主の、「かたそぎの千木はうちにかはれども」とよめる。木のはしをかたくにそぎたれば、かたそぎとはいふ。打ちちがへたれば、ちがへ木といふをはぶきて、千木とはいふなり。かつを木は、丸き木を三尺四尺ばかりにきりて、あるは三つ五つばかり、かたそぎの間に横に打ちならべたる物をぞいふ。ほしたる鯉魚やうのかたちにかよひたれば、かつを木といふ。千木鯉魚木はおなじ物にあらず。延喜式に千木鯉魚木、とりはなしてしるしたれば、そのわかちいちじるきにや。さて此の二つの木枝葉のものやうに見え侍るに、内外にかはれども

かはらひは
だ一瓦葺、
檜皮葺
みづの御あ
らか一至尊
の御殿

寶基本記一
神道五部書
の一、大神
宮御造營の
事を記せる
者

誓は同じなどよみ侍るは、ふかきことわりこそ侍らめと知らまほしくて、人にたづね侍れば、色々にぞいふなる。みなそのころ得ぬことをのみぞいふ。その中にも、是は何のふかきことわりも侍らず、上りたる古の代には、人もすなほに、事もすくなく、かはらひはだなどやうのうるはしき宮づくりもまだなく、あめの下しろしめすすめみまのみづの御あらかも、みなわらちがやなどにておほひぬべし、いまもわらふきたる屋根のかみには、わらをふとくつかねて、なりは今の人のかしらのもとどりゆひふせたらむやうにて、神社のかつを木おきならべたるすがたしたるものあり、田舎の人は是をからすをどりといふめる、是なくては屋根ぬひたるつかねのなはぶしあらはれ出でて、雨露霜にくちはつれて、やねのことぶきみじかければ、かならず是をぞおく、むかしもわらふけるものには、かくてありつるを、檜皮にうつりても、猶このかたちをのこして、かつを木とはいひたるなりとぞ。これらぞさもありぬべきことなり。ち木といふものぞ、わきてしれがたき事にや。寶基本紀といふ古きふみに、ちぎは智義なりなどいふよりはじめて、内外の宮の内そぎ外そぎ、陰陽のかたちをのこしたるなど、何くれのふるきことわりをとき侍るも、さまざまに多かれど、さもありぬべきともきこえたらず。わらふ

中臣の被一
延喜式にあ
る大詞の俗
稱

くべき屋根は、先ほねとする木をひだりみぎりより打ちちがへ、この木を便としてさてぞふく、田舎人は合掌の木といふ、此の木の打あはせたる、人の手ふたつをあはせ、佛ををがむに似たれば、かくは名づくるにや、いまはこの木のあまりを切すて揃へ調へたり。あがりたる代にはそのまゝに殘して、かく屋のうへに出したるなり、是もあながちになだらかにとよのふる事を事とせざる古の風なり、それをのこしてぞ今は檜皮ふけるにも、神の社には此の木をまうけたるなり、そのかみはおのづから無くてかなはざる事に侍るめるを、ひはだにてふきかへたる後は、やうなきものの様なりとぞいふ。是らのことわりや、少しかなふべきやうなり。されど中臣の被に、宮柱ふとしきたち、千木高知て、みづの御あらかに仕まつれるといへるは、皇居のいかにもゆたけやかに、きよらかに作りたてられて、いつくしきさまをかきつらねたる辭どもなり。宮柱ふとしきたてる宮居は、かやぶきにまれ、わらぶきにまれ、そのつくれるさまは、清らにとよのひたるをぞせにすべきに、この合掌のするきりそろへすて、屋根のへにつらぬきいだしたらむ、田舎の里ばなれなどの、山のはし、藪がくれに、木ぞ竹ぞなど取りしばりあはせて、古きむしろ、破れごもやうの物とり重ねおほひて、老いさらほひ、病みつかれ

たるかたるなどをおし入れおきたるものの屋根のやうにはいかでかあらむな。千木は合掌の木の末をあましたるすがたならむといはむも、まさしき事ともいひ難くや侍らむ、猶べちのことわりこそ侍らめ。されど、かうやうの事は、ふかくこゝろにいれぬ筋なれば、しひてもたどらずしてやみぬ。正徳三年長月ばかりに、京の北なる岩屋山見にまかりける道に、雲がはたといふ山里を過ぎぬ。すこしおくまりたる家に、千木さし揚げたるをふと見つけぬ。あやしの事や、是は神の社にする物を、かくむねくしからぬ家につくりたるは、心得ずも侍るかな。かうやうの世にうとき片山里などは、古きこともつたへて、種姓などいひはけむ、もして遠き昔にありけむ國の宮づこなどいひけむたぐひの子孫の、はふれにたれど、猶むかしおほえて、かくことなる家作して住むなるにこそと、おしあてにおもひなす。知らまほしくて、田がへしするをのこに問へば、「これは何の事もなき里人の家居に侍る」といふ。「あのやうの木は神の社にこそするなるを、ことわりこそあらめ」と猶とへば、「さることは知りはべらず。昔より誰々も仕りなれたる事にて、あやしむべき事にも侍らず。是よりかく入り給はば見たびなむ。何れかあのやうの木なき家や侍らむ。心得ぬ仰せごとも侍るかな」とて、すき打かへして後は、

むねくしからぬ家立派ならぬ

はふれ一零落し

見たび一見給ひ

からすをどり一鳥躍、茅葺の屋根の上に横たへたる竹、茸茅など束ぬる者

しかぐいらいらへもきこえず、むづかしのとひごととはらだちたるなり。山里人のかたくななるくせなるべし。入り行くまゝに見れば、けにもいとさよやかなるふせや、つちかべに窓ぬり残したるあばらやまでも、大かたは千木をぞ揚げたる。猶ことわりもあらむと深くとはまほしきに、翁にあひぬ。かせぎにあふごかけて、道のかたへにやすむ。爪木に折りそへたるを見て、「是はあけびとやいふ」などいひよりて、さてごとふ。指さして、「かれはなにのためにする事にか」とへば、打笑みて、「わらにてふき侍るは、軒端よりゆひふせもてのほりて、終の束ねはおそひ竹をかためとし侍るなり。されど、風強く吹きしきる比は、大かたは此の破風ぐちより吹きはなちはべるに、おそひ竹ばかりのかためにては、風のちからにかちがたく侍るに、此の木のおさへたるにぞ、風には吹きあけられざるなり。かはらや板ふけるやなどには、おのづからかよるくだくしき事はなくともはべる。わらやはかくてぞ」など、恥かしけにいひけちつ。此のおそひ竹といふを見れば、長き竹を屋根のむねに三本ばかりならべて、からすをどりの下にぞ通れる、棟をおさへふせたるなれば、おさへ竹といふべきを、辭のかよへるにて、おそひ竹といふにや。此の山人のいふにぞ、ち木といふ物のかやぶきなどには、かならずまうけつべ

八十の伴の男の云々、百官有司の常に出仕する皇居

るうじて一嘲弄して

きことわりいちじるくぞ知りぬ。八十伴の男の朝な夕なにいでいりつかうまつる宮居のわらぶきは、たかくこちたくふきわたしたれば、この木をもそのほどに合せて、ふとくたくましき木を高くそびやかして、あめにさよふるかと思ゆるばかりにぞすめる。さてぞ高天原に千木高知りてとはいふなる。むかし今の人の心得がたき事にいひあつかひなやみたる事を、けふぞ思ひとりぬるよと、ひとりゑまる。さて「此の木の名をいかにいふにや」ととへば、「かつう木」とぞ。「いかでかつう木といふにや」と重ねてとへば、「かつう木にて侍れば、かつう木とは申侍るなり」と、ことわりも聞えぬこたへをしつゝこゑすこしとがりて、むづかしきかほくさして、柴打ちかたけつゝ立ちて行く。くだくしく問ふを、るうじていふにやとあしく思ひ違へたるなるべし。今すこしよくも教へよかし。になふといひ、かづくといひ、かたぐるなどいふことばを、このわたりにては、かつうとぞいふ。この木の屋の棟にうちまたがれるすがたの、かの肩に物をかづくさまに似たれば、かつう木とはいふとはさてぞ知られぬ。からすをどりやうの物をかつを木といふ。此のち木をば、そぎとも、さてはかつう木ともいふべきなり。此の木をかつを木ともいふは、かつうぎといふをあやまりていふにや。一とせ伊豫の國にまかりて、熊山

くつて鳥一郭公の異名

くつてこふ一沓を買ふ錢を乞ふと云ふ意、郭公の鳴くは前生に沓賣けになりし時か催すの價をといふ傳説

といふにいたりぬ。松山といふより七八里ばかり、ふかく入りもてゆく所なり。僧空海の住みたりし岩屋山つゞきたり。石道踏みなやみていたく困じたれば、山里に到りて馬を借りて乗る。口につきたるをのこ、物いふさま打ちゆがみて、こと國の人のやうなり。折節郭公の啼きけるに、「これは何鳥と知れる」と問へば、「是はこつてどり」と答ふ。歌草紙に郭公をくつて鳥といふ事を書きたり。歌よむ人もなみくは知り侍らぬ事を、をかしくもあるかなと、「などで、こつて鳥といふぞ」と問へば、「あれきよめせ、こつてかけたるかと鳴き侍るなり」といふ。「さてはくつてをこふといふ昔物語知りつらむよ」とて、馬子にとり合せてるうじて笑へば、心得ぬかほつきにて、「こつてにこそ侍れ。沓代と申さばこそよ」とつぶやく。「心得ず。こつてといふものあるにや」と問へば、「五月の比柴の若葉にこつてといふもののでき侍る。此の鳥めらは、必ずこつてのいできはべる時にこそは、かまびすしく啼きどよみ侍る」とぞいふ。さて「此の鳥をほとよぎすともいふか」と問へば、かしらるふる。「さらばこと鳥にほとよぎすといふ鳥やある」ととへば「つひにしうけ給はらず」といふ。ほとよぎすといふ名を知らぬ國もありけるよと、ともなふ人皆笑ふ。さてぞ歌草紙には、こつてといふ事を、あやまりてくつてと云ひなして

こゝらの人
— 數多の人

失ひては云
云—孔子の
語、禮失ふ
時は之を野
に求むと云
に據る
法皇御封—
靈元法皇の
御領地

沓賣の生れかへりしなどいふ事をそへたりとは知りぬ。かのこつては木のみのやうにて、柴の葉のうらになりいづる者とぞ。このくつて鳥のこつて鳥といふがまさしきすぢなる事は、誰か思ひより侍らむ。千木といふものも、こゝらの人さまなくにもてあつかひきこえけむに、是もまさしき筋をば遂に知り侍らざりしに、かく片田舎の山里にてならひ知り侍りぬれば、失ひては田舎にもとむるといふはかうやうの事にこそ。雲が畑といふは京より三里ばかりも北へ入りて、愛宕の郡小野の郷の山里、法皇の御封なり。谷川いと清く流れたり。香魚を貢として供御に獻るとぞ。

子文轉纒二歳の時父に別れしかども、其の意を嗣ぎて醫を業として京師に名あり。學文の名はさしも聞えざりし。六十餘にして近年歿せり。天民の説に、儒は醫を兼ねべし。然らざれば、貧にして學卑陋に落つといへりとぞ。(私按するに、仁齋文集には儒醫の説ありて、儒を名とし、利を醫にはかる事を誦れり。所見異なり) ○因に記す。右門人の馬杉老翁は老いて健なる人にて、九十に近き比、嵯峨へ花見に歩み、嵐山の奥大悲閣の開帳に詣で、明の日また岡崎の歌の會に行き、その明の日又孫に誘れて、再び嵯峨に遊ばれしが、今日は老人の達者だても見苦しとおもひて、

膳所—近江
滋賀郡膳所

夕定晨省—
朝夕、父母
の安否を問
ふ事、禮記
に出づ

老子經の云
云—老子第
三十九章の
語

大悲閣へは孫ばかりやりて、大堰の川邊に休らひ、花計り見てありしといはれき。膳所の親族の許へも折々歩にて遊ぶ。道悪きにも、足駄にて京中の歩行は苦とせず、唯老のひとり歩みを子息のわぶる故に、友を誘ひて何處へも行れし。眼もよくて此の比まで細字の寫本をもせられし。殊に歌を好みて、若き時は高松宰相重季卿の御門人にてありしとぞ。歌集は生存の日、予にも托せられて、一校合に及びぬるが、よき歌ども多かりしを、おほえず。中にも珍らしきが心にとまりしは、

女親に夕定晨省の孝ある人、宮仕へにより、かりそめに江戸に下るを歎きけるに、大義を示して錢別せらる。

たらちねに仕ふる道も二つなきこゝろにいそげ東路の旅
胡子無髭といふ古則を題して

よしの山花は一木もなかりけり峰にも尾にもかよる白雲

老子經の車をかぞへて車なしといふことを

數ふれば身は小車のわれもなし何にひかるよ心なるらむ

山家を

そは山の
とありあり
論語里仁
篤に徳不孤
必有隣

佛乘一佛經
活人一醫療
鼎湖の神書
云々一黃帝
書を僧
に受く
長沙の心法
漢の長沙
の太守張仲
景の祕術
黃蘗の開祖
一隱元師禪
高泉一黃蘗
第五世の僧

こよのそはかしこの谷に住む里は必ず隣ありとしもなき
これは下の句に、おもひよらず論語の語を用ひられしが興あり。
はつか月を

老いらくの末はつかなる身にぞ思ふ今より月の宵々の影
ことに殊勝にぞ。百歳までもと見えしが、老健のたのみがたき、九十四にて歿す。

北山友松子

友松子は、北山氏、通名壽安といへり。長崎の人、唐人丸山の遊女に會して産める所なりといふ。醫をもて出身せし時、その系圖を問はるとに、たゞ長崎遊女の子とのみ書き付けて出したる器量を、世に稱せしとぞ。其の徒の記せるを見れば、其の爲人名を名とせず、利を利とせず、能く善をよみし能く悪をにくむ。性佛乘を好み、癖活人を嗜む。是をもて鼎湖の神書を閩の浮屠に授かり、長沙の心法を浙の異人に傳へ、日に惟ひ夜に思ふ事三年、心融け、疑釋け、求めに隨ひて治を施すに、効驗桴のごとく應ず。未だ三十ならずして洛に至り、諸國の諸侯の爲、賓をもて優待せらる。又黃蘗の開祖、及即非高泉の

周正一顯懸



東垣丹溪
神醫
共に元代の
増廣口決集
友松子の
著述
商量—議論
含糊に忍び
ず—曖昧に
付するに忍
びず

諸大老贈言して美せらるといへり。その著述を見るに、實に博學強記なるが上に、治療の才前後その類稀なれば、其の徒の記せる旨、私せるにはあらじ。凡當時は醫名ある人といへども、東垣丹溪の窩窟をいづる事能はざる間に、獨り長沙の長ずるを規範とし、下明末の諸家をも採りて、佐使とす。其の言に曰く、「如爲人治療則不可不_{カラ}全讀_{バアルクマ}仲景之書也。」又文字の格法を明にせる所は増廣口決集に、中山三柳の文章文字を改正せしに見ゆ。加之多能にして卜筮風鑑地理星命の學のごときも、門人の才を量りて是を誨ふとかや。或は醫人と商量、則告之に親疎を不別、其の非を見ては人に譲らず、觀面に辨明し、其の誤りを聞きては、含糊に忍びず、慕直に討論す。唯此の人に補なくして、方寸に愧づる事を恐ると也。故に世醫或は狂とし、或は直とし、且譽め且毀るとかや。門人の請によりて所著、刪補衆方規矩、評議纂言方考、増廣口決集等、皆四十未滿の所爲なり。後又方考繩愆あり。凡著述、他の書によりて吾が意を述ぶるものにして、一家の成書なし。是即一家の所立なるべし。尙此の人の生平につきて、聞き傳ふる話も多けれど、疑はしきをもてこよに録せず。

戸田旭山

東備—備前の國

不起の症—不洽の病

旭山戸田氏、自號无悶子、通名齋宮。東備の人、浪華に來て、醫を業とす。門に艸醫戸田齋宮と標せるもめづらし。或は唐服に似たる物を著て、劍を負ひて歩きし事もありしとなり。本艸に委しく、醫生のみならず、好事の士門人となれるもの多し。香川太仲、秀庵が藥選を難じて、非藥選を著し印行す。爾れどもまた秀庵の才を愛して、その子はこれが門生とせり。好みすれども其のあしきを知り、憎めども其のよきを知るといふべし。醫療もとよりよくすといへども、病客拾人に限りて、此の數闕ざれば、また他人を療する事なし。故に貧なり。或時攝津國高槻近邑の豪農、物産の門人にて常に出入する人、其の母の病の診察を乞ふ。請に應じて至りしが、不起の症なれば辭して歸らむとする時、近隣又親族の病人これかれの診察を乞ふ。四五人は診したるが、遠く迎へたる人なれば、此の折を幸に尙醫治を乞ふもの多し。こよにして戸田氏怒を發し、主人に對し罵りていふ、「子は不孝者なり。不起の母を題して、えも知れぬ人々の醫治をせしめむとするか」と元來癩症にてよく怒る人なれば、大きに顔色を損じたれば、やうくになだ

めて謝して歸せり。其の後横堀邊にてやらむ、磁器を買はむとて、とあるみせへたちよりにしに、内より一老婆出でて、戸田氏を見てさめぐくと泣く。驚きて「何事ぞ」といへば、婆云ふ、「公は知り給はぬ事なれば不思議におほしめさむ。吾さきに愛せる孫ありて、病重かりしかば、公を迎へしに、拾人に限り給ふ病人闕なしとておはしまさざりしが、孫は終に身まかりぬ。時節にてもあるべけれども、もし公の手を経たらば生きもし侍らむにと思へば、公の御かほを見るにつけてうらめし」とて、涙せきあへず。ことよにして戸田氏甚感慨して曰く、「吾あやまてりく。もとより數人に心を配り難しといへども、拾人と數を限れるは、吾あやまりなり。然れども吾老いぬ、今更此の限を越えば、老いて利を貪る心生ずといはれむも口惜し。吾は是にて果てむ」といひしが、後いくほどなく歿せしとなむ。是は物産の門生、したしく見聞く人の物語なり。

隱家茂睡

茂睡—初め戸田氏、後渡邊氏に改

茂睡は江戸御家士にて、隱遁せる人なり。隱家とも、梨本とも、もとめぬ橋とも、名を負へるは、そのよめる歌によれり。されど、其の隱家のもとの歌は書きあやまてるにや、

む、名は恭光、通稱八兵衛、寶永三年歿、七十八年

制詞—用ふることを禁ぜられたる詞、琴柱に云々、用する事を活知らざる事、陳涉—秦の二起すは、秦滅ぶ

いとも心得ぬ事あれば、ことにはもらしつ。かくれ家百首とて、其の相知れる人々よめる歌をあつめたるものあり。其のはじめに出せるは、

すむ庵を世の人のかくれ家といふをきよて、

人しれぬ身に任すればおのづから求むともなき隱家にして

梨本といふは、もとより其の庵の前に山梨の木あれば、

のがれかね世にふり果てし老の身は隠れ住むべき山梨の本

もとめぬはしといへるよしは、源義豊といへる人のもとより、

隱家は山ももとめず世をわたるためにやかけし前のたな橋

とよみておこせたる返事に、

わが庵は山ももとめずたなはしの短く見つる世を渡るほど

といへるによれりとなむ。此の人梨本集といふものを著して、制詞の類を擧げて、琴柱に膠すべからざるを論ず。凡歌道に古學を稱ふるは、此の人近世の魁にして、秦の陳涉に比すべし。さればこと其の説を記す。梨本集は一旦江戸にして梓にのほりしかども、

その本、世に流布せる事稀に、知る人少ければなり。其の序にいはいはく、

本名たけそ
か―共に萬
葉集歌にあ
る古語、本
名はもだし
なしの意、
たけそかた
またまにの
意
格式―法則

正木のかづ
ら―蔓草の
一種、長く
と云ふ語の
序

古今集の比より萬葉集によみたる詞の中にも、「いづくの戀ぞつかみかよれる」こ
こだく待てど君がきまさぬ」などやうの詞を用ひず。其の比さのみ人のつかはぬ、本
名、たけそかの類、又こはくしくして聞きぐるしき詞をよまざりし故、是より詞の
善悪は出來たる事なり。本來の一物に善悪邪正はなけれども、陰陽と分け、清濁輕
重天地となりては、善惡勝劣ある道理也。然れ共人の心まちくになり、好む事を是
といひ、好まぬことを非といふよりして、誠の善悪は脇になりて、私の好惡の沙汰
になりしより、僻言多く出で來りて、それより末々には、先達の僻意を道の格式と
して、ますます僻言を取立てしより、我意地儘に利口をたて、よろしからざる例を
引き、あるまじき遠慮をいひて、廣き御惠み、賤の男賤の女までも、此の道におもむ
かむに何の障もなく、廣々と通り、正木のかづら永く傳り、近くは人の心を慰め、
憂を忘れ、遠くは家をとよのへ、國を治むる中だちと、思し召して、撰集をも仰せ
付けられたる事なるに、何れの比よりか、歌の詞に制といふ事を書き出し、五てん
の詞、主ある詞、よむまじき詞、遠慮すべき詞、俊成の好みよむべからずと宣ひし
詞、定家の不庶幾と宣ひし詞、にくしといふ詞、いとしからずといふ詞、といひて、

六條家―藤
原顯季の流
二條家―藤
原爲氏の流
冷泉家―藤
原爲相の流

五節句―人
日(正月七
日)上巳、端
午、七夕、重
陽の五箇の
節日

詞に多く關をするて、人の趣きがたきやうに道を狭くする事は、以ての外の邪道
歌の零廢すべき端かと思へども、歌の道不案内なるに、能き師もなければ覺束なさ
に、此の冊を思ひ立て、不審を書き記すものなり。(中略)惣じての事、六條家の説を
ば二條家より言ひ破りて用ひず、二條家をば冷泉家より誦り、其の後には爲世卿の門
弟、爲兼卿の門弟、爲相卿の門弟、其の家々を立むとて、他を誦り、我が意地のま
まに利口をたつるより、色々の僻言出で來たり、又は其の師匠の物語に假令ば、ほ
のほのといふ五文字は人丸の名歌の五文字なり、然れば心得してよみ候へ、などとい
はれたるを、其の弟子覺書にして置き、又は物語したるを、其わけをば知らず、讀む
べからざる五文字と制せられしといひ傳へて、今はよまぬことになり極れり。つよ
とまりの事を法度なりといふは、たとへば其の家の仕置に、酒を呑むべからずと法度
にたて、物見すべからずとあるに同じ。此の法度なければ、酒を過し、遊興にばか
りかよりて、作法のあしくなる故なり。然るに正月、又は五節句にも、祝言珍客にも、
酒は家の法度なりとて出さず、正月の萬歳、伊勢の代神樂の太鼓打を見るなど制す
ることくに、つよどめをもいふは僻言と思へども是非なし。(下略)

序文猶かよる議論多く、本分には近古制せられし詞を題して例を引き、はた制の詞とたてたる一冊、その外詞の注の證歌、主ある詞などいふも皆新古今の歌の事のみを書きて、他の事を用ひざるは、新古今集ばかり知りたる人の仕出したる事のやうに覺ゆなど云へり。歌書におきては、古より近世に及びて、甚博識と見ゆ。書きざまは通じやすからむ事を思ふ故にや、俗言にて、又くだくしき所もあれど、其の見所は拔羣のものなれば志ある人は求めて見るべし。其外著書の名目、おはづかし。茂安がひとり言、僻言しらべ、庄九良物語、紫の一もと、若紫など、梨本集の奥にいでたるは、世に傳りてありや知らず。梨本集を著す時元祿十一年戊寅五月、齡七旬にあまりて、赤貧の由を記すはいかど有りけむ。「無學無智にして道理に通じ、歌學をもつとめざれば、歌をよむことなし」といへるは、卑下にして、自負なり。奥書には露寒軒とも見えたり。

僧 丈 艸

丈草、俗姓は内藤、世々尾張犬山の臣なり。繼母に仕へて孝あり。弟はその生める所なれば、家を譲りて父を慰めむと謀り、右の指を疵付けて「刀の柄握りがたし」とて仕を



辭し、剃髮し禪を宗とす。其の時の口號

多年負屋一蝸牛。

化做蛤蜊得自由。

火宅最惶涎沫盡。

偶尋法雨入林丘。

涼風にきゆるを雲のやどりかな

湖南の風景を愛しけるにや、粟津の龍が丘に庵を結びて佛幻庵と號く、今土人岡の堂といふものなり。もと詩文を好みしが、又芭蕉の翁に従ひて俳諧を能くす。されば此の庵も翁を開祖とす。其の滅後三年籠りて、一石一字の法華を書寫し、經墳に築けり。寐轉艸といふ書を著して、道俗をいましむるものは、名にも似ず、寐ながらはよみ難き、殊勝のものなり。此の師唯俳諧をもて名を知られけるに、かへりて其の清操はかくれたるべしと惜む人もありき。俳諧はその旨とする所にあざればこそ、芭蕉も此の道にのみ遊ぶ人ならば、其の至る處知るべからずと評せられき。其の門人の發心せるを警策して、蚊屋を出て又障子あり夏の月など、其の意凡ならざるを見つべし。元祿十七年二月二十四日、其の庵に寂す。

湖南—近江國琵琶湖の南畔
一石—一字の法華—一石に法華經の一字つづを
書く事
警策—注意を興へて

安藤年山附朴翁

年山安藤氏、諱爲章(初名爲明)通稱新介(初は右平)本國丹波千年山なるをもて、自ら年山を號とす。其の兄内匠爲實と共に儒を學び、父の由縁をもて共に伏見宮に仕ふ。後又同じく水戸に参りて、彰考館の寄人にて、日本史及禮儀類典の撰にあづかる。兄は七百石、弟は三百石を賜ふ。兄の人からはよく知らず。爲章は國學をも好み、詠歌は中院内府道茂公御門人なり。源義公、僧契沖に萬葉の註を求め給ふに及びて、命を受け、しばし浪華に至りて其の説を受く。されば、契沖の行實を著して、其の著書年山打聞に記せり。今此の冊子に取れる所なり。凡此の打聞のうちに著はす所をもて、其の學術も、人と爲の温恭もはかり知らる。又紫女七論を出して、式部の賢操才秀を褒め、源氏物語の大意をも委しく論ず。惜むらくは梓に上らざれば、見る人少なし。其の歌集を千年山集といふ。尤此の人に於て擧げいふべきは、家祿を益し賜はらむの命有りしとき、産子なきをもて辭し、終に他姓を養はず、身歿して家も又絶えたりとなむ。人のなし難き所にして、吾が天を安んずるの節義稱すべし。兄の家は今猶彼の府にありて、子孫相續けりとぞ。

日本史—大禮儀類典—水戸徳川光圀卿撰

陶靖節—晉の高士、陶淵明其の作歸去來辭名高し

侯—讚岐國那珂郡丸龜領主、京極家侍讀—君側

(子なきをもて祿を辭せる一條は、丹波出雲の社司其の族にて語るところなりと) 其の父朴翁、初め伏見の宮に仕ふ。致仕の後、祖父の故址をもて、千年山の麓尾口村に隣りて抱琴園を修理し、老を安んず。山家の記といへる一篇、年山打聞に出づ。假名にて文章いとよし。陶靖節を慕ひ、歸隱の圖を自から壁上に畫き、其の集を左右にす。又佛理に參し、樂を好む。祖の時其の圖に八ツの景を名付けしが、荒れ行く所も見ゆるにつきて、是をも自からうつして子孫のために残すとて、千年山八のさかひを寫繪の是だに残れ問ふ人のため考かく凡人ならざりしかば、息兄弟の傑出せるもうべなり。

井上通女

通女は、讚岐國丸龜の士井上儀右衛門某の女、幼より書を読み、詩歌ともに成人にまされる才女なり。十八の比ほひ、其の君の母君に侍して江戸に行く。此の時の道の記を東海紀行と號く。九年を経て歸る時の記を歸家日記といふ。後三田茂右衛門といへる士に嫁し、傳右衛門義勝を産む。是侯の侍讀の儒臣となり、才志論、養子訓等を著す。通女

にありて書を講ずる役

著はす所は、右二紀行の外に、其の家集を和歌往事集と名づく。詩歌は紀行の印本なるに譲りてこよにはもらせり。其の氣象の秀をいはゞ、盤桂禪師と儒佛を論じて、戲によめるといへるに、

常にゆく道なくばこそ世をうみの蟹の乗りたる舟も頼まめ

此の女の事に聞ける話もあれど、さだかならねば記さず。

有馬涼及附子孫三人

蘭嶋—紀州藩の儒士、伊藤仁齋の第五子

有馬氏、涼及の名、父子兄弟に及ぼして四世醫を業とす。伊藤氏と四世の交りあるよし、蘭嶋の傷寒論神解の序に書けるは、仁齋先生の考より東涯、蘭嶋兄弟を経たるなるべし。世々國手の稱ありて世々不拘なり。其の狂態傳ふる所の笑話多し。初代涼及臥雲と號す。又存庵といふ。

後水尾院特に徴して御醫とし、階法印を賜ふ。御療の故事は、衆醫評を経て後御藥を奉るを、一時、帝御惱甚しき時、翁診し奉りて曰く、「我よく治し奉らむ。然れども衆議を経るとならば能はず」と、止む事を得ず翁が意に任するに、頓て調製し、手づから煎じ

御惱—至尊の御病氣

